

県道大津守山近江八幡線単独道路改良工事に伴う

五条遺跡発掘調査報告書

—中主町五条所在—

1988.3

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりにくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このように大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに県道大津守山近江八幡線道路改良工事に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化保護のご理解に役だてていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました。地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和63年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯 田 志農夫

例 言

1. 本書は、県道大津守山近江八幡線単独道路改良工事に伴う中主町五条遺跡の発掘調査報告書で、昭和57～59年度に現地調査を実施し、昭和60～62年度に整理業務を実施したものである。
2. 本調査は滋賀県土木部道路課からの再配当により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、(財)滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

昭和61年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長 服部 正

課長補佐 田口字一郎

埋蔵文化財係長 林 博通

主任技師 用田 政晴

管理係主任主事 山本 徳樹

(財)滋賀県文化財保護協会

理事長 南 光雄

事務局長 中島 良一

埋蔵文化財課長 近藤 滋

調査二係長 大橋 信弥

総務課長 山下 弘

囑託 中谷サカエ

昭和62年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長 服部 正

課長補佐 田口字一郎

埋蔵文化財係長 林 博通

主任技師 用田 政晴

管理係主任主事 山出 隆

(財)滋賀県文化財保護協会

理事長 吉崎 貞一

事務局長 中島 良一

埋蔵文化財課長 近藤 滋

調査二係長 大橋 信弥

総務課長 山下 弘

主任主事 立入 裕子

5. 本書は大橋と彦根市立博物館学芸員 谷口 徹が執筆、編集した。なお、遺物観察表の作成については、井浦由美氏の助力を得た。
6. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

I. はじめに.....	1
II. 位置と環境.....	3
III. 試掘調査の概要.....	7
IV. 発掘調査の結果—遺構—.....	15
V. 発掘調査の結果—遺物—.....	29
VI. おわりに.....	41

出土遺物観察表

挿図目次

- 第1図 位置図
- 第2図 トレンチ設定図
- 第3図 試掘坑平面実測図
- 第4図 試掘坑断面実測図(1)
- 第5図 試掘坑断面実測図(2)
- 第6図 H01～H05 第1遺構面、H11～H16 第2遺構面、H32、H33 第3遺構面、平面実測図
- 第7図 H17～H19、H13、H20～H24 第2遺構面平面実測図
- 第8図 H04、H05 第1遺構面、H33～H36第3遺構面平面実測図
- 第9図 SB01、SB02、SB04 平面実測図
- 第10図 SB03 平面実測図
- 第11図 各遺構断面実測図
- 第12図 出土遺物実測図(1)
- 第13図 出土遺物実測図(2)
- 第14図 出土遺物実測図(3)
- 第15図 出土遺物実測図(4)
- 第16図 出土遺物実測図(5)
- 第17図 出土遺物実測図(6)
- 第18図 出土木製品実測図

図版目次

- 図版1. 遺構上：調査前景（北より）
下：試掘調査風景（北より）
- 図版2. 遺構上：試掘G1近景（北より）
下：試掘G3溝状遺構（西より）
- 図版3. 遺構上：試掘G4近景（南より）
下：試掘G4下層調査状況（南より）
- 図版4. 遺構上：試掘G6近景（南より）
下：試掘G7近景（南より）
- 図版5. 遺構上：試掘G14近景（南より）
下：試掘G15近景（南より）
- 図版6. 遺構上：試掘G18ピット検出状況（南より）
下：試掘G19下層調査状況（南より）
- 図版7. 遺構上：試掘G22近景（南より）
下：試掘G23下層調査状況（西より）
- 図版8. 遺構上：試掘G23東壁断面（東より）
下：試掘G24近景（南より）
- 図版9. 遺構上：試掘G25近景（南より）
下：試掘G26近景（南より）
- 図版10. 遺構上：H01近景（南より）
下：H02近景（北より）
- 図版11. 遺構上：H03全景（南より）
下：H04近景（北より）
- 図版12. 遺構上：H05近景（南より）
下：H06全景（南より）
- 図版13. 遺構上：H12近景（北より）
下：H13南半近景（北より）
- 図版14. 遺構上：H13北半近景（南より）

- 下：H13S B01近景（南より）
- 図版15. 遺構上：H13S B02近景（南より）
下：H13S D01・S D02近景（南より）
- 図版16. 遺構上：H13土坑近景（西より）
下：H13S D03近景（西より）
- 図版17. 遺構上：H15全景（南より）
下：H15S B02近景（南より）
- 図版18. 遺構上：H17北半全景（南より）
下：H17S B03近景（南より）
- 図版19. 遺構上：H17北半全景（北より）
下：H17南半全景（南より）
- 図版20. 遺構上：H18S B03、S D05、S D06近景（東より）
下：H18S B04、S D07近景（西より）
- 図版21. 遺構上：H18S D07西壁断面（東より）
下：H23近景（南より）
- 図版22. 遺構上：H31全景（北より）
下：H17ピット内土器出土状況（南より）
- 図版23. 遺構上：H20下層甕出土状況（西より）
下：H11沼沢地下駄出土状況（北より）
- 図版24. 遺構上：H04・H05埋めもどし状況（南より）
下：H04埋めもどし状況（南より）
- 図版25. 遺物：G10・11（C005、C006、H011、H013、H015、H030）、G14（C045）、
G18（C048）、G24（E052、E060、E063）
- 図版26. 遺物：H01（C067、C070）、H02（C078～C080、C083、C086）、
H03（C091）、H07（C095、H104、H106、H111、B122）
- 図版27. 遺物：H07（H136）、H12（C142）、H17（C144～C148、C150～C152、
C155）
- 図版28. 遺物：H17（C156、C158、C165）、H22（C183）
- 図版29. 遺物上：G10・11（C001～C004、D038～D041、P036、G037）、G11（H042、
H043、B044）
下：G18（C046、C047、C049）、G21（D050）G23（D051）、

G 24 (E 053~E 059、E 061、E 062、C 064)

図版30. 遺物上: G 10・11 (H 008、H 009、B 022、B 024、B 025、H 029、Z 031~Z 035)

下: G 10・11 (B 007、H 010、H 012、H 014、H 016~H 021、B 023、
B 026~B 028)

図版31. 遺物上: G 26 (C 065、C 066)、H 01 (C 068、D 069、C 071~C 075、H 076、
B 077)、H 02 (B 087、C 081)

下: H 02 (C 082、C 084、C 085、D 088、D 089)、H 03 (C 090、C 092)、
H 05 (C 093、C 094)、H 07 (C 097、C 098、H 102、Z 137)

図版32. 遺物上: H 07 (G 101、H 103、H 105、H 107、H 110、H 112~H 114、H 116~H 119、
H 121、B 123、B 125、B 126、B 128~B 131、D 138、D 139)

下: H 07 (H 108、H 109、H 115、H 120、B 124、B 127、B 132~B 135、
C 096、C 099、C 100)、H 11 (C 140、H 141)、H 13 (C 143)、
H 17 (H 149、H 159~H 163)

図版33. 遺物上: H 04 (D 182)、H 17 (C 153、C 154、C 157、C 164)、H 20 (C 174、
B 175、C 176~C 180、P 181)

下: H 17 (C 166~C 168、H 169)、H 18 (C 170、C 171、B 172、D 173)、
H 22 (C 184、C 185、D 187)

図版34. H 01、H 02、H 03平面実測図

図版35. H 06、H 07、第 1・第 2 遺構面平面実測図

図版36. H 13、H 15、第 2 遺構面平面実測図

図版37. H 17、H 18、第 2 遺構面平面実測図

図版38. H 17、H 18、第 3 遺構面平面実測図

図版39. H 01、H 03、H 04、断面実測図

図版40. H 05、H 06、H 11、H 12、断面実測図

図版41. H 14~H 17、断面実測図

図版42. H 18、H 23、断面実測図

図版43. H 33~H 36、断面実測図

I. は じ め に

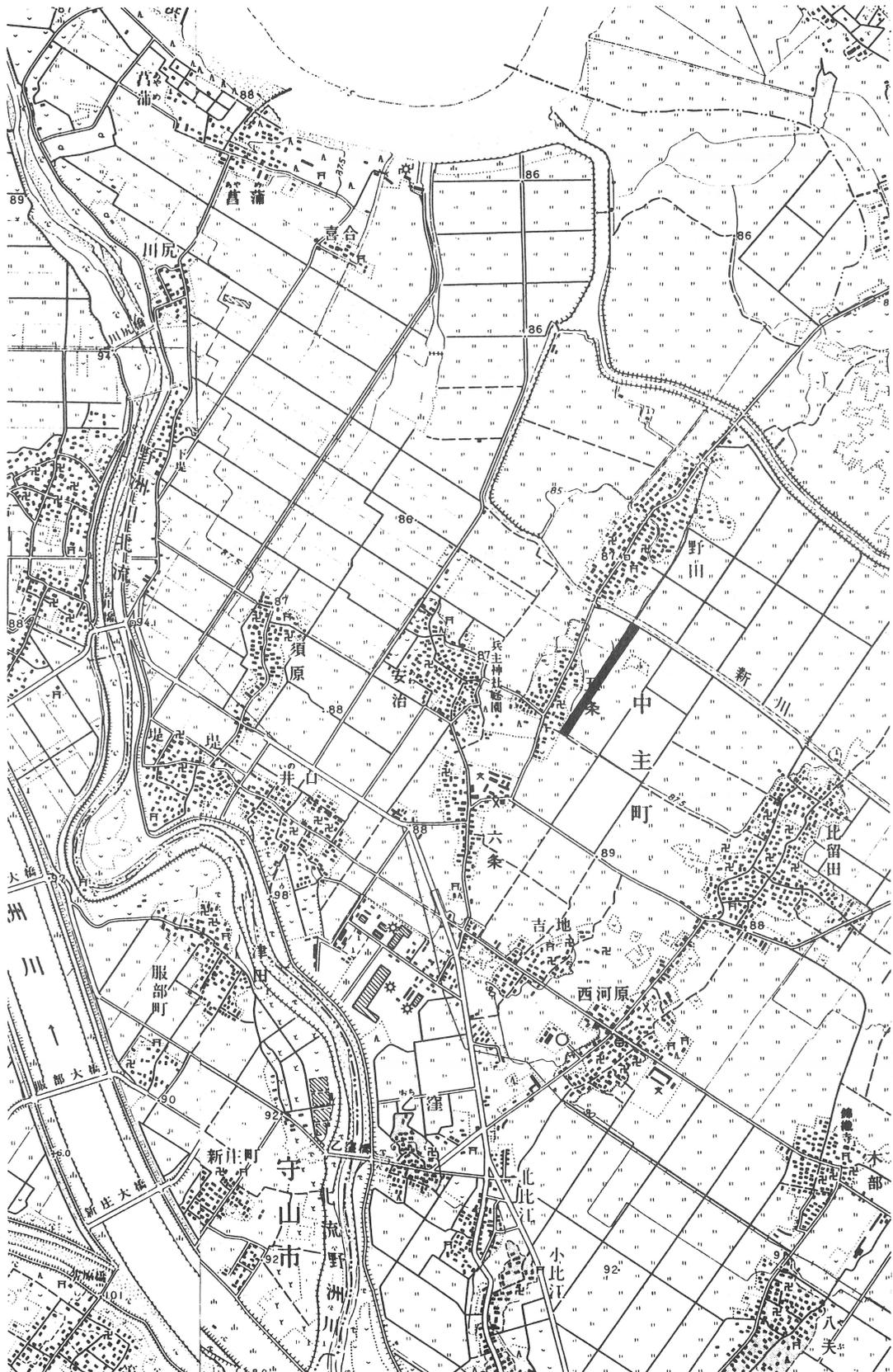
五条遺跡は、野洲郡中主町五条に所在する弥生時代から鎌倉時代に到る、拠点的な大集落跡である。これまでに、ほ場整備事業や体育館建設に先立って、数次にわたる発掘調査が実施されている。今回、本遺跡を南北に縦断する形で、大津守山近江八幡線のバイパス工事が計画され、昭和57年8月、昭和58年3月の二次にわたって、全線に試掘調査を実施した。その結果、別項のように、大半のグリッドで、3期にわたる遺構面が検出されたので、昭和58年4月・10月と昭和59年11月の二次にわたって、本格的な調査を実施した。調査は、道路幅が狭く、第1遺構面と第2遺構面を中心とし、第3遺構面については、崩壊の危険性があるため、部分的な調査に止めざるを得なかった。

なお、調査地が土地買収等の事情もあって、前後したことや、トレンチ番号が年次により異なったので、旧番号と本報告の番号との対照表を掲げることとした。(39P)

現地調査と整理調査に参加したのは次の諸君である。

(大橋 信弥)

川立 長司	角出 裕資	上形 徳行	北脇 邦彦
菅井 美博	田中 英一	南 清章	加賀爪久美子
伊藤 恭子	川下 晴美	田中 玲子	高野 聖治
西村 友博	清水多恵子	内池 芳枝	小林 辰弥



第1図 位置図

II. 位置と環境

中主町は、琵琶湖の南、野洲郡の湖岸沿いに位置している。当地はその南西を流れる野洲川によって守山市と境界をなし、北東を流れる日野川によって近江八幡市と画す他、町域北東には家棟川が流路を刻んでいる。中主町域の大半は、これらの河川による重層的な沖積作用によって形成されたとみることができよう。なかでも、その水源を遠く御在所山に発し、風化・侵食され易い粗粒の花崗岩地帯や古琵琶湖層の土砂を集めて流下する野洲川の影響は大きく、村落の多くが野洲川の旧流路が生み出したと考えられる自然堤防上に位置している。比江に始まり西河原から六条、五条そして野田へとゆるやかに弧を描いて伸びる村落は、その中でも最も良く発達した基幹的な自然堤防で、比江から分岐し八夫、木部に伸びる一条と、西河原で分かれて比留田方向に伸びる一条などが、支流的な堤防であったと予測される。かつては、これら大・中規模の流路に加え、小規模な無数の流れがわずかな低平地を求めて網状に流れを刻んでいたであろう。その過程で、おびたしい量の土砂が当地一帯を覆った。土砂の量たるや、他の地域の数倍に達する所も多い。このことが遺跡の発見を困難なものとし、ややもすれば中主町には遺跡が少ないかのごとき誤謬を生んだ。しかし、昨今町域で矢継早に行われる発掘調査は、それを根本から覆すに十分であり、むしろ各遺構・遺物の残存状態が良好であるという喜ばしい報告が相次いでいる。

五条遺跡も又、例にもれない。五条遺跡は現在の五条集落を中心に、東西約700m、西北約1kmに及ぶ長く広大な遺跡である。五条遺跡の本格的な発掘調査が実施されたのは、昭和55年にさかのぼる。体育館建設に伴ない4月から9月にかけて2次に分け実施されたもので、古墳時代中期末から鎌倉時代初頭に至る大規模な集落跡が発見されて話題を呼んだ。その後、翌年2月から5月にかけて同所にプールを施設する際にも調査が行なわれており、古墳時代後期の集落跡が検出されている。又、同年10月から翌年3月に近隣の中学校改築に伴なって実施された発掘調査においても、古墳時代中期末の大型掘立柱建物群が発見されるなど、古墳時代の集落跡を中心とする五条遺跡の様相が次第に明らかとなっていった。

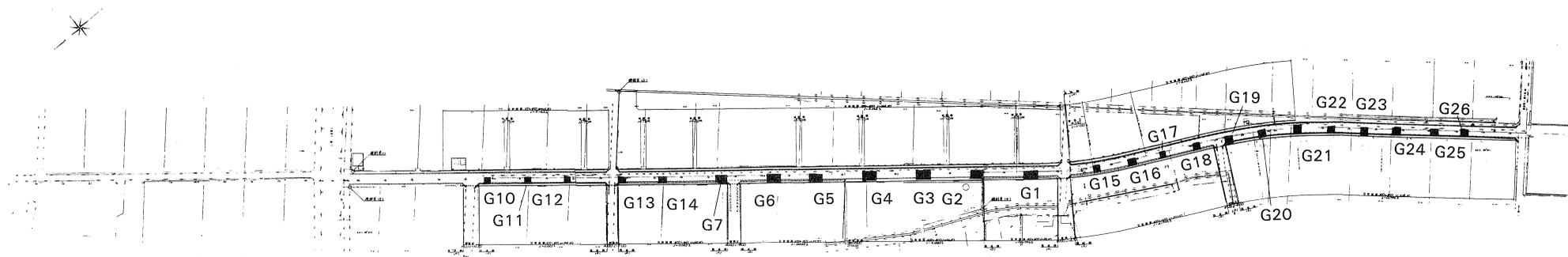
昭和57年度に入ると、兵主神社の文化財収蔵庫建設に伴なう調査が、年度始めから6月にかけて行なわれ、やはり古墳時代後期の建物遺構や溝等が検出されている。兵主神社境内における唯一の調査例として注目される所であり、境内からの採集品と伝えられる同神社所蔵の考古資料の一部とも相応している。

一方、同年9月から翌年3月にかけて実施された道路（県道六条野洲線）改良に伴なう広大な面積の調査では、古墳時代の遺構の他にも、弥生時代後期（前半）にさかのぼる遺構が発見されている。古墳時代の遺構は、前期と後期の2期に分けることができるようである。前期の遺構は遺物包含層下で検出したもので、建物跡のほか溝や土坑などで構成される集落跡である。

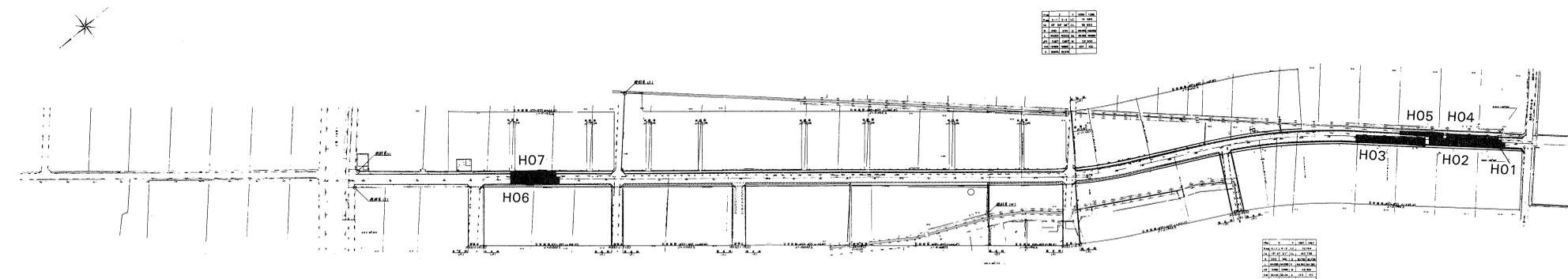
後期の遺構は、地下に埋没した古墳の痕跡と思われ、埴輪片なども出土している。中主町域では同期の古墳として木部集落の北に木部古墳が良く知られる所だが、それに対峙し五条遺跡の周辺一帯を配下に収めた豪族の古墳が発見された意義は大きい。弥生時代後期にさかのぼる遺構は、やはり墓域に関連するもので、接続する方形周溝墓3基が確認されている。一辺約7m、溝幅約0.5m、深さ約0.5mを計る。主体部は未確認だが、その後堆積した土砂が厚いため盛土が良好に遺存している。古墳時代を間近にひかえ、こうした墓制が中主町域にも出現することは、ある意味では当然とは言え、中主町における弥生時代研究に占める位置は大きい。

以上、五条遺跡を中心にこれまでの発掘調査の成果を概観した。その結果、五条遺跡は弥生時代後期に始まり鎌倉時代に至る一大複合遺跡であることが、次第に明らかになりつつある。時代とともに規模の大小・消長を重ねながら、周辺の諸遺跡とも密接なつながりを保って栄々と歴史を刻んでいたものと思われる。

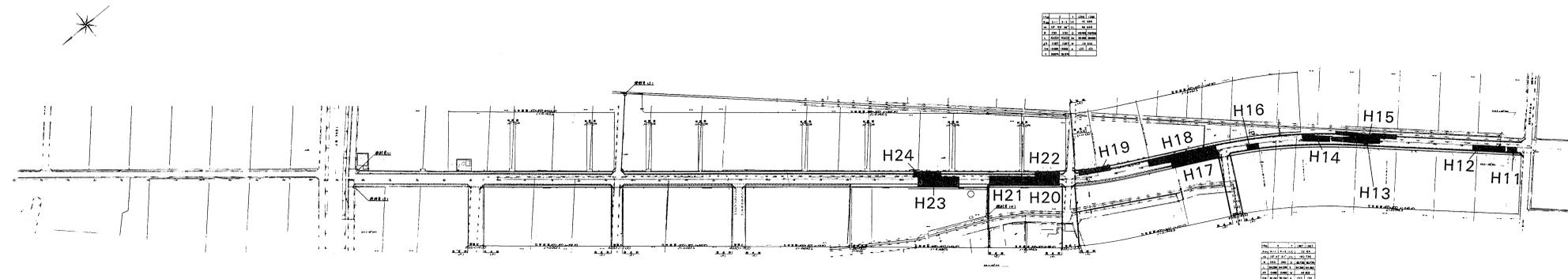
(谷口 徹)



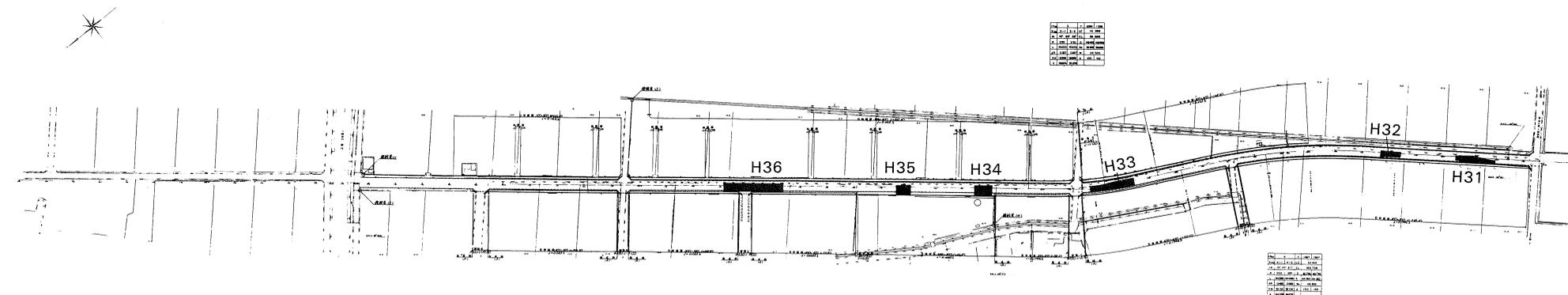
第1遺構面トレンチ設定図



第2遺構面トレンチ設定図



第3遺構面トレンチ設定図



0 100m

III. 試掘調査の概要

本格的な調査を実施する前に、遺構の存否ならびに遺構の広がりを確認するため試掘調査を行った。調査は、工事路線に沿って、5 m方形の試掘坑を24ヶ所（G 1～G 7・G10～G26）に設定した。昭和57年8月6日より開始し、9月4日で一度中断し、翌昭和58年3月7日から3月31日に至る2回に分けて調査を実施した。

試掘調査の結果、当地は近くを流れる野洲川・家棟川・日野川などの河川による重層的な沖積作用によって、土砂が厚く複雑な層を形成していた。そして、これらの層中の3層から遺構が検出された。それぞれ第1遺構面・第2遺構面・第3遺構面と呼称して略述することにしよう。

第1遺構面は、耕土及び床土直下に広がる灰褐色粘質土を地山とする遺構である。G18からG26に至る各試掘坑で検出した。現畦畔に平行する多条の溝のほか、柱穴若干が確認された。遺構面及び遺構内より平安時代の土師質土器や黒色土器などが出土する。G18の試掘坑あたりを北限として、その南側一帯に広大な広がりを見せているものと予測される。なお、この遺構面では、土師質土器や黒色土器などに混入する形で、わずかながら格子目叩きや布目痕を残す瓦が出土している。近在の兵主遺跡（寺院跡）との関連で留意されるところである。

一方、G11以北でも、平安時代の土師質土器が比較的豊富に出土する。ただ土層が安定しておらず、どうも地山ではなく客土ではないかと思われた。そこで、明治年間の古地図を調べてみると、このあたりより北へ一里程度の距離で「五条沼」が描かれている。おそらく「五条沼」の埋め立てに使用された土砂に、土器片が混入していたのであろう。そして、埋め立てに供された土砂は、今回G18より南側一帯で確認した遺跡の土砂であった可能性が高いように思われる。

上層の遺構面（第1遺構面）との間に数層の無遺物層を挟んで、第2遺構面が検出された。この遺構面は灰色土層を地山とするが、地山が比較的不安定で、所によって粘土層から砂層へと微妙に変化している。第1遺構面を検出した地点では、それ以上の掘り下げを実施していないので遺構の広がり是不明だが、G14及びG3の両試掘坑で、溝や柱穴を検出した。古墳時代後期の須恵器片などが混入している。

第3遺構面は、G15とG24で検出している。地表下2 m近いレベルで遺構面を検出するに至ったもので、層位も漸次グライ化を強めてこの地山では青灰色粘土層となっている。G15で1条の溝を、G24では沼沢地状の落ち込みを検出している。沼沢地状の落ち込みは、黒褐色粘土が20cm余の厚さで堆積したもので、堆積層中より弥生時代末から古墳時代初頭期の土器片が多量に出土した。この遺構面も、第1・第2遺構面で遺構を検出した箇所ではそれ以上の掘り下げを行っていないので、遺構の広がり把握できない。

なお、試掘調査を終了した時点で、今後の本格調査と遺構保存を考慮して、遺構上にビニールシートを敷設した後埋めもどした。又、遺構の存在しなかった地点では、土砂が軟弱化するのを避けるため山ズリを充填した。

(谷口 徹)

G21トレンチ



NO15+80



NO15+60



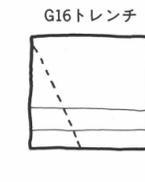
NO15+40



NO15+20



NO15+0



NO14+80



NO14+60



NO14+40

NO13+40

NO13+20



NO13+0



NO12+80



NO12+60



NO12+40



NO12+20



NO12+0



NO11+40



NO11+20

NO11+0



NO10+60



NO10+40

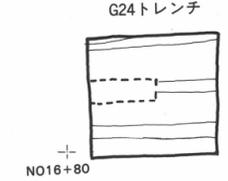


NO10+20

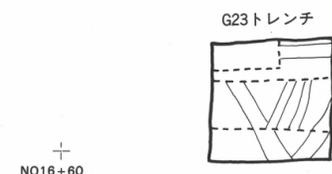
NO10+0



NO17+20



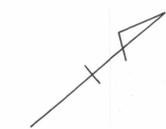
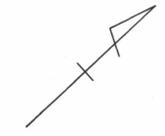
NO16+80



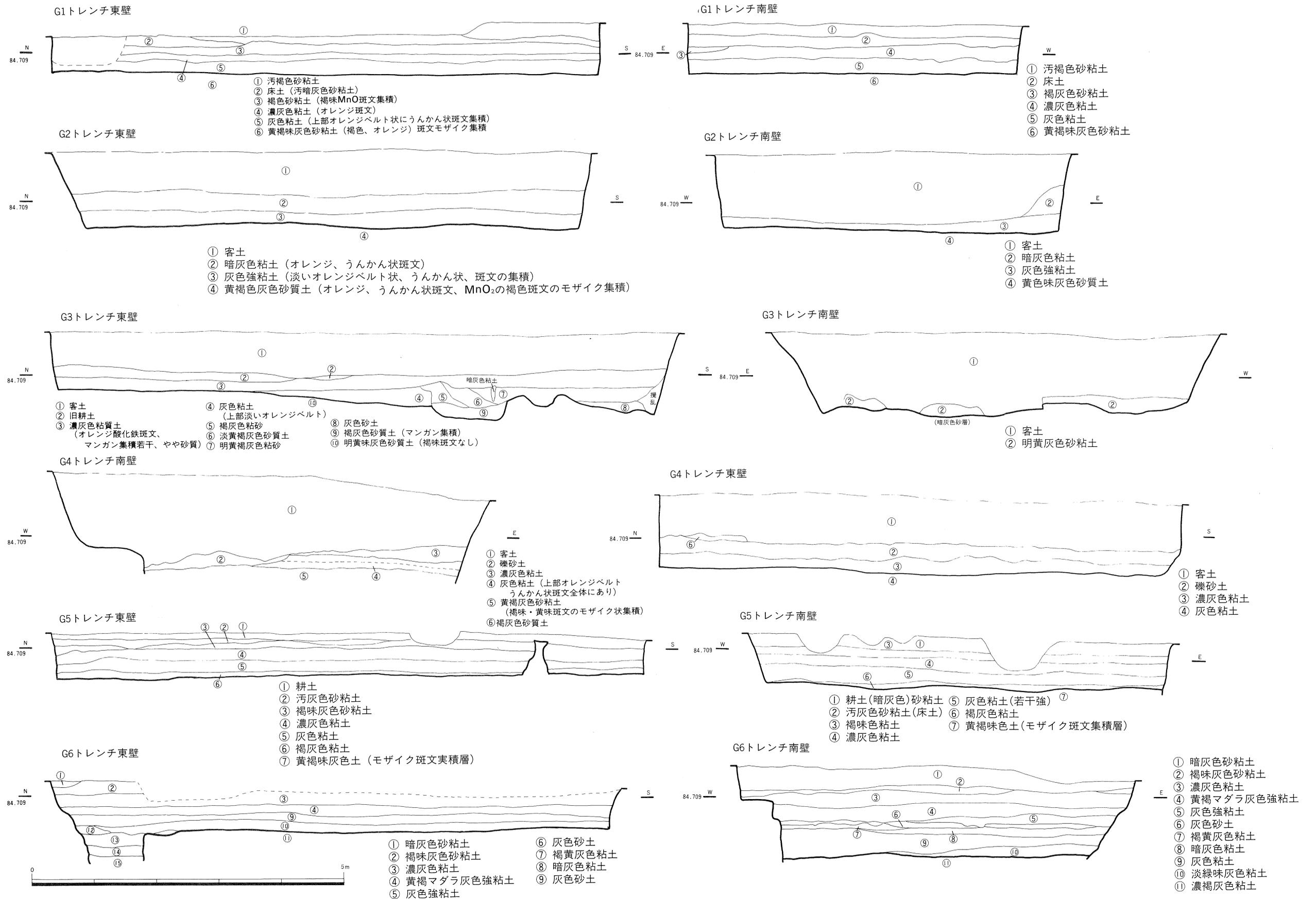
NO16+60



NO16+20



第3図 試掘坑平面実測図



第4図 試掘坑断面実測図(1)

Ⅳ．発掘調査の結果　　－遺構－

試掘調査の成果にもとづいて、遺構面の広がりとその様相を確認するため本格調査を実施した。調査は、道路の改良工事という原因から、道路幅を二分し、2面に分けて調査を行なわねばならなかった。したがって、調査は狭長なトレンチ調査方式をとることにした。遺構は、先の試掘調査から第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面の3層からなる複合遺跡と予想されたが、本格調査によって、そのことが実際に裏付けられた。以下、第1遺構面・第2遺構面・第3遺構面の順に、調査成果の概要を記すことにしよう。

(1) 第1遺構面

第1遺構面は、今回の調査域の南西側およそ100m間と北東端で検出した遺構面である。南西側は、H01からH05の5トレンチを設定した。この遺構面は、新旧の耕土及び床土直下に広がり、青灰褐色をベースとする。検出した遺構は、現在の畦畔に平行する多条の溝状遺構と2条の畦畔に限られる。溝状遺構は、幅0.5m程度、深さ0.2mあまりを計り、1m前後の等間隔で幾条も平行して走る。覆土は黄灰褐色粘質土層の単純層で、層内より土師質小皿を始め黒色土器や瓦質土器の細片が出土する。全体に摩滅・剝離したものが多い。この溝状遺構は、南西方面から北東へと、しばしば途切れながらも継起的に連続し、H03トレンチの中間地点あたりで、直交する2条の畦畔に接するとともに消失し、それより北東には伸びない。トレンチ壁の断面を観察すると、ちょうどこの箇所から北東には旧耕土も認められない。しかも、ここより北東方面では遺構面のレベル低化が始まり、およそ10m余で沼沢地状の土層が介入するようになる。どうやら、2条の畦畔を境にして、それより北東では、この期の地形に変化があり、ゆるやかに低平地化し、やがて沼沢地が広がっていたようである。ところで、2条の畦畔は、既述のとおり溝状遺構に直交するように存在し、その幅0.5mのおだやかな山形で両者間およそ2mを計る。

ここで紹介したような溝状遺構については、これまでも諸説あるが、少くとも今回の調査にみる限りでは、田畑に畝作りに伴う鋤耕の痕跡と考えるのが妥当と思われる。つまり、当地を微高地周辺部と位置付け、田畑としての土地利用に供されていた地所と考えたい。したがって、溝状遺構の覆土内から出土した遺物は二次的な混入物、おそらくは、当地のさらに南西方向の微高地中央部に広がっていると予想されるこの期の集落跡からもたらされたものと思われる。

ところで、当地とは相対する北東端でも、試掘調査時、同種の遺構面らしきものが確認され、同期の遺物が出土していた。そこで今回、その事実をただすべくH06、H07の両トレンチを設定した。トレンチ掘開当初は、南西方面の遺構面とは別に、新たに同期の遺構面が広がって

るものと考えて精査を行なったが、どうも遺構面が今一つ不安定であったため、トレンチの壁面に沿って深い試掘溝を入れた。その結果、遺構面と考えていた土層が、実は深い沼沢地を埋設する際に投入した厚い客土であることが判明した。この沼沢地は、比較的新しい時期まで存続していたものと予想されたが、念のため落ち際のみ一部掘削した。落ち際は、H06・H07両トレンチの南西端より数メートルの箇所であり、そこより北東に沼沢地は広がっている。沼沢地の落ち際は急峻で、しかも深い。落ち際には、かつてこの沼沢地の岸を守っていたのであろう土留めの杭列や樹根がはびこり、そこに下駄や古い様式の薬瓶などがひっかかった状態で検出された。そこで、明治年間の当地の古地図を調べたところ、ちょうどこのあたりより北東に約1里、「五条沼」の称をもつクリークが描かれていた。それが、いつ頃埋められたのかは定かでないが、明治以降であることは相違ない。その際、おそらく、今回の調査地南西に広がる第1遺構面の微高地の土が、客土として大量に使用されたと思われる。土砂の色調が極似し、土砂の中に同期の遺物が混入しているのは、その証左となろう。そして、このことが調査当初の困惑を招くことにもなったのである。

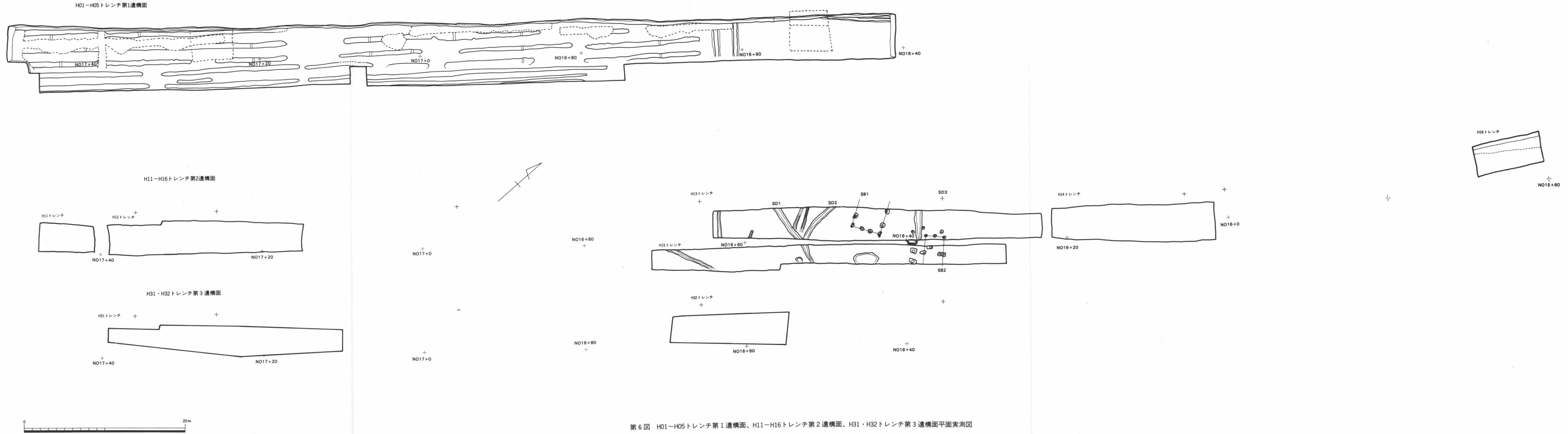
(2) 第2遺構面

第2遺構面は、調査域の南西過半で検出した遺構面である。第1遺構面下およそ30cmで確認される。灰褐色粘土をベースとするが、いささか不安定で、所により粘質土さらに砂質土と化す。第1遺構面下この遺構面に達するまでには、数層の無遺物層及び直上で遺物包含層が層を形成している。遺構面を追認するかたちでH11からH24に至る14の狭長なトレンチを設定したが、掘立柱建物・土坑・溝など明確な遺構が検出されたのは、H13・H15とH17・H18あたりの2箇所であり、他にH21・H22では水田の小畦畔かと思われる遺構を若干検出した。2小域に居住し、その北東で水稲農耕を営んでいたものと思われる。この遺構面は、出土遺物から古墳時代後期を主としたものと判別される。以下、H13・H15、H17・H18、H21・H22の3区に分けて、検出遺構の概要を記すことにしよう。

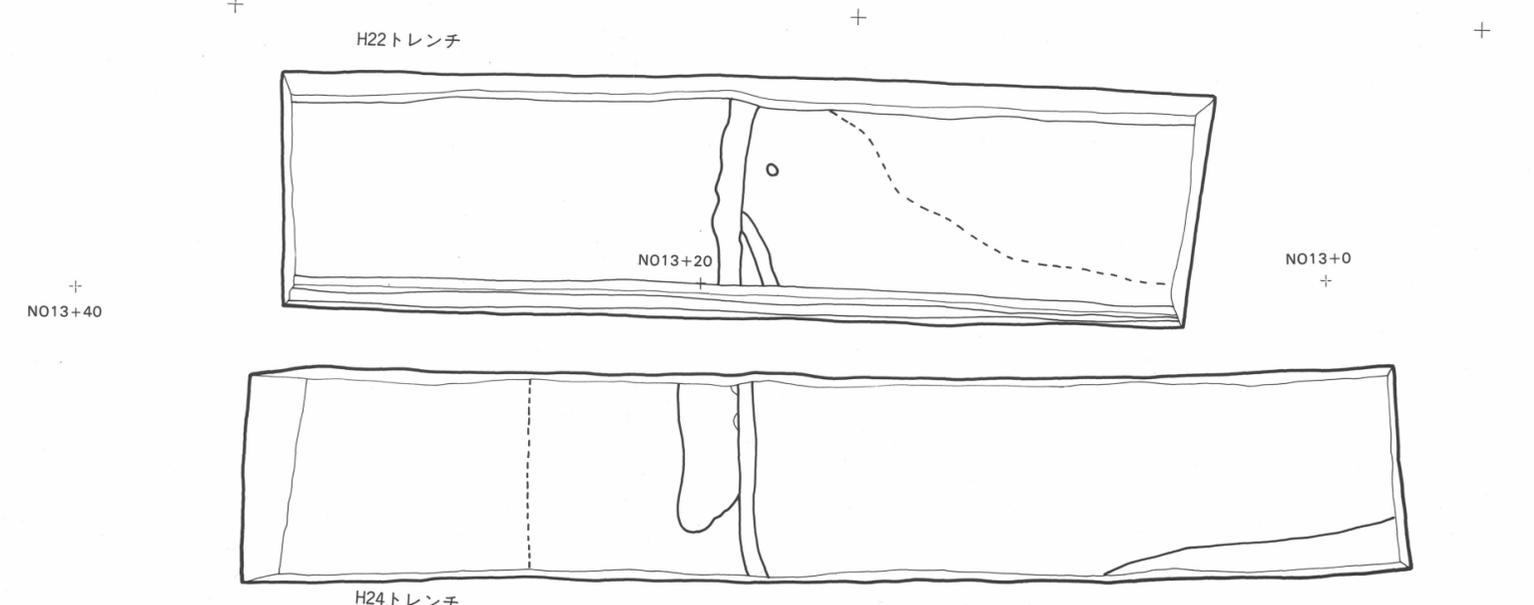
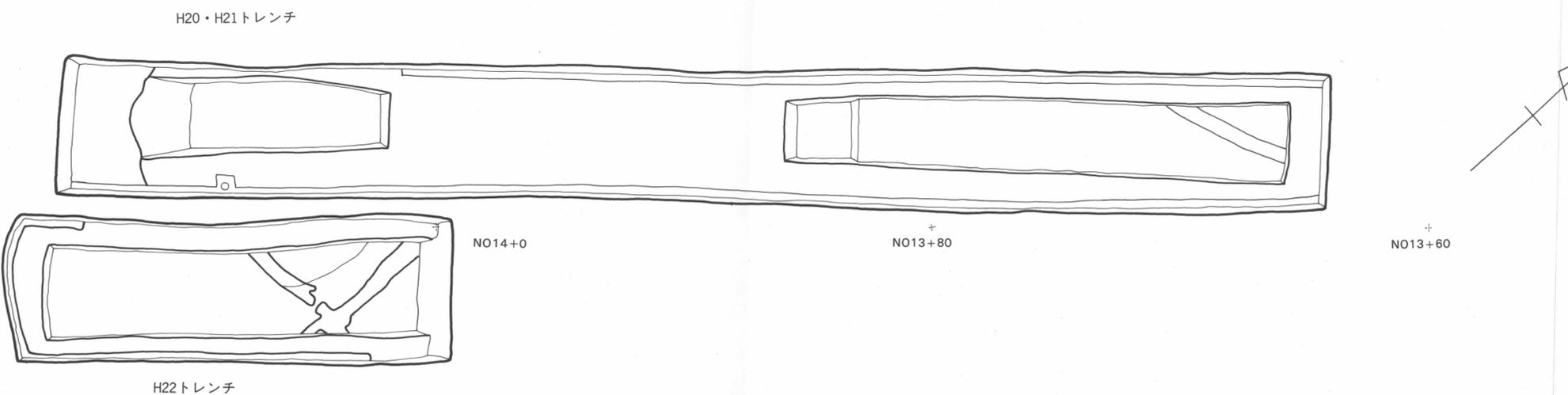
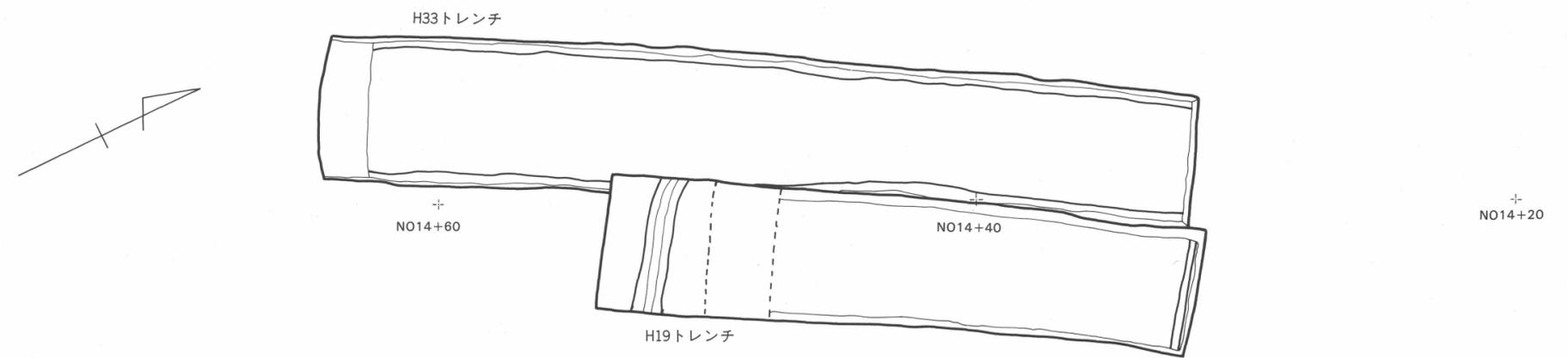
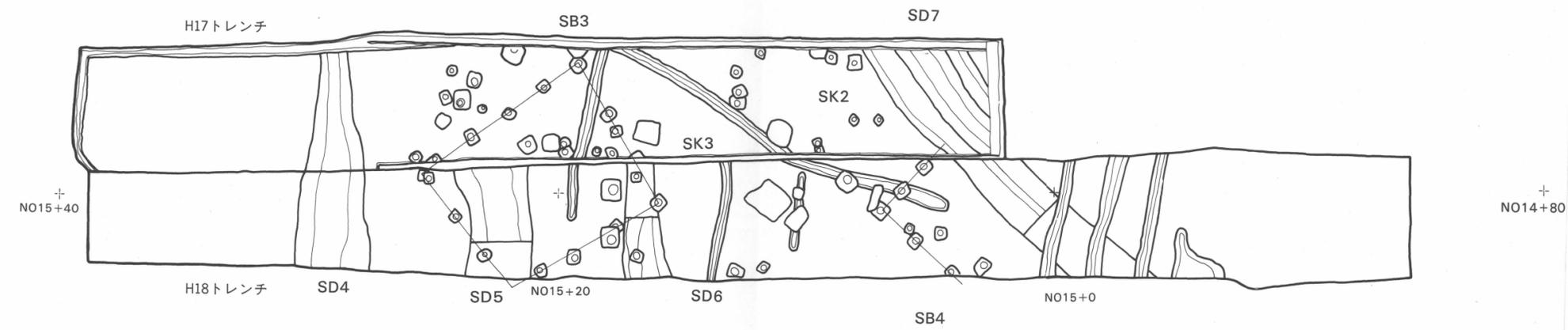
H13・H15両トレンチで検出した遺構は、掘立柱建物2棟（S B01・S B02）を始めとしたピット群と3条の溝（S D01～S D03）である。

S B01 H13トレンチ中央付近で検出したN-32°-Wを保つ掘立柱建物である。北西部過半はトレンチ外に伸びるため不明。桁行2間以上、梁行3間（3.5m）を数える。柱の掘り方は0.3～0.6mの隅丸方形を基調とするが、一部変形のものもあって必ずしも一定していない。柱穴は0.2m前後にはぼ定まっている。掘り方内には黒灰褐色粘質土が、又、柱穴には黒褐色粘質土がそれぞれ充填されていた。柱筋は、桁行・梁行とも比較的良く通っており、柱間は桁行が1.1～1.8m、梁行が1.1～1.2mを計る。

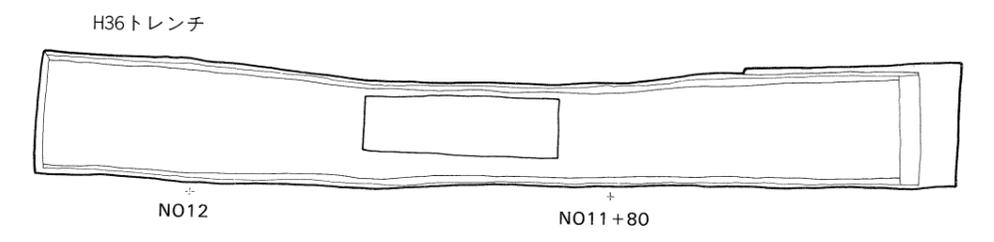
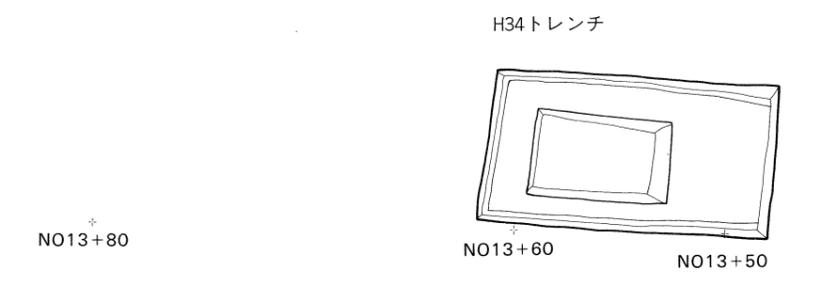
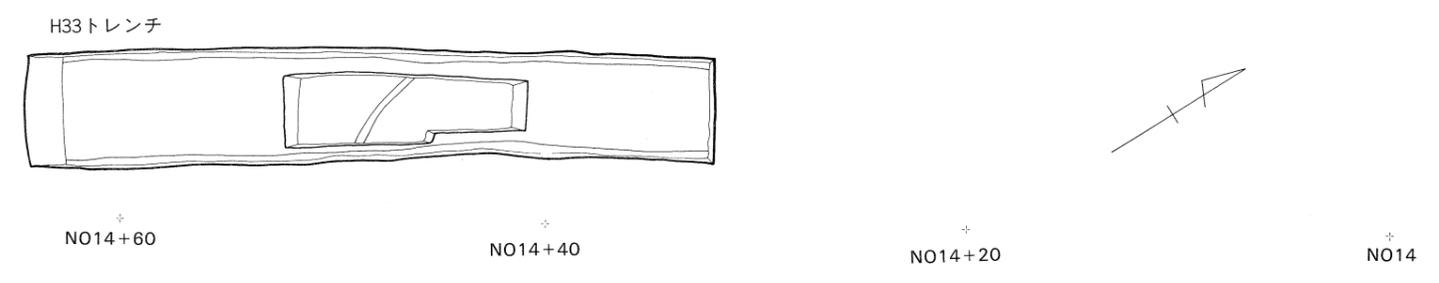
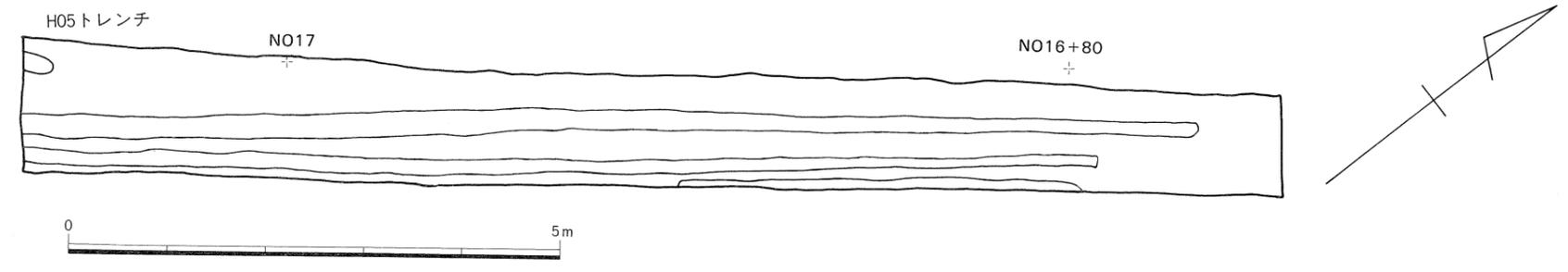
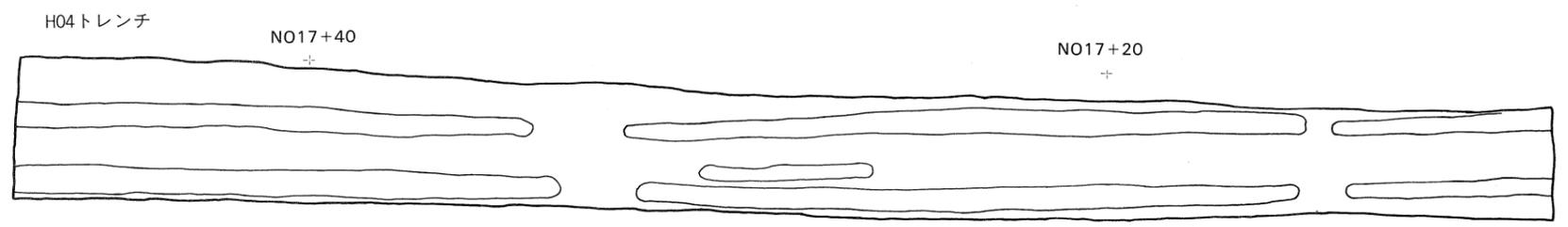
S B02 H13トレンチ東方からH15トレンチにかけて検出したN-46°-Wの掘立柱建物で



第6図 H01-H05トレンチ第1遺構面、H11-H16トレンチ第2遺構面、H31・H32トレンチ第3遺構面平面実測図



第7図 H17~H19、H33、H20~H24トレンチ第2遺構面平面実測図



第8図 H04、H05トレンチ第1遺構面、H33、H34、H35、H36トレンチ第3遺構面平面実測図

ある。南東部過半はH15トレンチ外に伸びており、全容は把握していない。桁行1間以上、梁行2間(2.2m)を数える。柱の掘り方は、0.3mと0.5mの2種の隅丸方形プランが認められ、おのおのはば中央に径0.2m余の柱穴が存在する。掘り方内には、黒灰褐色粘質土、柱穴には黒褐色粘質土が入る。柱筋は良く通り、桁行が2.2mと長く、梁行は1.1mを計る。

S D01・S D02 H13とH15のちょうど境あたりで分岐し、H13トレンチではやや弧を描きながら2条となる溝である。南西側の溝をS D01、北東のそれをS D02とする。両溝とも幅0.8m、深さ0.3～0.4mの浅い溝である。断面は、S D01がやや逆台形に近い碗状、S D02がV字形に近い碗状を呈す。両溝が接するH13トレンチ南東壁で断面観察を行なったところ、両溝はS D01がやや古く掘開されたと予測され、S D01の底部にまず④層(淡黒褐色粘質土)が堆積する。この時点で、両溝ともに土砂の流入がみられるようになり、③層(暗灰色粘質土)、②層(黒褐色粘質土)、①層(暗灰褐色粘質土)が順次堆積を重ねて埋まる。掘開された溝の用途は定かでないが、両溝とも明らかに人為的な溝である。

S D03 掘立柱建物S B02のすぐ南西側、S B02の桁行に沿うように掘開された溝である。H13・H15トレンチの境あたりに端を発し、それより北西に流路を刻んだものと考えられ、H15トレンチでは、精査にもかかわらず、溝の延長部を確認できなかった。溝は北西に向かうにしたがって幅広く、かつ深くなるが、H13トレンチ中央付近で、幅0.8m、深さ0.6mを計る。断面は碗状を呈し、覆土として6層が識別される。底部より、⑥淡灰色砂層、⑤淡灰褐色砂質土、④淡黒褐色粘質土、③暗灰色粘質土、②黒褐色粘質土、①暗灰褐色粘質土が層を重ねている。S B02に伴って掘開された溝であろうか。

H17・H18両トレンチで検出した遺構は、S B03・S B04の両掘立柱建物、S K01・S K02の両土坑、そしてS D04～S D07の各溝である。掘立柱建物の周辺には、他にも多くの柱穴が確認されるが、建物としてまとめることはできなかった。又、ここで表記した4条の溝以外にも多条の溝を検出しているが、図示するにとどめた。

S B03 S B03は、H17・H18の両トレンチにまたがって検出した掘立柱建物である。溝S D5が完全に埋没した時点で建てられている。方位をN-11°-Wに保つ。南東コーナー付近を残してほぼ全容を確認することができた。桁行4間(7.3m)、梁行3間(6.3m)を数える。柱の掘り方は、0.4～0.5mの隅丸方形で、柱穴は0.2m程度にほぼ定まっている。掘り方に黒灰褐色粘質土、柱穴には黒褐色粘土がそれぞれ充填されていた。柱筋は、桁行・梁行とも比較的良く通っており、柱間は、桁行が1.8～2.4m、梁行で1.9～2.4mと余り一定していない。北西コーナーの柱穴(P3)より、須恵器杯身1点が出土している。

S B04 H18トレンチの中央やや北東よりで検出した掘立柱建物である。のちに溝S D07に削平されて、北西側の桁行が遺存しない。方位をN-22°-Wに保つ。桁行2間以上、梁行2間以上を数える。柱の掘り方は、0.5～0.6mの整然とした隅丸方形を呈し、柱穴は0.2m前後

を計る。掘り方に黒灰褐色粘質土、柱穴には黒褐色粘質土が充填されていた。柱筋は良く通っており、柱間は桁行0.9m、梁行1.2mと一定している。

S K 01 H17トレンチのS D05北岸付近で検出した土坑である。長軸2.0m、短軸1.1mの楕円形を呈し、深さ0.6mを計る。断面は椀状で、④黒色泥土層、③灰褐色砂泥層、②黒灰褐色粘質土層、①淡黒灰褐色粘質土層が層を重ねている。①・②層には炭化物片の混入が著しく、須恵器や土師器片などの遺物も多数出土した。

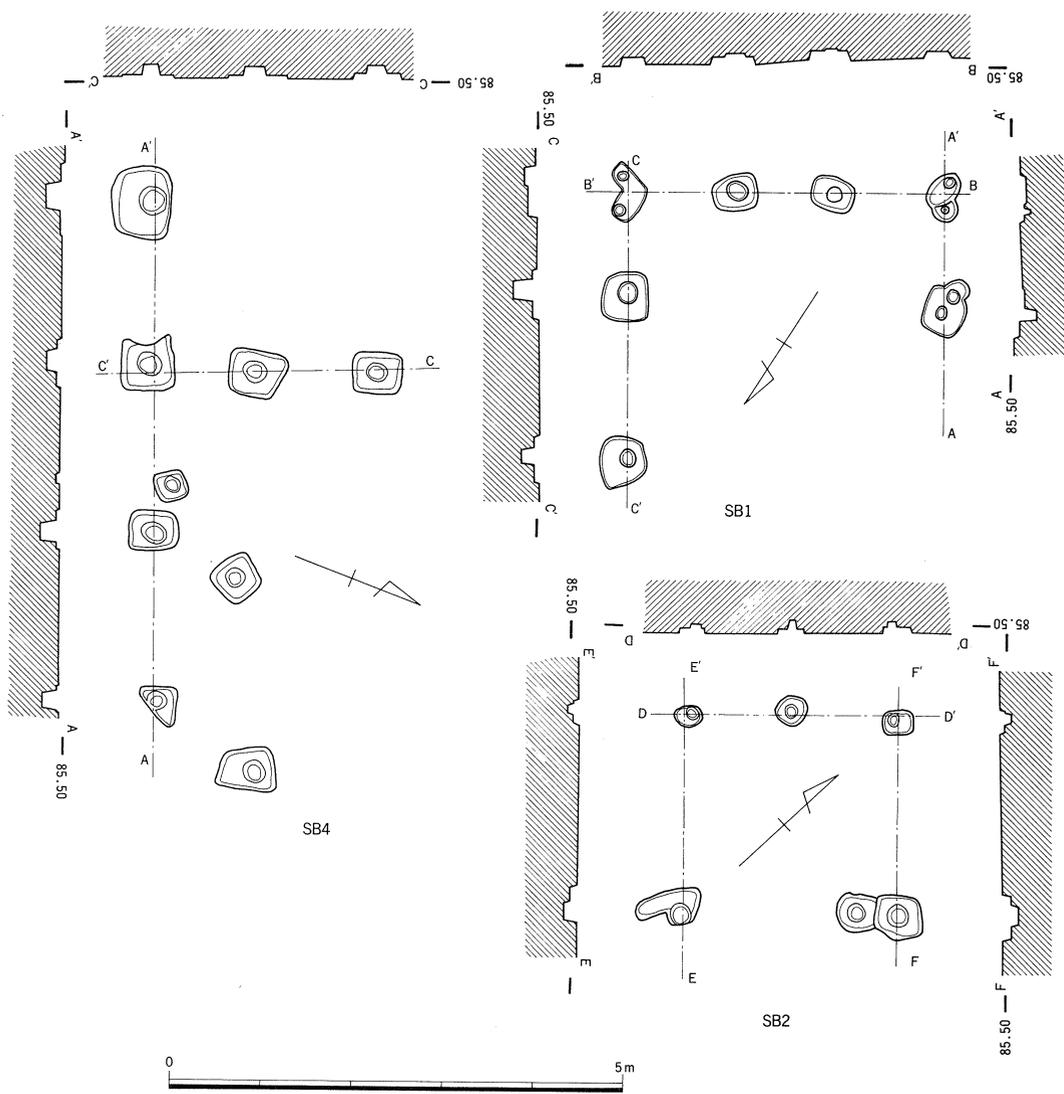
S K 02 H17トレンチのほぼ中央で検出した土坑である。不定形ながらも直径1.0mの円形に近い形状を示す。深さは1.0mと比較的深く、底部はU字状。⑤暗灰褐色砂質土層、④黒灰色泥土層、③灰褐色砂泥層、②黒灰褐色粘質土層、①暗灰褐色粘質土層の5層が識別される。④層には腐植遺体が薄く層状に介入している。

S D 04 H17・H18両トレンチの南西側を、南東から北西へと直線的に流れる溝である。溝の最大幅は3.0mを計り、北西へ向かうに従ってしだいに狭くなる。深さ1.3m、断面は典型的な椀状を呈し、堆積層もきれいなレンズ状を示している。堆積層は5層が識別され、⑤黒褐色泥土層、④暗黒灰褐色粘質土層、③黒灰褐色粘質土層、②暗灰色泥土層、①暗灰褐色粘質土層が順次層を重ねている。

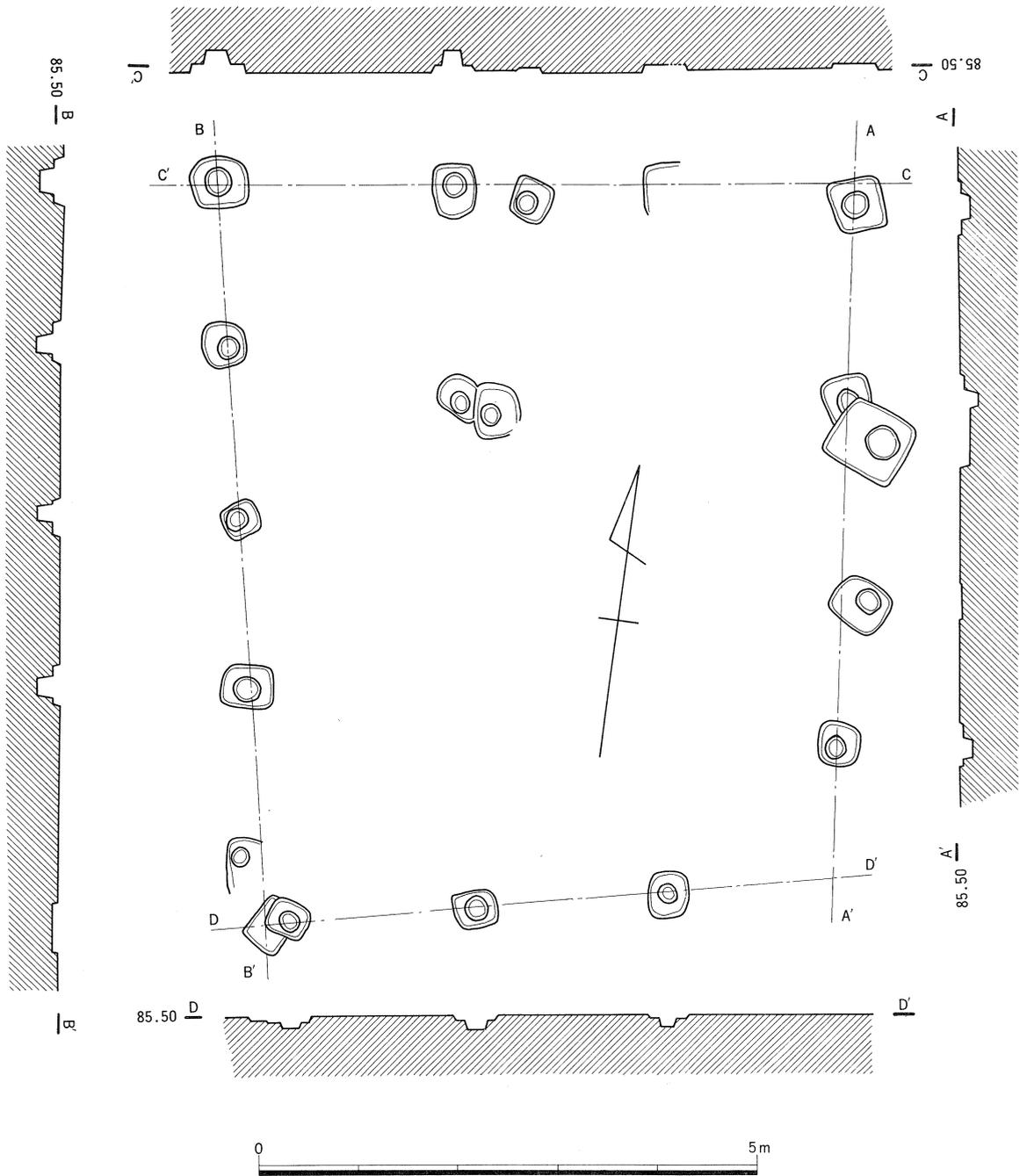
S D 05 H17・H18両トレンチで、S D04の北東側を弧状に流れる溝である。H17トレンチ内に端を発し、それより南東方向に直線的な流路を刻む。溝の始まりは漸次深くなるあり方を示している。溝幅1.6m前後、深さは比較的浅くて最深部でも0.5mを計るにすぎない。断面は通常浅い椀状を呈しており、溝底には若干の凹凸が認められる。堆積層は最高4層が識別され、④暗灰色泥土層、③黒色炭化層、②黒灰褐色粘質土層、①暗灰褐色粘質土層の順に層を重ねている。

S D 07 H17・H18両トレンチ北東側で、東から西へとやや弧状の流路を刻む溝である。溝底が流路に沿って2ヶ所深くなるため、一見2条の溝が平行して走っているように見えるが、断面観察の結果、同期の1条の溝であることが判明した。従って、溝幅は最大で5mを越え、深さは広さの割には比較的浅くて0.7mに満たない。断面は2連の椀状を呈している。⑤淡灰褐色砂質土、④淡黒褐色粘質土、③暗灰色粘質土、②黒褐色粘質土、①暗灰褐色粘質土の各層によって覆われる。

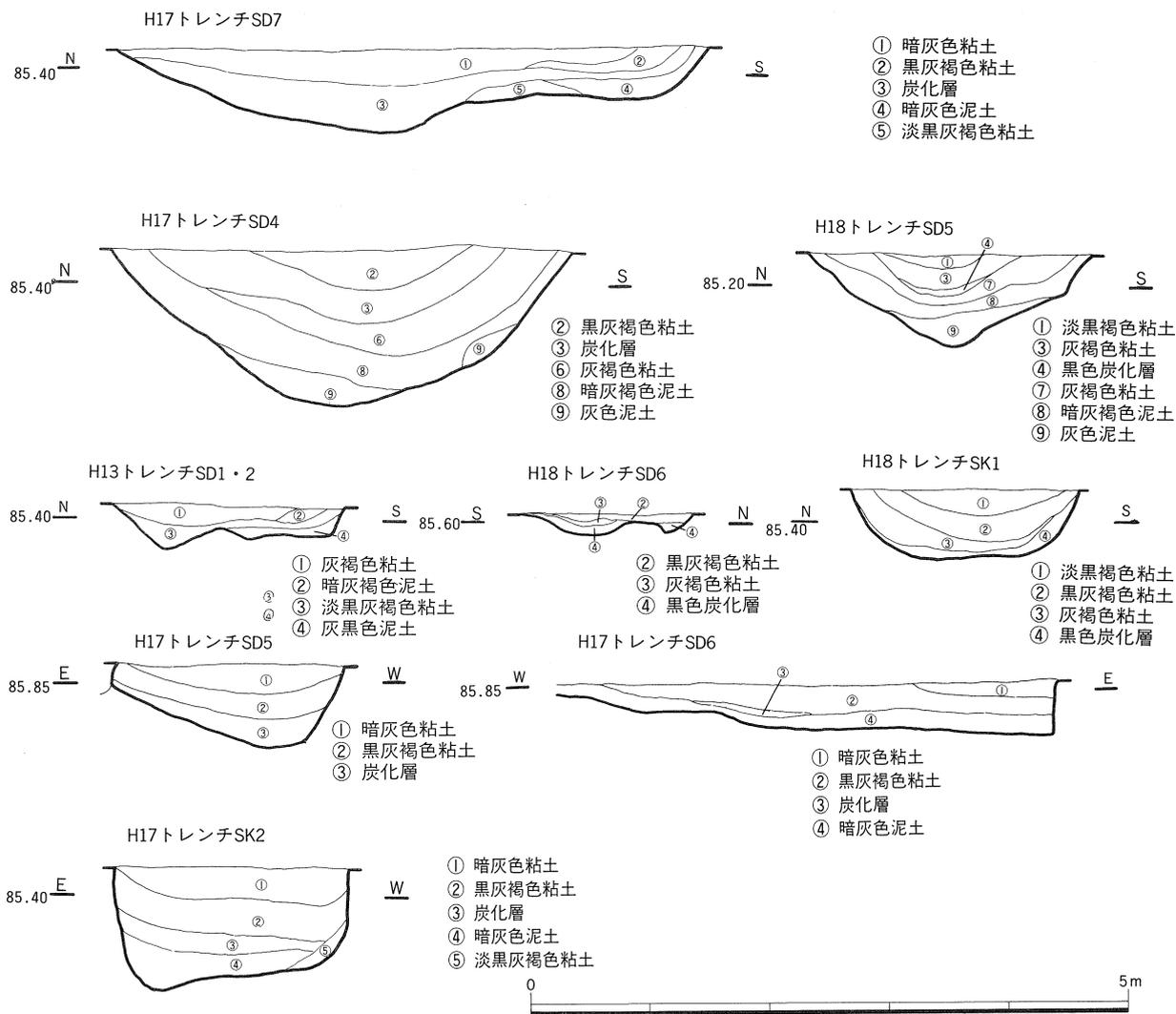
H21・H22両トレンチあたりでは、しだいに旧地形のレベルが下がり、地山も全体にグライ化を強めて青味を帯びるようになる。この地で水田の小畦畔かと思われる遺構が若干検出された。H21トレンチでは幅0.5m余で東西に走っており、又、H22トレンチでは同じく幅0.5m余で東西及び南北方向の両者がクロスしている。クロス部近くの一ヶ所は途切れて幅0.5m余り開口する。もし、この遺構が水田の小畦畔であれば、この開口部は水口でもあろうか。



第 9 图 SB1、SB2、SB4 平面实测图



第10図 SB3平面実測図



(土坑断面のみ縮尺2分の1)

第11図 各遺構断面図

(3) 第3遺構面

第3遺構面は、狭長な調査域の中央から南西方向に広がっているものと予想される。ただ、第1・第2の各遺構面で遺構が未確認であった地点のみ掘り下げた結果であるため、極めて不十分な成果しか得られていない。とまれ、第3遺構面は、第2遺構面下数層の無遺物層をはさんで検出した。表土下2m近い深さに達している。青灰色のグライ粘土層をベースとする。遺構の広がりには、先述のとおり定かでないが、H33トレンチで1条の浅い溝を検出した他、試掘調査時のG24付近で沼沢地を確認している。H33トレンチの溝は、幅0.5m、深さ0.2mに満たない狭く浅いもので、南北方向に流路を保っている。覆土は黒褐色泥土の単純層で遺物は出土していない。沼沢地は、同じく黒褐色泥土で覆われた深さ0.2m前後の浅いものである。層中より弥生時代後期後半頃の多量の土器が出土した。比較的近在に同期の遺構が存在しているものと予想される。

(谷口 徹)

V. 発掘調査の結果 — 遺物 —

今回の調査では、各トレンチ、各遺構より多くの遺物が出土した。土器では、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、施釉陶器、土師質土器、瓦質土器などがあり、弥生時代後期から、平安時代後期までの長期にわたるものであった。遺物としては、このほか土錘が多数出土しており、各時期にわたるものであった。ここでは、時代順に一括して解説することにした。

(1) 弥生土器

G24より壺、甕、鉢、器台、高坏の出土が知られる。弥生後期後半代のものである。

細頭壺 (E052) 細頭壺の体部で、外面に丁寧なヘラミガキを加えている。

甕 A (E054～E057) 受口状口縁を有する甕である。口縁部の形態は少しずつ異なるが、ここでは特に細分しなかった。口縁部外面は、すでに無文化しており、弥生終末期の様相を示している。E057には、肩部に4条の直線文があり、E061の鉢Aと同一個体の可能性がある。ほかに底部 (E060) の出土がある。

鉢 A (E061) 受口状口縁をもつ鉢である。肩部に4条の直線文、その下に列点をめぐらせる

器台 (E062) 受部口縁端部を拡張し、2条の直線文をめぐらす。

高坏 (E063) 坏部下半と柱状部の破片であり、全形は明らかでないが、柱状部はやや柱状化がすすみ、裾部の開くものである。

(2) 古式土師器

古式土師器とみられる壺、甕が3点出土している (G24)。庄内式並行期のものか。

壺 (E053) 大きく外反して、口縁端部が立ち上がるもので、受口壺の系譜を引くものか。

甕 (E058、E059) 受口状口縁甕であるがほとんど退化し、口縁部は外傾したり、端面をほとんどもっていない。

(3) 須恵器

古墳時代後期から飛鳥時代にかけての須恵器が、各トレンチより、大量に出土している。陶邑の形式で、TK10、TK43、TK209、TK217などに並行するもので、おおよそ6世紀前半代から7世紀前半代のもものが中心を占めている。このほか奈良時代に含まれるものも、少数ではあるが出土している。

坏蓋A₁ (C046) 天井部と口縁部の境界が明確な坏蓋で、TK10段階のものである。

坏蓋A₂ (C064、C078、C144～C146、C150～C152、C157、C183) 天井部と口縁部の境界がなく、口縁部が内湾し、端部は垂直ないし、内湾気味に押さえるもの、TK217に類例が認められる。

坏蓋B₁ (C092) 平坦な天井部で、口縁部は屈曲して、端部は垂下しておさえている。TK7段階のものであろう。

坏蓋B₂ (C001、C095、C096) 天井部は平坦で、口縁部がやや内湾して着地するもの、退化した宝珠のみがつく。

坏身A₁ (C079) 口縁部立ち上がり、やや外湾して立ち上がり、受部が水平方向にのびるもの、TK10段階のものか。

坏身A₂ (C047、C048、C072、C091、C140、C147、C148、C150～C156、C170、C176、C164、C165、C167、C168、C184) 比較的浅い体部で、立ち上がり部は、短かく上方或は内傾してのびる。TK209、TK217などに類例がある。

坏身B₁ (C002、C080、C100、C177) 平底で口縁部は、直線的に外上方にのびるものC100は比較的浅くTK217に、他はMT21に対応するものとみられる。

坏身B₂ (C003～C005、C045、C068、C070、C090、C093、C094、C097～C099) 低い高台のつく、平底を呈し、口縁部は、直線的に外上方にのびる。MT21、TK7の段階に比定できよう。

壺A (C071、C083、C178) 短かい直口或は、やや外傾して、直線的にのびる口縁をもつものである。TK209に類例がある。

壺B (C074、C081～C082、C171、C179、C180) やや外傾気味に外上方に直線的にのびる口縁部で、端面を外側に巻き込むように肥厚させている。C171、C179は口縁部がやや外湾しており、少し形態が異なる。これもTK209に類例の認められるものである。

瓶 (C174) 口縁部は、ゆるやかに外湾して開き、端部を下方に肥厚させる。外面を楕円描列点文と直線文をめぐらしている。TK217に類例がある。

横瓶 (C166) 口縁部は外傾して直線的にのび、端部を外側に折り曲げて肥厚させる。体部は水平方向に長くのびる。MT21に類例のあるものか。

提瓶 (C084) 口縁部は欠失するが、球形の体部の肩に、半円形の耳を付している。

罍A (C066、C073、C157) 口縁部が屈曲してのち、直線的に外上方にのびるタイプで、沈線を数条めぐらしたものである。

罍B (C085、C141、C142) 口縁部は長く、しかも大きく外傾し、端部はさらに外反して、端面の外側を肥厚させるものである。体部は、寸づまりの円形を呈し、最大径部に円孔を穿っている。円孔の上下に各一条の沈線をめぐらす。

鉢A (C 075、C 086) 平坦な底部から、体部は直線的に外上方にのびる。T K 217段階に通有なものである。

鉢B (C 049、C 158) 安定の悪い、丸い底部をもち体部口縁部は、ゆるやかに外反してほぼ上方にのびる。体部中位に2条の沈線をめぐらす。

高坏 (C 067、C 100、C 185) 低い高坏の脚柱部で、ラッパ状に大きく開き、裾広がりになっている。

(4) 土師器 —その1—

ここでは、奈良時代以前の土師器を扱う。器種としては、皿、甕のみで、坏類等の出土は知られていない。

皿 (H 007) 平坦な底部に、短かく外上方にのびる口縁をもつものである。

甕A (H 030) 球状の体部をもち、口縁部は短かく外反するもの、器壁は厚く外面にハケ目を残す。

甕B (H 076、H 149、H 159～H 162) 口縁部が「く」字に外反して開き、体部は長い長胴形を呈する。

甕C (H 169) 口縁部が、大きく外反する甕で、内外面ともハケ調整。

(5) 施釉陶器

緑釉と灰釉が若干出土している。いずれも坏の形態をとるものである。

灰釉坏 (C 006) C 006は浅い碗状の高台付の坏である。

緑釉坏 (G 037、G 101) 明るい濃緑色の釉を高台内面を除き施している。高台は断面三角形状を呈し、内側に段をもっており、近江産の緑釉である。水口町春日山の神窯の資料などによると、11世紀前半代のものとみられる。

(6) 土師器 —その2—

ここでは古代末から中世に一般的な土師皿を扱う。一部11世紀代のものもあるが大半が平安時代後期から、鎌倉時代にかけての各時期のものがみられる。

大皿A (H 010) 平坦な底部をもち、口縁部はゆるやかに内湾して、外上方にのびる。

大皿B (H 008、H 102、H 103) 平坦な底部で、口縁部はゆるやかに内湾して外上方にのびるが、端部は小さく外反する。

大皿C (H 009) 口縁部が屈曲して外反し体部との境界が明確なもの。

小皿A (H011~H013、H015、H017、H019、H042、H043、H110、H111、H113、H116)
平坦或は丸底気味の底部をもち、口縁部は、ゆるやかに内湾して、丸くおさめるもの。

小皿B (H014、H104、H105、H107~H109、H136) 口縁部がゆるやかに内湾したのち、小さく外反するもの。

小皿C (H106) 口縁部と体部の境界が明確に屈曲するもの。

小皿D (H016、H018、H020、H021、H112、H114、H117) 口縁部が短かく内反して体部との境界が明らかなもの。

小皿E (H118~H121) いわゆる「て」の字の土師皿である。すべてH07の沼沢地よりの出土であった。11世紀代のものである。

(7) 黒色土器

今回の調査では、黒色土器の出土は、比較的少なく、器種としては、碗と甕である。9世紀代の一部古いものもみられるが、大半が12世紀から13世紀のものである。

黒色土器碗A (B122) 浅い碗状を呈し、低い高台がつく、器壁も薄く、焼成も良好である。9世紀代のものである。

黒色土器碗B₁ (B023、B024、B026、B044、B123、B125~B127) いわゆる近江型の黒色土器碗で器壁は厚く、焼成も軟質である。口縁部がゆるやかに内湾するものをB₁とした。大半のものは、口縁内側に一条の沈線をめぐらし、内面には暗文を施すものが多い。B₂とともに12世紀後半から13世紀代のものである。

黒色土器碗B₂ (B025、B027、B124、B128) 口縁部がゆるやかに内湾するが、端部が短かく外反するもの。

黒色土器碗底部a (B130) 薄手の器壁で小さい低い高台がつく、碗Aに対応。

黒色土器碗底部b (B131、B132、B175) 厚手でやや高い高台をもつもの碗Bに対応。

黒色土器碗底部c (B028、B077、B087、B129、B133、B072) 断面三角形の低い高台のつくもの、碗Bに対応。

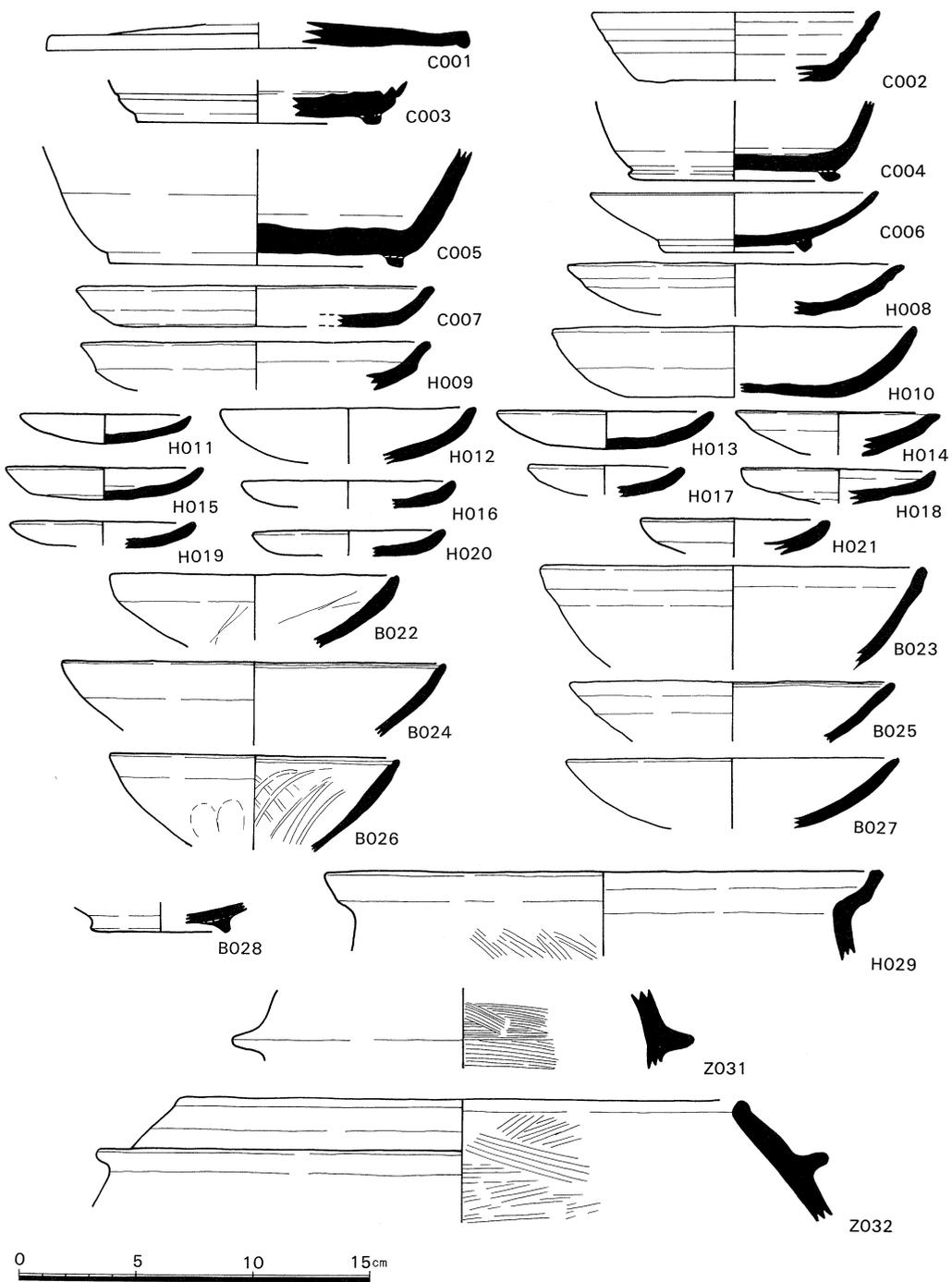
黒色土器甕A (B134) 口縁部が直口気味に立ち上がるもの。

黒色土器甕B (B135) 口縁部は、ゆるやかに外湾したのち、端部を内側に巻き込むように内反するもの。

(8) 瓦質・土師質土器

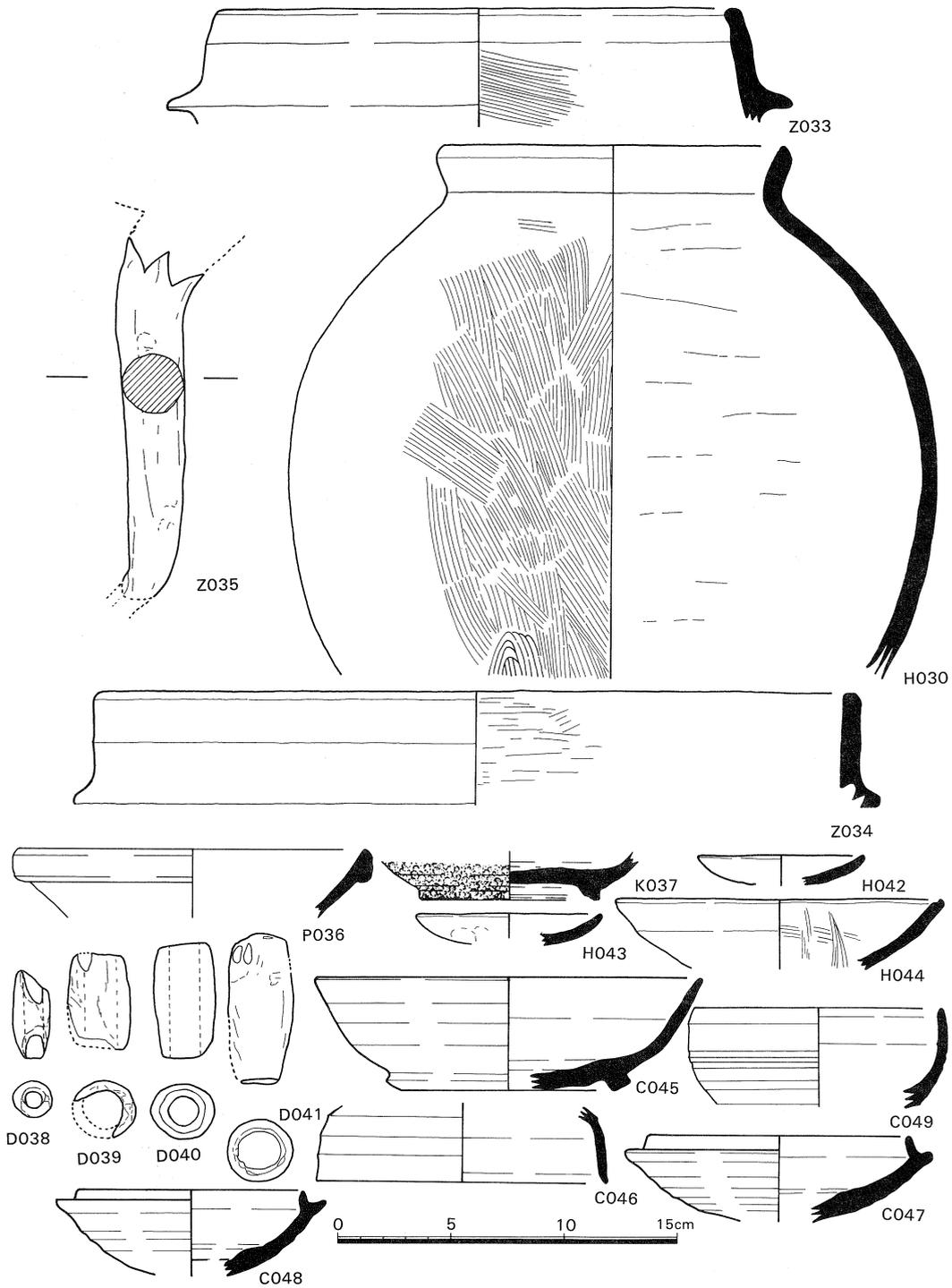
瓦質の羽釜と土師質の釜が若干出土している。いずれも13世紀代のものである。

足釜 (Z031、Z032、Z034、Z137) 口縁部はかなり内傾し、短かいづばが付いている。Z



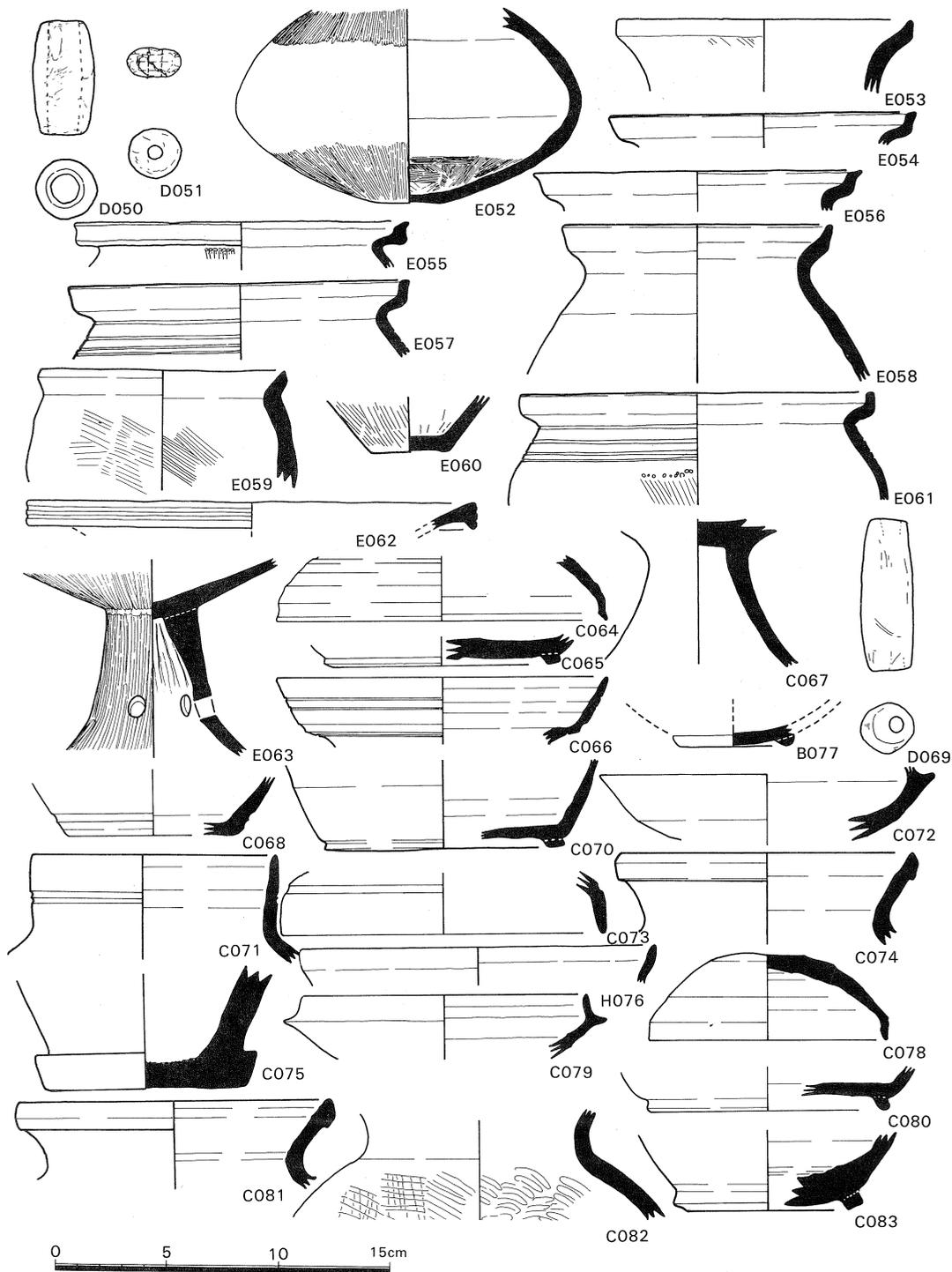
・ G10・11 (C001~C007、H008~H021、B022~B028、H029、Z031、Z032)

第12図 出土遺物実測図(1)



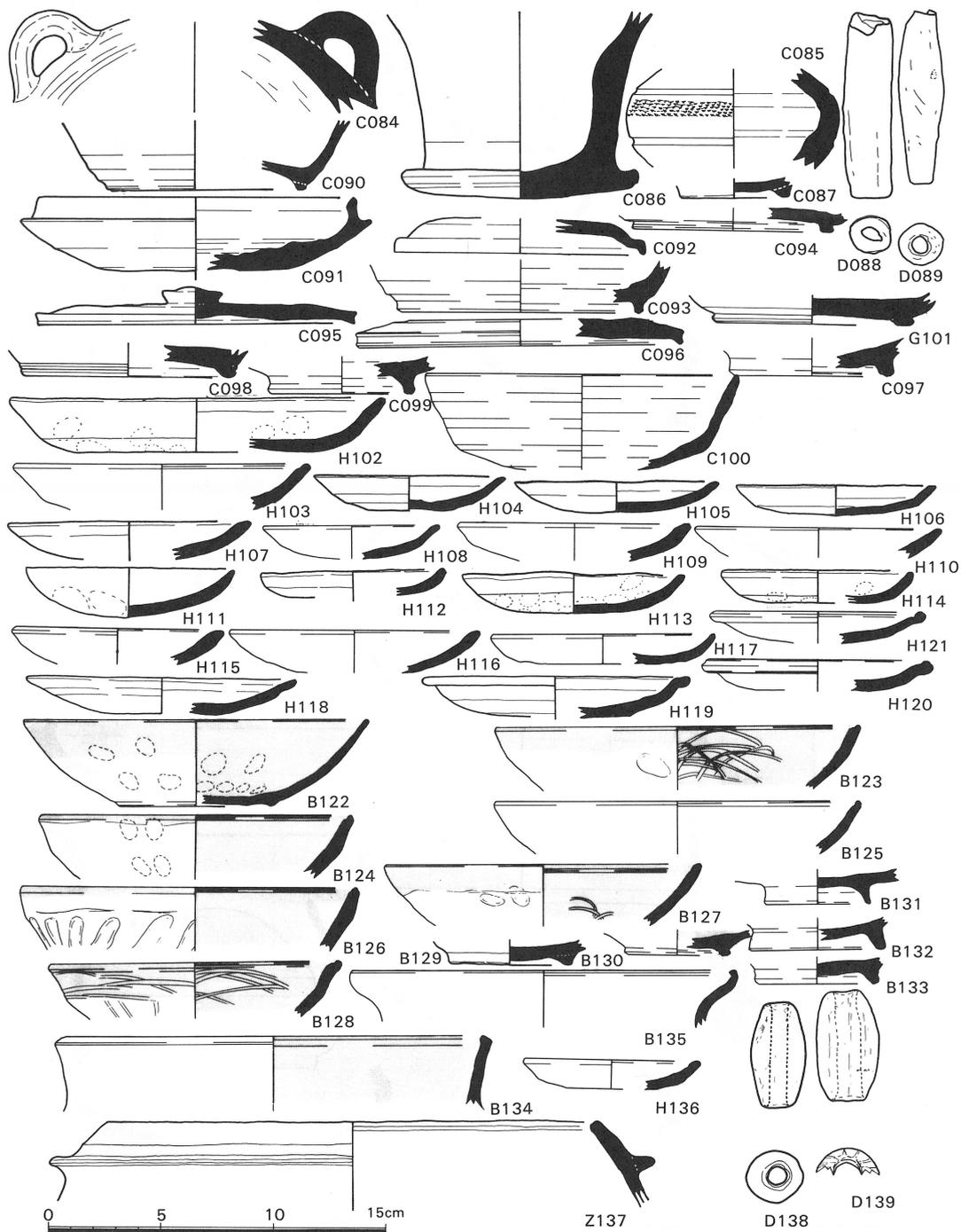
・G10・11 (H030、Z033~Z035、P036、K037、D038~D041) G11 (H042、H043、B044)
 ・G14 (C045) G18 (C046~C049)

第13図 出土遺物実測図(2)



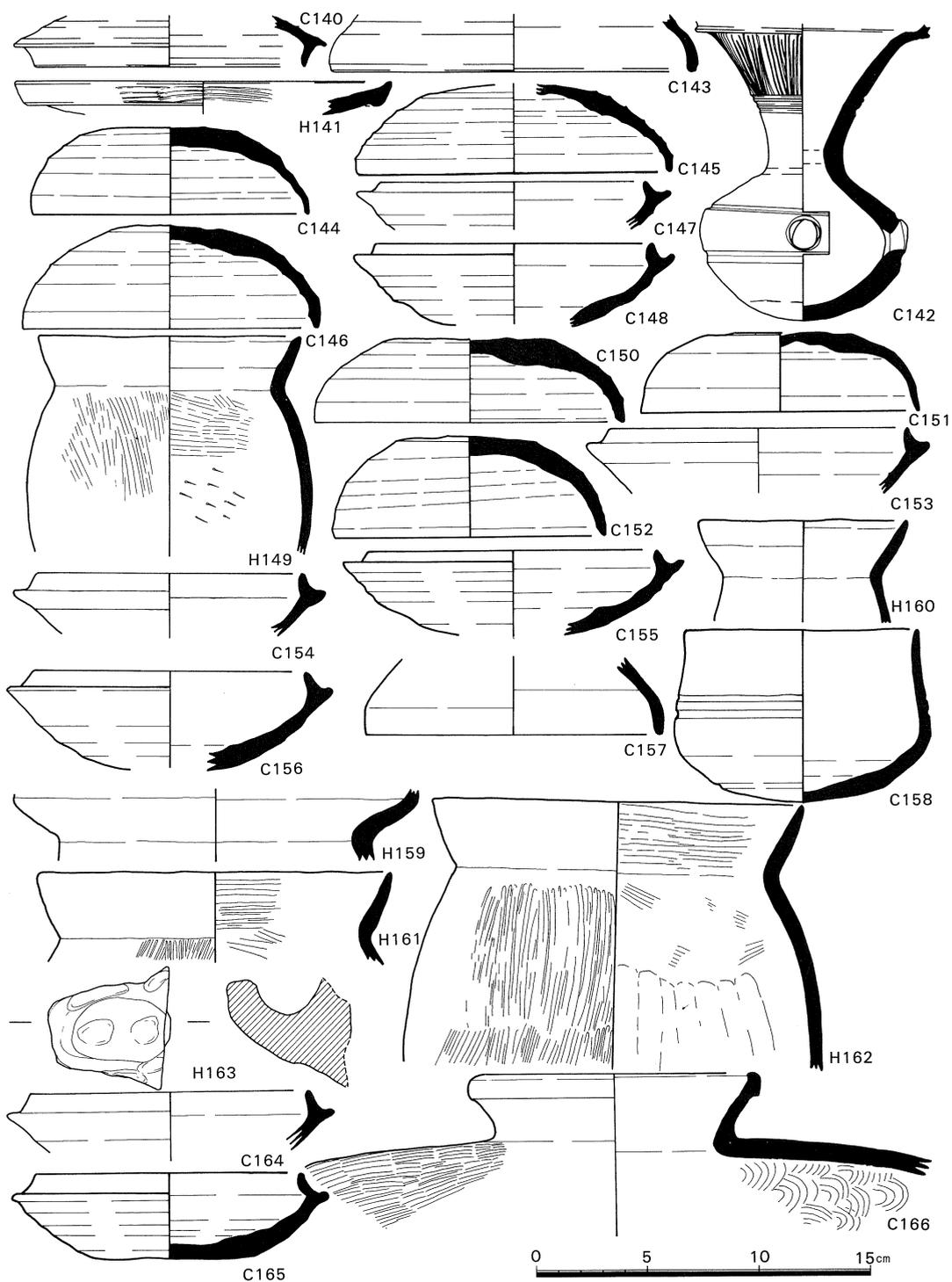
- ・ G21 (D050) G24 (D051、E052~E063、C064) G26 (C065、C066)
- ・ H1 (C067、C068、D069、C070~C075、H076、B077) H2 (C078~C083)

第14図 出土遺物実測図(3)



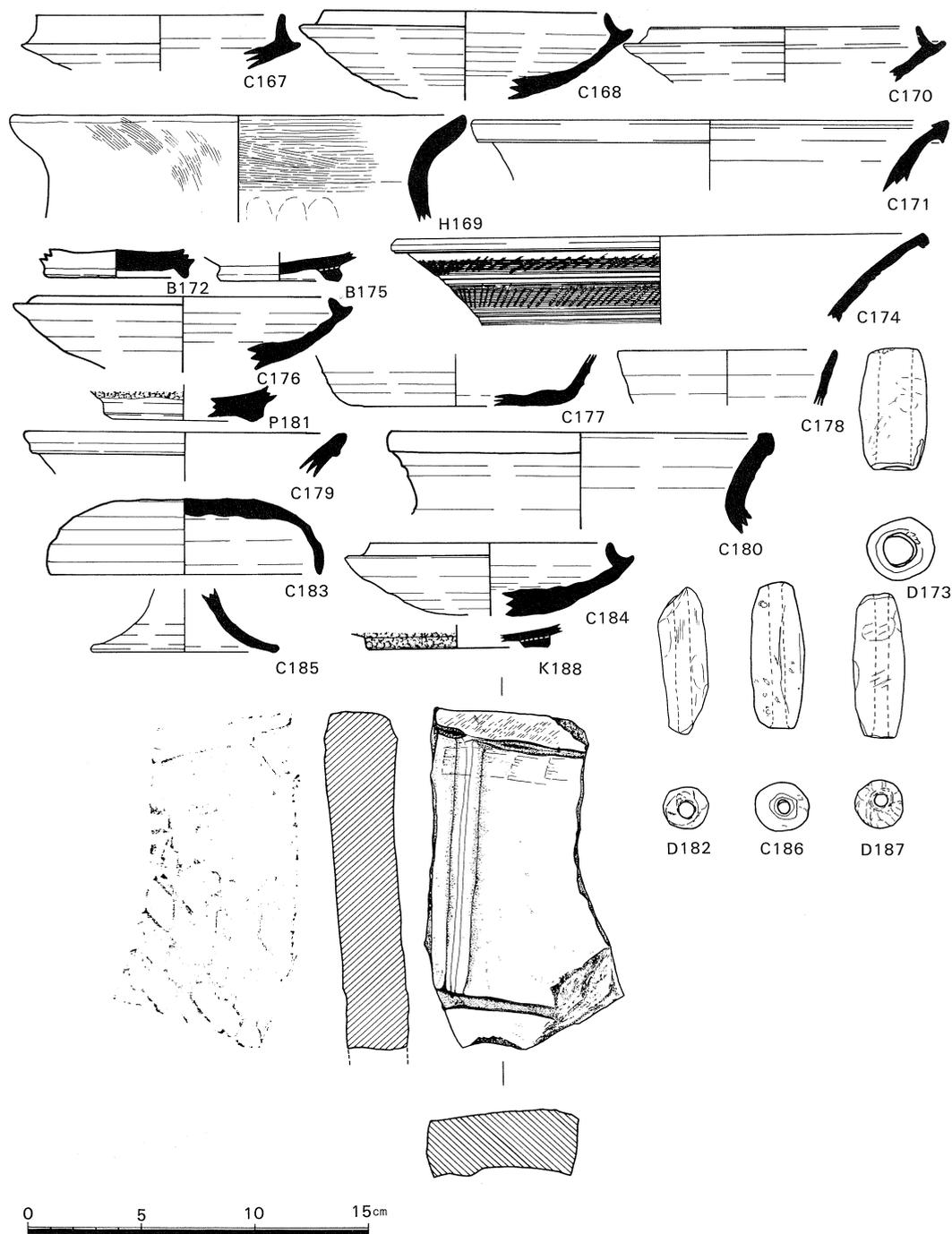
- H2 (C084~C087, D088, D089) H3 (C090~C092) H5 (C093, C094)
- H7 (C095~C100, G101, H102~H121, B122~B135, H136, Z137, D138, D139)

第15図 出土遺物実測図(4)



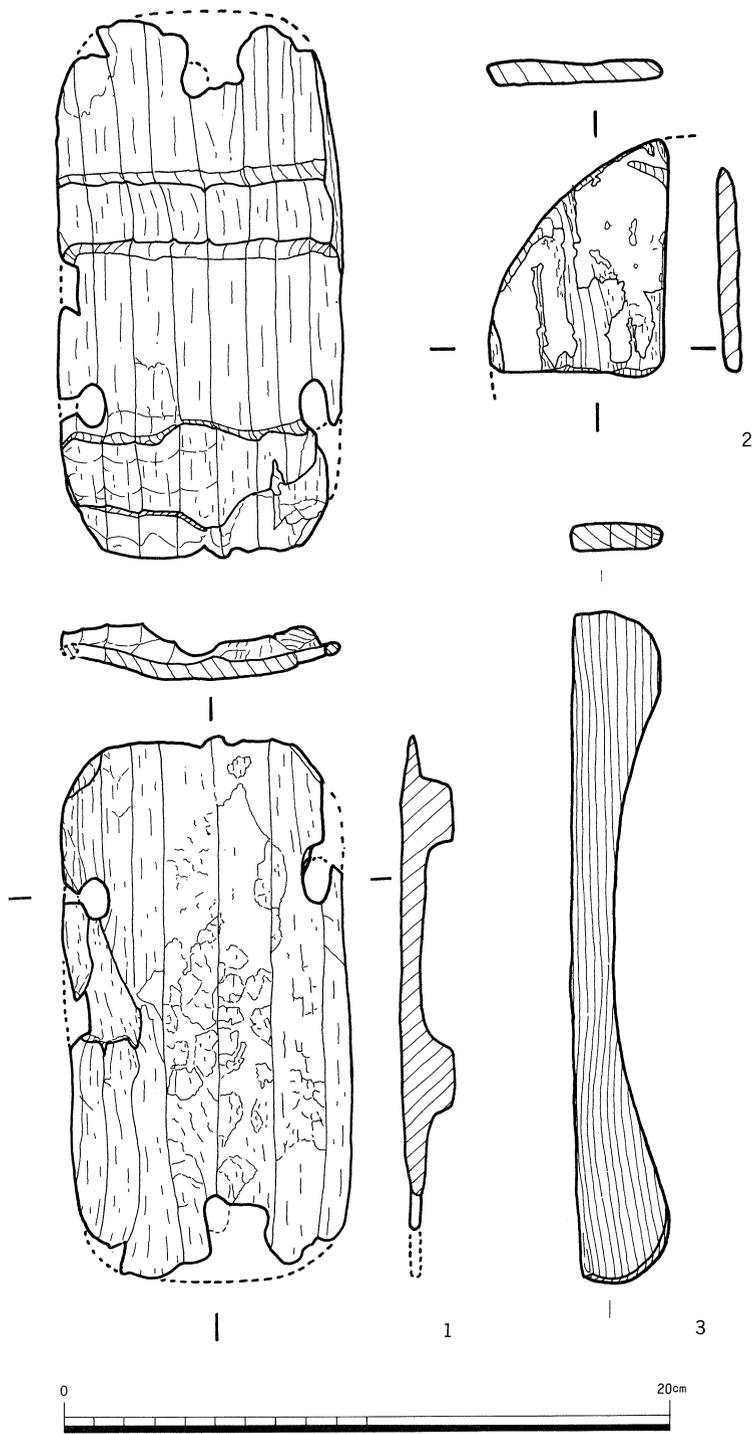
・H11 (C140、H141、C142) H13 (C143)
 H17 (C144~C148、H149、C150~C158、H159~H163、C164~C166)

第16図 出土遺物実測図(5)



・H17 (C167、C168、H169) H18 (C170、C171、B172、D173) H20 (C174、B175、C176~C180、P181、D182) H22 (C183~C186、D187) H24 (K188)

第17図 出土遺物実測図(6)



第18図 出土木製品実測図

035は断面円形の脚である。

釜A (Z033、Z035) 口縁部がほぼ直立するもの。

釜B (H029) 受口状を呈する口縁部で、第一口縁は外傾する。

(9) 輸入陶磁

輸入陶磁の出土は少なく、2点のみを図示した。12～13世紀代のものであろう。

白磁碗 (P036) 玉縁状口縁をもった碗である。太宰府の編年で、12～13世紀代に通有なものである。

青磁碗 (P181) 断面逆台形の高台をもつ青磁碗である。

(10) 土製品

各地点より、大量の土錘が出土しており、その形態も多様で、かなりの時期幅をもつ資料である。

土錘A₁ (D069、D088、D089、D182、D186、D187) 最大径が2.0cm前後で長さ8.0cm前後の細長い土錘のうち、須恵器のものをA₁とした。

土錘A₂ (D038) 土錘Aタイプ°のうち、土師質のもの。

土錘B (D039～D041、D050、D138、D139、D173) 最大径3.9cm前後、長さ6.6cm前後の土錘すべて土師質である。

土錘C (D051) 楕円形の小型の土錘である。1点のみの出土で、土師質である。

(大橋 信弥)

VI. おわりに

今回の調査は、道路幅10m余の狭長なものであったため、必ずしも遺跡の実態は明らかにできなかった。しかしながら、結果的には、五条遺跡のほぼ中央を、南北に縦断する長いトレンチを設定したことになり、遺跡が南北700m以上の広大なものになることが確認され、弥生時代、古墳時代、平安時代の各期の遺構、遺物を検出した。特に、古墳時代後期から奈良時代初頭にかけての集落は、保存状況の良好なものであって、注目される場所であった。今後の調査研究の進展によって、五条遺跡の全様が明らかになることを期待したい。

(大橋 信弥)

トレンチ番号新旧対照表

報告書 番号	旧番号	第1遺構面	第2遺構面	第3遺構面	報告書 番号	旧番号	第1遺構面	第2遺構面	第3遺構面
H01	H09	○			H19	H17		○	
H02	H12	○			H20	H04		○	○
H03	H10	○			H21	H05		○	○
H04	T-6	○			H22	H15		○	
H05	T-7	○			H23	H03		○	
H06	H11	○	○	○	H24	H14		○	
H07	H13	○	○		H25	-			
H08	-				H26	-			
H09	-				H27	-			
H10	-				H28	-			
H11	T-5		○		H29	-			
H12	T-4		○		H30	-			
H13	T-3		○		H31	T-9			○
H14	T-2		○		H32	T-10			○
H15	T-8		○		H33	H07		○	○
H16	T-1		○		H34	H02			○
H17	H06		○		H35	H01		○	○
H18	H16		○		H36	H08		○	○

出土遺物観察表

G-10・11

器種	器形	図版 番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成 色調)
須恵器	坏蓋B ₂	C001	第1遺構面	※口径18.1	端部は外面に凹面をもって垂下し丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、 暗灰色
須恵器	坏身B ₁	C002	第1遺構面	口径12.2 ※底径 6.9	ほぼ平坦な底部から、体部が外上方へのび、端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、 淡灰色
須恵器	坏身B ₂	C003 } C005	第1遺構面	※底径 8.5 } 12.6	ほぼ平坦な底部から、体部が外上方へのびる、底部外周に断面台形の高台を貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、 灰色
灰釉	坏	C006	第1遺構面	口径12.6 底径 6.0	平坦な底部より内湾して立ち上がる口縁を有する。端部は丸く納める。底部外周より断面台形の短い高台が内接して外方へ貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、 淡黄灰色 (内面体部 自然釉付着)
土師器	皿	H007	第1遺構面	※口径15.0	口縁部は直線的に立ち上がり、底部との境に屈曲部を成す。端部は面取りを成す。	内外面共横ナデ	良好、良好、 茶褐色
土師器	大皿B	H008	第1遺構面	※口径13.9	口縁部は内湾し、端部が小さく外反する。	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡褐色
土師器	大皿C	H009	第1遺構面	※口径14.8	口縁部が屈曲して外反し、体部との境界が明確なもの。	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡褐色
土師器	大皿A	H010	第1遺構面	※口径 8.7	口縁部は1段のナデにより引き起され、端部は外方へつまみ出す。	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡褐色
土師器	小皿A	H011 } H013 } H015 } H017 } H019	第1遺構面	※口径14.2 } 16.4	口縁部は1段又は2段のナデにより引き出され内湾気味にのびる。端部は丸く納める。	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡褐色
土師器	小皿B	H014	第1遺構面	※口径 7.3	口縁部は1段又は2段のナデにより引き出され内湾気味にのびる。端部は丸く納める。	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡褐色
土師器	小皿D	H016 } H018 } H020 } H021	第1遺構面	※口径 6.6 } 9.0	口縁部は直線的にもち上がり、底部との境にわずかではあるが屈曲部を成す。端部は丸く納めるもの(H020)面取りを成すもの(H016、H018、H021)がある。	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡褐色
黒色土器	碗B ₁	B022 } B024 } B026	第1遺構面	※口径12.3 } 16.2	体部は内湾して上方へのび、端部は丸く納める。B026口縁内面に凹線を巡らす。	内外面共横ナデ、B026の内面篋磨き。	良好、良好、 内面黒褐色、 外面淡褐色
黒色土器	碗B ₂	B025 } B027	第1遺構面	※口径14.5 } 16.4	口縁部がゆるやかに内湾するが、端部が短かく外反するもの	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡褐色

器種	器形	図版番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成調色)
黒色土器	碗底部C	B028	第1遺構面	※底径 5.7	底部外周に断面三角形の高台が内接して外方へ貼り付けてある。	内外面共横ナデ	良好、良好、淡褐色
土師器	長胴甕A	H030	第1遺構面	口径15.2 腹径28.6	『く』字状口縁を呈する。端部は上方へつまみ出す。	口縁部内外面共横ナデ、体部外面ハケ調整、内面篋削り。	良好、良好、淡褐色
土師質土器	釜B	H029	第1遺構面	口径23.7	受口状口縁を呈する。端部は水平な面を成す。	口縁部内外面共横ナデ、外面体部はハケ調整。	良好、良好、淡褐色
土師質土器	足釜	Z031 Z032 Z034	第1遺構面	※口径22.9 } 33.1	ゆるやかに内湾する口縁部を有す。端部は水平な面を成す。つばの断面は台形を成す。	内面ハケ調整、外面横ナデ	良好、良好、淡褐色
土師器	釜A	Z033 Z035	第1遺構面	—	なだらかに外方へ開く。断面径2.6cmの円柱を成す。	手づくね成形後篋削り。	良好、良好、淡褐色
輸入磁器	白磁碗	D036	第1遺構面	口径13.3	上外方へ直線的に開き、端部は外側へ肥厚する。	内外面共横ナデ、淡緑釉を施す。	精良、良好、淡緑灰色
緑釉	碗	G037	第1遺構面	底径 4.0	ほぼ平底の外周に断面四角形の高台を外接し貼り付ける。	内外面共横ナデ、緑釉を施す。	クサリ礫含有、良好、明濃緑色
土製品	土鍾A ₂	D038	第1遺構面	※径 1.6	土師質で、細長いタイプの土鍾である。	手づくね成形	良好、良好、淡褐色
土製品	土鍾B	D039 } D041	第1遺構面	※径 1.6 } 3.9 ※長さ3.7 } 6.6	円柱形を呈する。ほぼ中央に径0.7~1.7cmの円孔を貫く。	手づくね成形	良好、良好、淡褐色

G-11

土師器	小皿A	H042 H043	遺構面	※口径 7.2 8.0	口縁部は1段又は2段のナデにより引き起され、内湾する。端部は丸く納める。	内外面共横ナデ	良好、良好、淡褐色
黒色土器	碗B ₁	B044	遺構面	口径14.3	口縁部は内湾、端部内面に凹線を巡す。	内面篋磨き、外面横ナデ	良好、良好、内面淡褐色、外面暗茶褐色

G-14

須恵器	坏身B ₂	C045	黄褐色粘土	口径17.1 底径 9.4	ほぼ平坦な底部から屈曲して立ち上がる口縁部を呈す。端部は丸く納める。底部外周に断面四角形の高台を内接して外方へ貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、暗灰色
-----	------------------	------	-------	------------------	---	-----------	-----------

G-18

須恵器	坏蓋A ₁	C046	灰褐色粘土	※口径12.8	天井部と口縁部との境に甘い稜線を有す。端部は内傾して外方へつまみ出す。	内外面回転共横ナデ	良好、良好、淡灰色
-----	------------------	------	-------	---------	-------------------------------------	-----------	-----------

器種	器形	図版番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成色)
須恵器	坏身A ₂	C047 C048	灰褐色粘土	※口径 9.9 11.5	体部はゆるやかに内湾する。立ち上り部はやや内傾し端部は丸く納める。受部はほぼ水平で短かく端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、 暗灰褐色
須恵器	鉢B	C049	灰褐色粘土	口径10.9	内湾してのび、端部は内傾する面を成す。	内外面共回転横ナデ、外面凹線文を施す。	良好、良好、 暗灰色

G-21

土製品	土錘B	D050	攪乱層	径 2.5 長さ 5.1	中央部がわずかに張る円柱形を呈する。中心部に径1.2cm程の円孔を穿つ。	手づくね成形。	良好、良好、 淡褐色
-----	-----	------	-----	-----------------	--------------------------------------	---------	---------------

G-23

土製品	土錘C	D051	第1遺構面	径 2.4 長さ 1.3	円柱形を呈する。中心部に径0.6cm程の円孔を穿つ。	手づくね成形。	良好、良好、 淡褐色
-----	-----	------	-------	-----------------	----------------------------	---------	---------------

G-24

弥生土器	細頭壺	E052	黒褐色泥土	腹径15.4 底径 2.8	体部は扁球形を呈し平底をもつ	内面体部横ナデ、底部ハケ調整、外面篋磨き	良好、良好、 内面淡茶褐色、 外面淡紅褐色
土師器	壺	E053	黒褐色泥土	口径13.1	なだらかに外反し端部をつまみ上げる。	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡紅褐色
弥生土器	甕A	E054 E057	黒褐色泥土	※口径13.8 15.0	受口状口縁を呈する。端部は外方へつまみ出し内傾する面を成す。	内外面共横ナデ。E055肩部に櫛描烈点文、E057櫛描直線文を施す。	暗茶褐色 (E054、E057) 淡褐色
弥生土器	鉢A	E058	黒褐色泥土	※口径11.9	受口状口縁を呈する。端部は丸く納める。	内外面共横ナデ	良好、良好、 淡褐色
古式土師器	甕	E059	黒褐色泥土	※口径10.9 腹径12.1	『く』字状口縁を呈する。端部をつまみ上げる。	口縁部内外面横ナデ、体部内外面ハケ調整	良好、良好、 淡褐色
弥生土器	甕底部	E060	黒褐色泥土	※底径 3.2	わずかに突出した上げ底を呈する。	内外面共ハケ調整	良好、良好、 淡褐色
弥生土器	鉢A	E061	黒褐色泥土	※口径15.8 ※腹径16.9	受口状口縁を呈する。端部は平坦な面を成す。体部は扁球形を呈すると思われる。	内外面共横ナデ、外面櫛描直線文を施す。	良好、良好、 内面淡紅褐色、 外面淡茶褐色
弥生土器	器台	E062	黒褐色泥土	※口径19.9	口縁端部を垂下させる。	内外面共横ナデ、口縁外端面に櫛描直線文を施す。	良好、良好、 淡紅褐色
弥生土器	高坏	E063	黒褐色泥土	※底径20.1	なだらかに『ハ』字状に開く脚部を呈する。透孔を3ヶ所に穿つ。	内面しぼり目、外面篋磨き	良好、良好、 褐色
須恵器	坏蓋A ₂	C064	第1遺構面	口径13.0	全体的に扁平な形態を呈する。天井部と口縁部との境界はなく、端部は内傾する面を成す。	内外面共回転横ナデ	クサリ礫含有、 良好、 内面淡赤灰色、 外面灰色

G-26

器種	器形	図版番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成調色)
須恵器	坏身B ₂	C065	第1遺構面	※底径 9.5	ほぼ平坦な底部を呈す。底部外周に断面四角形の高台を内接して外方へ貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	罎	C066	遺構面	※口径14.9	屈曲して内湾気味に立ち上り、端部は尖る。	内外面共回転横ナデ、外面に凹線を施す。	良好、良好、淡灰色

H-01

須恵器	高坏	C067	溝内	—	『ハ』字状になだらかに開く脚部を有す。	内外面共横ナデ	良好、良好、灰色
須恵器	坏身B ₁	C068	溝内	※底径 7.5	平坦な底部より屈曲して立ち上がる体部を有す。	内外面共回転横ナデ、体部下方に強いナデにより段を成す。	良好、良好、淡灰色
土製品	土錘A ₁	D069	溝内	長さ 9.0 径 3.1	円柱状を呈し、ほぼ中央に径0.9cm程の円孔を穿つ。	手づくね	良好、良好、灰色
須恵器	坏身B ₂	C070	溝内	※底径10.1	平坦な底部より屈曲して立ち上がる体部を有す。底部外周に断面四角形の高台を内接に貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	壺A	C071	第1遺構面	※口径10.9	口縁部は垂直に立ち、端部は尖り気味に納める。	内外面共回転横ナデ、外面に凹線を巡らす。	良好、良好、淡灰色
須恵器	坏身A ₂	C072	遺構面	—	底部、立ち上り部欠損、受部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	罎A	C073	遺構面	※口径14.5	内湾して立ち上がり、端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ、外面に凹線を巡らす。	良好、良好、淡灰色
須恵器	壺B	C074	遺構面	※口径13.1	外反して立ち上がり、端部は外方へ肥厚する。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、内面暗灰色、外面淡灰色
須恵器	鉢A	C075	遺構面	底径 8.8	平坦な底部を有し、体部は外方へ立ち上がる。	内外面共回転横ナデ、内面底部に円孔をあける。	良好、良好、灰色
土師器	長胴甕B	H076	遺構面	※口径15.9	わずかに受口を呈する。端部を丸く納める。	内外面共横ナデ	良好、良好、淡褐色
黒色土器	碗底C	B077	遺構面	底部 4.8	丸底の外周に断面台形の高台を内接に貼り付ける。	調整不明。	良好、良好、淡褐色

H-02

須恵器	坏蓋A ₂	C078	溝内	口径10.6 器高 4.0	天井部と口縁部との境界はほとんどなく口縁部は垂直に垂下する。端部は内傾する面を成す。	内外面共回転横ナデ、天井部静止篋切り後末調整。	良好、良好、灰色
須恵器	坏身A ₁	C079	遺構面	※口径12.7	立ち上がり部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸く納める。受部は水平にのび、端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	坏身B ₁	C080	遺構面	※底径10.4	ほぼ平底の外周に断面四角形の高台を内接に貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、灰色

器種	器形	図版番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成色調)
須恵器	壺B	C081	遺構面	※口径13.9	外反して開き、端部は外方へ肥厚する。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、内面黒色
須恵器	壺A	C083	遺構面	※底径 7.1	ほぼ平底の外周に、断面四角形の高台を貼り付けたもの	内外面共回転横ナデ	良好、良好、灰色
須恵器	壺B	C082	遺構面	—	外反して開く頸部を有す。	内面叩き調整、外面ハケ調整	良好、良好、淡灰色
須恵器	提瓶	C084	遺構面	—	球形の肩部に半円形の耳を貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	罍B	C085	遺構面	腹径 9.5	扁球状の体部を有す。	内面回転横ナデ、外面に凹線文櫛描列点文を施す。	良好、良好、淡灰色
須恵器	鉢A	C086	遺構面	底径 8.2	ほぼ平坦な底部から外反気味に開く体部を有す。	外面回転横ナデ	良好、良好、暗灰色
黒色土器	碗底部C	B087	遺構面	底径 4.5	平坦な底部の外周に断面台形の高台を貼り付ける。	内外面共横ナデ	良好、良好、茶褐色
土製品	土錘A ₁	D088 D089	遺構面	長さ 7.7 8.2 径 1.8 2.0	円柱状を呈し、ほぼ中央に径0.7cm程の円孔を穿つ。	手づくね	良好、良好、灰色

H-03

須恵器	坏身B ₂	C090	溝内	※底径 8.2	上げ底の外周に断面台形の高台を内接し貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	坏身A ₂	C091	溝内	※口径14.0 器台 3.3	浅く扁平な形態を呈す。立ち上り部は垂直に立ち、端部は丸く納める。受部は水平にのび端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ、底部外面静止篋切り後末調整	良好、良好、灰色
須恵器	坏蓋B ₁	C092	第1遺構面	※口径11.1	全体的に平坦な形態を呈す。端部は垂下し丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色

H-05

須恵器	坏身B ₂	C093 C094	遺構面	底径 5.3 4.3	平坦な底部の外周に断面台形の高台をほぼ垂直に貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	小砂含有、良好、青灰色
-----	------------------	--------------	-----	---------------	------------------------------	-----------	-------------

H-07

須恵器	坏蓋B ₂	C095 C096	沼沢地内	口径14.1 器高 1.7	水平に開く形態を呈す。端部に凹線を巡らす。擬宝珠様のつまみを貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、暗灰色
須恵器	坏身B ₂	C097 C099	沼沢地内	※底径 6.2 9.3	平坦な底部の外周に断面四角形の高台を内接に貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、灰色
須恵器	高坏	C100	沼沢地内	※口径15.8	受部はやや内湾気味に外上方にのび、口縁部は、体部から内反したのち、直線的に外上方にのびる。	内外面共横ナデ	良好、良好、淡褐色

器種	器形	図版番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成色調)
緑釉	坏	G101	沼沢地内	底径 6.6	平坦な底部の外縁に、断面四角形の高台を貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡橙色
土師器	大皿B	H102 H103	沼沢地内	※口径16.6 13.0	口縁部は横ナデにより引き起され外反する。端部は丸く納める。	内外面共横ナデ、指圧痕あり	良好、良好、褐色
土師器	小皿A	H110 H111 H113 H116	沼沢地内	※口径 8.2 } 10.0	口縁部は横ナデにより引き起され内湾する。端部は丸く納める。	口縁端部横ナデ、底部指圧痕あり。	良好、良好、茶褐色
土師器	小皿B	H104 H105 H107 } H109	沼沢地内	※口径 8.8 } 10.7	口縁部は横ナデにより引き起され外反する。端部は平坦な面を成す。	内外面共横ナデ	良好、良好、淡褐色
土師器	小皿C	H106	沼沢地	※口径 7.6	口縁部と体部の境界が、明確に屈曲して、区別できるもの。	内外面共横ナデ	良好、良好、茶褐色
土師器	小皿D	H112 H114 H117	沼沢地	※口径 8.8 } 10.7	口縁部は短かく内反して、体部との境界が明確なもの	内外面共横ナデ	良好、良好、淡茶褐色
土師器	小皿E	H118 } H121	沼沢地	※口径11.9 } 12.0	『て』字状口縁を呈し、端部は丸く納める。	内外面共横ナデ	良好、良好、淡茶褐色
黒色土器	碗A	B122	沼沢地	口径 3.4 器高 3.9	体部は内湾して上方へのび、口縁部は丸くおさめる。	内面に指押え痕	クサリ礫含有、良好、淡橙色
黒色土器	碗B ₁	B123 } B127	沼沢地	口径 6.9 器高 2.9	体部は内湾して上方へのび、口縁端部に凹線を巡らす。	内外面共横ナデ、指圧痕有り	小砂含有、良好
黒色土器	碗B ₂	B128	沼沢地	口径 6.4 器高 6.5	体部は内湾して上方へのび、口縁端部内面に凹線を巡らす。	内外面共粗いナデ	良好、良好、内面黒茶褐色
黒色土器	碗底部	B129 } B133	沼沢地内	※底径 5.2	ほぼ平坦な底部の外周に断面台形高台を貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、灰褐色
黒色土器	甕A	B134	沼沢地内	※口径18.8	頸部より直線的に上方へのび、端部を平坦におさめる。	内外面に指押え痕、横ナデ	微砂粒を含む、良好、暗茶色
黒色土器	甕B	B135	沼沢地内	※口径15.0	屈曲して、端部は内傾気味にそり込む。	内外面に指押え痕、横ナデ	微砂粒を含む、良好、暗茶色
土師器	小皿B	H136	沼沢地内	※口径 7.8 器高 1.3	口縁部は2段のナデにより引き起され、直線的へのび、やや内反気味に、端部を丸くおさめる。	内外面ナデ	淡茶褐色、微長石含む、良好
瓦質土器	足釜	Z137	沼沢地内	※口径21.9	口縁部は内湾し、端部は内傾する面を成す。断面台形のつばを貼り付ける。	内外面共横ナデ	良好、良好、暗灰褐色
土製品	土錘B	D138 D139	沼沢地内	径 2.5 2.8 長さ 4.9 5.0	算盤玉状を呈した(D138)円柱形を呈する。ほぼ中央に径0.9cm程の円孔を穿つ。	手づくね	良好、良好、淡褐色

H-11

器種	器形	図版番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成色)
須恵器	坏身	C140	遺構面	口径10.6	浅い扁平な形態を呈し、立ち上がり部は低く、受部は短かく、端部を丸くおさめる。	内外面共回転横ナデ	微砂粒含良好、淡灰色
須恵器	罍B	C141	遺構面	※口径17.0 残高 1.5	直線的に上外方へ開き、口縁端部は外方へ肥厚する。	内外面共横ナデ、内面口縁部指圧痕あり。	微砂粒含む良好、淡灰茶色
須恵器	罍B	C142	遺構面	口径 - 器高13.4	ほぼ球形の体部を呈し、最大腹径付近に円孔を穿つ。大きくラップ状に開く口縁部を呈し、端部は水平に開き、外端面に浅い凹線を巡らす。	内面口縁部横ナデ、外面口縁部ハケ目、沈線、横ナデ、体部横ナデ、沈線、底部篋削り後ナデ	精良、良好明灰色

H-13

須恵器	坏蓋	C143	遺構面	口径 8.0 器高 2.6	口縁部は内湾気味にのび、端部は丸く納める。	内外面共横ナデ	良好、良好、淡青灰色
-----	----	------	-----	------------------	-----------------------	---------	------------

H-17

須恵器	坏蓋A ₂	C144 } C146	SK-1	口径12.5 } 14.2	天井部と口縁部との境界はなく口縁端部を垂直からやや内傾気味に押さえる。全体に浅く扁平な形態を呈する。	内面回転横ナデ、外面天井部静止篋切り、口縁部回転篋削り及び端部回転横ナデ。	良好、良好、淡灰色
須恵器	坏身A ₂	C147 C148	SK-1	口径12.0 12.5	全体的に浅い扁平な形態を呈する。立ち上り部は低く、受部の端部共丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、灰色
土師器	長胴甕B	H149	SK-1	※口径11.8 ※腹径12.9	『く』字状口縁を呈し、端部は内傾する面を成す。	口縁部内外面共横ナデ、体部内外面共ハケ調整	良好、良好、淡茶褐色
須恵器	坏蓋A ₂	C150 } C152	SK-2	口径12.1 } 13.9	全体的に扁平な形態を呈する。天井部と口縁部との境界はなく、端部は内傾する面を成す。	内面回転横ナデ、外面天井部回転篋削り、口縁部回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	坏身A ₂	C153 } C156	SK-2	口径11.9 } 13.0	全体的に浅く扁平な形態を呈する。立ち上り部は低く内傾気味に立ち上る。受部の端部共に丸く納める。	内外面共回転横ナデ、C153外面底部回転篋切り。	良好、良好、淡灰色
須恵器	罍A	C157	SK-2	※口径13.2	内湾気味に立ち上がり、端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	鉢B	C158	SK-2	口径10.5 腹径11.5 底径 1.0 器高 7.7	丸い底から外反気味に立ち上がり端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ、外面体部凹線文を施す。	良好、良好、淡灰色
土師器	長胴甕B	H159	SK-2	-	受口状口縁を呈すると思われる	内外面共横ナデ	良好、良好、淡褐色
土師器	長胴甕B	H160 } H162	SK-2	※口径 9.4 } 16.7	『く』字状口縁を呈する。端部は尖り気味に納める。	口縁部内面横ナデ、体部内外面共ハケ調整	良好、良好、淡褐色、H162暗茶褐色

器種	器形	図版番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成調色)
土師器	把手	H163	S K - 2	-	ゆるやかに内湾する把手	手づくね	小砂含有、良好、淡橙褐色
須恵器	坏身A ₂	C164	P - 1	※口径12.6	立ち上り部はやや内傾し端部は丸く納める。受部はほぼ水平で短かく端部は丸く納める。	内外面回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	坏身A ₂	C165	P - 2	※口径12.1	全体的に扁平な形態を呈する。立ち上り部は内湾し立ち上がり、受部は水平で端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ、底部静止篋切り後末調整	良好、軟質淡灰色
須恵器	横瓶	C166	P - 2	※口径12.8	口縁部は外反し端部は外側に折り曲げ肥厚する。	体部内面叩き目、外面ハケ調整	良好、良好、淡灰色
須恵器	坏身A ₂	C167	P - 3	※口径10.3	立ち上り部はほぼ垂直に立ち、端部は丸く納める。受部は水平で端部は丸く納める。	内外面共横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	坏身A ₂	C168	P - 4	※口径12.6	全体的に浅く扁平な形態を呈する。立ち上がりは内傾し端部は丸く納める。受部端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
土師器	長胴甕C	H169	P - 4	※口径20.0	なだらかに外反し、端部はわずかに上方へつまみ上げる。	内外面共ハケ調整	良好、良好、淡褐色

H - 18

須恵器	坏身A ₂	C170	遺構面	口径 5.9 器高 2.5	浅く扁平な形態で、立ち上がりは内傾し立ち上がり、受部は短かく端部を丸くおさめる。	内外面共回転横ナデ	青灰色、石英、長石含有、良好
須恵器	壺B	C171	遺構面	口径21.0	なだらかに外反し、端部は肥厚する。	内外面共横ナデ	良好、良好、内面淡灰色、外面暗青色
黒色土器	碗底部C	B172	遺構面	底径 6.1	平坦な底部の外周に断面台形の高台を有す。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡褐色
土製品	土鍾B	D173	遺構面	径 2.9 長さ 5.4	円柱形を呈し、ほぼ中央に径1.5cm程の円孔を穿つ	手づくね	良好、良好、淡褐色

H - 20

須恵器	瓶	C174	第4層(沼沢)	※口径47.8	なだらかに外反して開き、端部は下方へ肥厚する。	内外面共横ナデ、外面櫛描列点文、直線文を施す。	良好、良好、灰色
黒色土器	底部B	B175	第4層(沼沢)	※底径 5.2	丸底の底部外周に断面五角形の高台を外方へ貼り付ける。	内外面共横ナデ	良好、良好、褐色
須恵器	坏身A ₂	C176	3・4層	※口径13.1	浅い扁平な体部を有し、受け部は上方へのび丸く納める。立ち上り部は低く内傾し、端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色

器種	器形	図版番号	出土地点	法量 (cm)	形態の特徴	成形の特徴	備考 (胎土・焼成色)
須恵器	坏身B ₁	C177	3・4層	底径 8.8	平坦な底部より屈曲して立ち上がる	内外面共回転横ナデ	良好、良好、暗灰色
須恵器	壺A	C178	3・4層	※口径 9.5	上外方へ開き、端部は丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
須恵器	壺B	C179 C180	3・4層	※口径14.1 16.9	なだらかに外反し、端部は肥厚する。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、淡灰色
灰釉	坏	P181	3・4層	底径 6.2	ほぼ平坦な底部に断面四角形の高台を内接し有する。	内外面共回転横ナデ、灰釉を施す。	良好、良好、淡緑灰色
須恵器	土鍾A ₁	D182	3・4層	長さ 5.8 径 1.8	円柱状を呈す。ほぼ中央に径0.8cm程の円孔を穿つ。	手づくね	微砂含有、良好、淡灰色

H-22

須恵器	坏蓋A ₂	C183	3・4層	口径11.9 器高 3.4	天井部と口縁部の境界はなく、端部は丸く納める。	口縁部内外面共回転横ナデ、天井部回転篋削り後末調整	良好、良好、暗灰色
須恵器	坏身A ₂	C184	3・4層	※口径10.7	全体的に扁平な形を呈する。立ち上り部は内湾して立ち上がり、端部は丸く納める。受部端部も丸く納める。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、暗灰色
須恵器	高坏	C185	遺構面	※脚径 8.0	なだらかに開き、端部は丸く納める。	内外面共横ナデ、内面指圧痕あり	精緻・良好、淡青灰色
土製品	土鍾A ₁	D186 D187	3・4層	径 2.4 長さ 6.4	円柱形を呈す。ほぼ中央に径0.5cm程の円孔を穿つ。	手づくね	良好、良好、暗灰色

H-24

国産陶器	碗	K188	遺構面	※底径 7.9	平坦な底部の外周に断面四角形の高台を貼り付ける。	内外面共回転横ナデ	良好、良好、灰褐色
------	---	------	-----	---------	--------------------------	-----------	-----------

(井浦由美)



調査前景（北より）



試掘調査風景（北より）



試掘G1近景（北より）



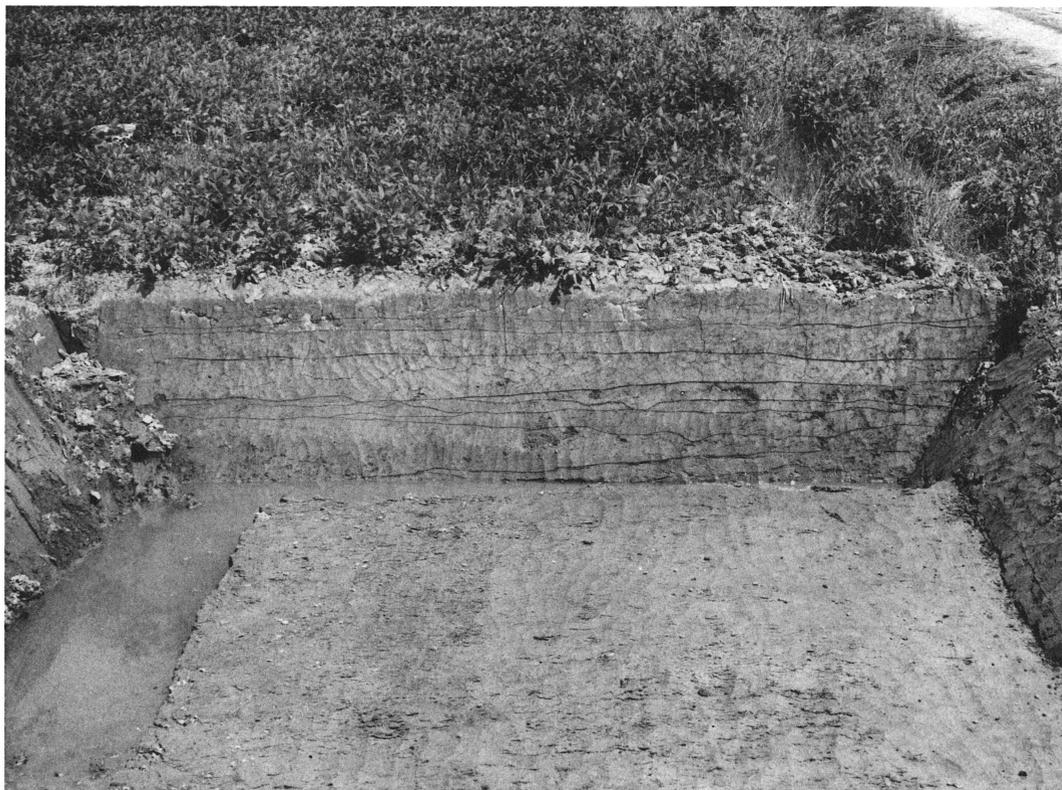
試掘G3溝状遺構（西より）



試掘G4近景（南より）



試掘G4下層調査状況（南より）



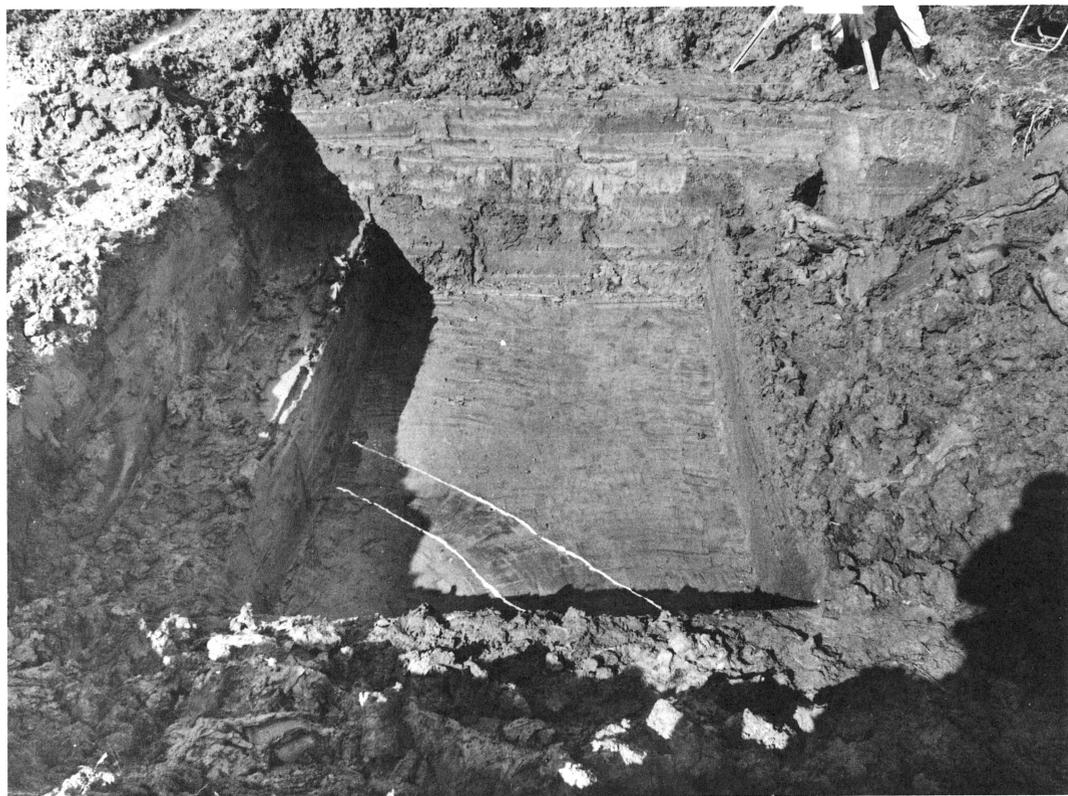
試掘G6近景（南より）



試掘G7近景（南より）



試掘G14近景（南より）



試掘G15近景（南より）



試掘G18ピット検出状況（南より）



試掘G19下層調査状況（南より）



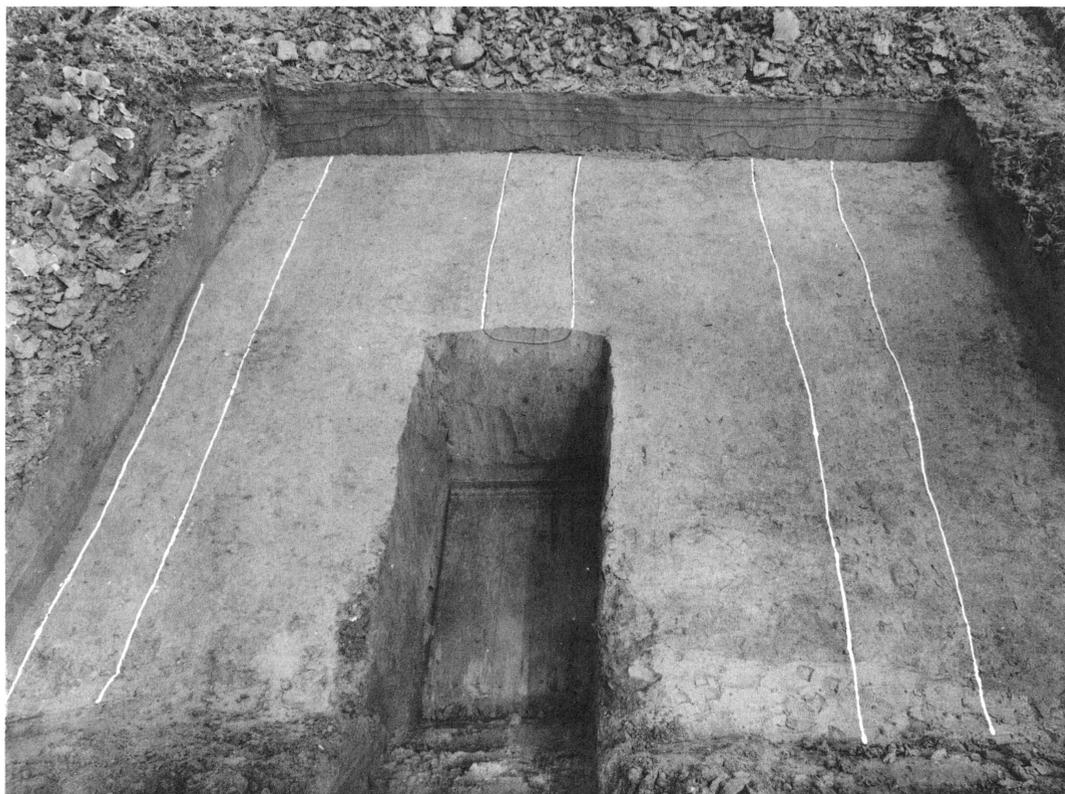
試掘G22近景（南より）



試掘G23下層調査状況（西より）



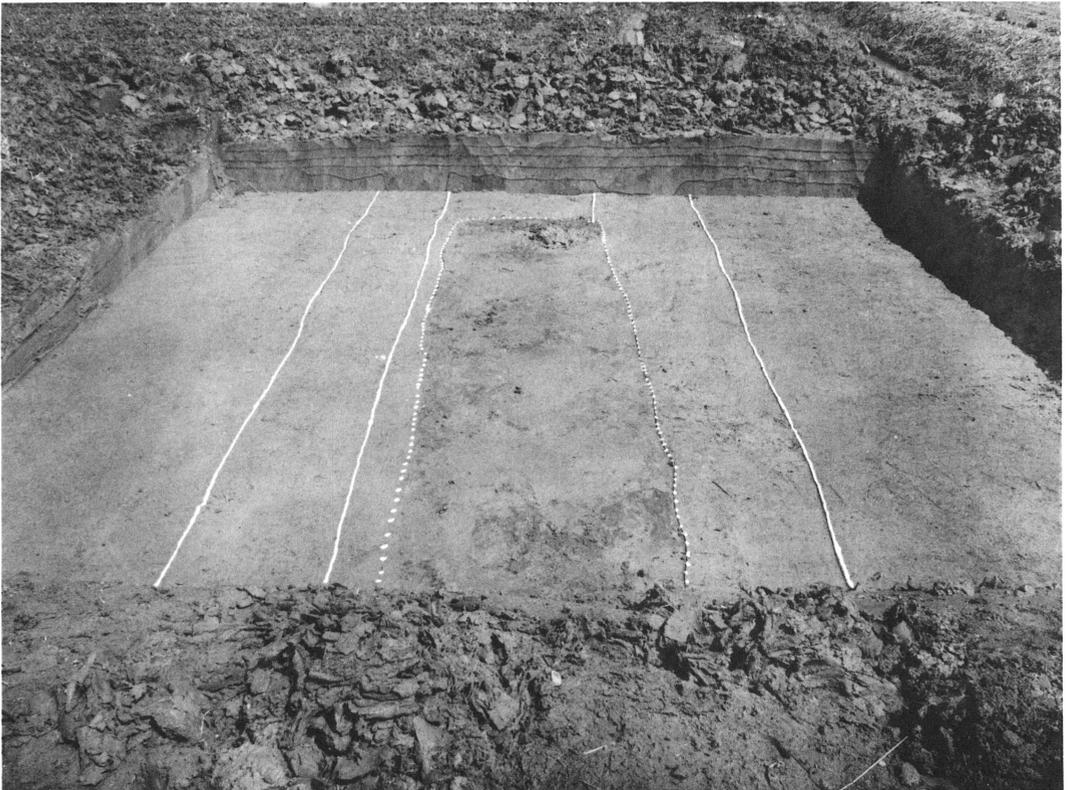
試掘G23東壁断面（東より）



試掘G24近景（南より）



試掘G25近景 (南より)



試掘G26近景 (南より)



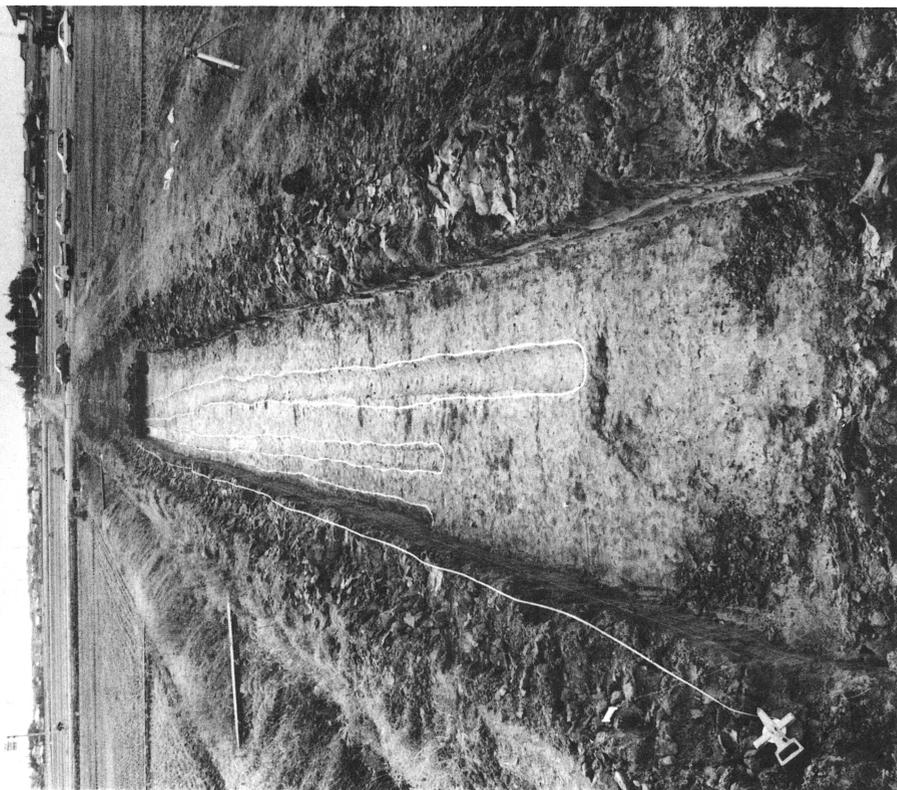
H01近景 (南より)



H02近景 (北より)



H03全景 (南より)



H04近景 (北より)



H05近景（南より）



H06全景（南より）



H12近景（北より）



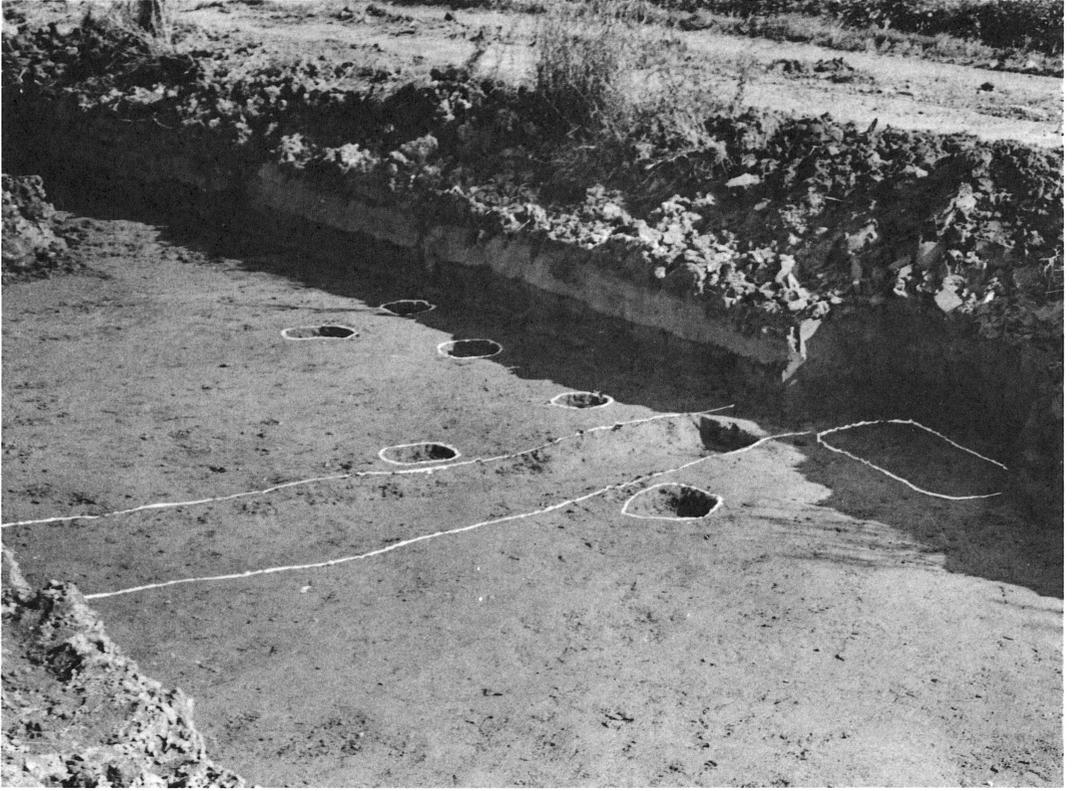
H13南半近景（北より）



H13北半近景 (南より)



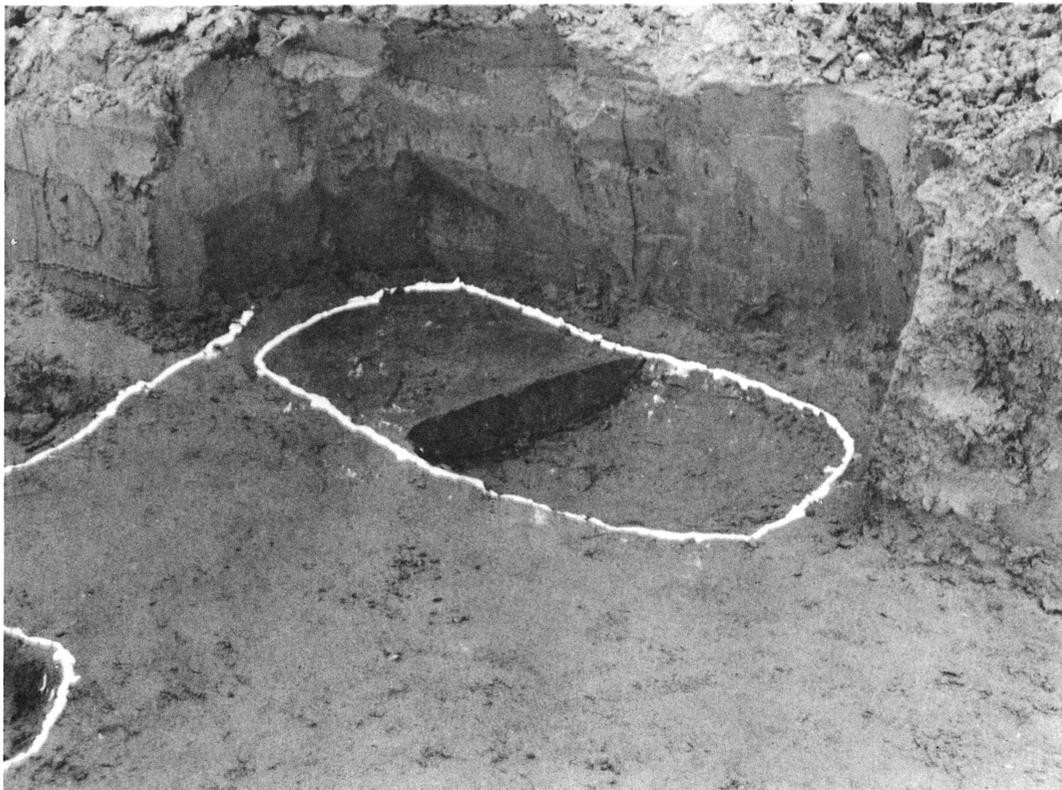
H13SB01近景 (南より)



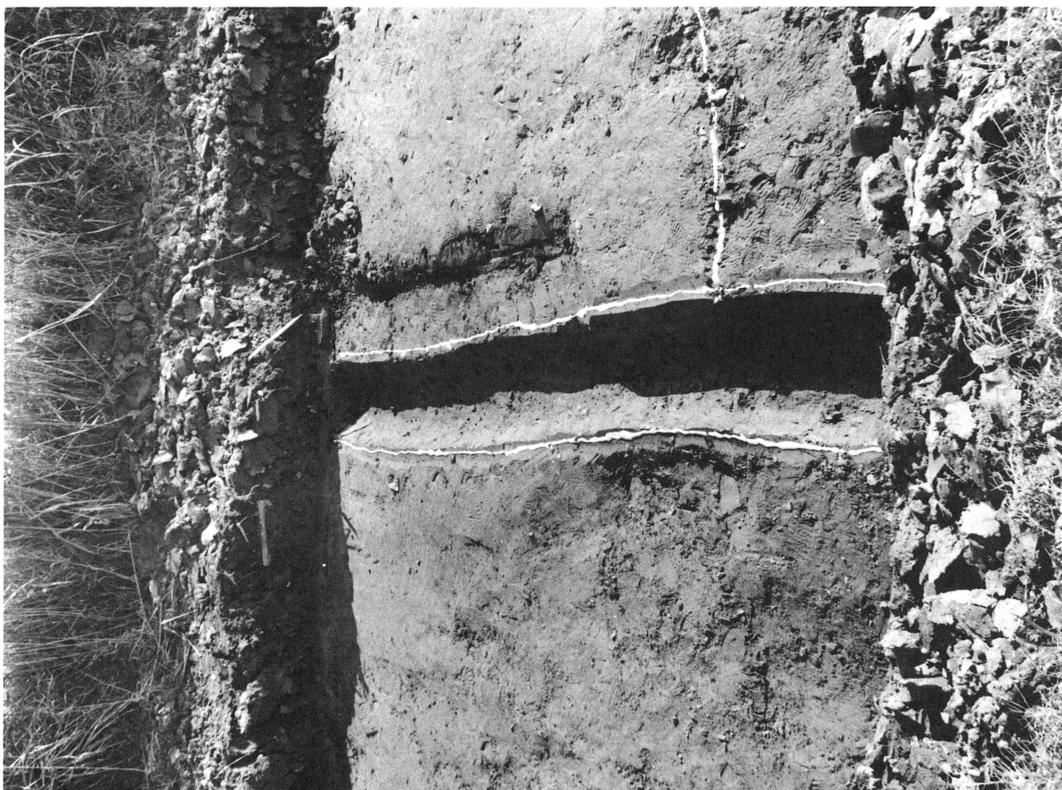
H13SB02近景 (南より)



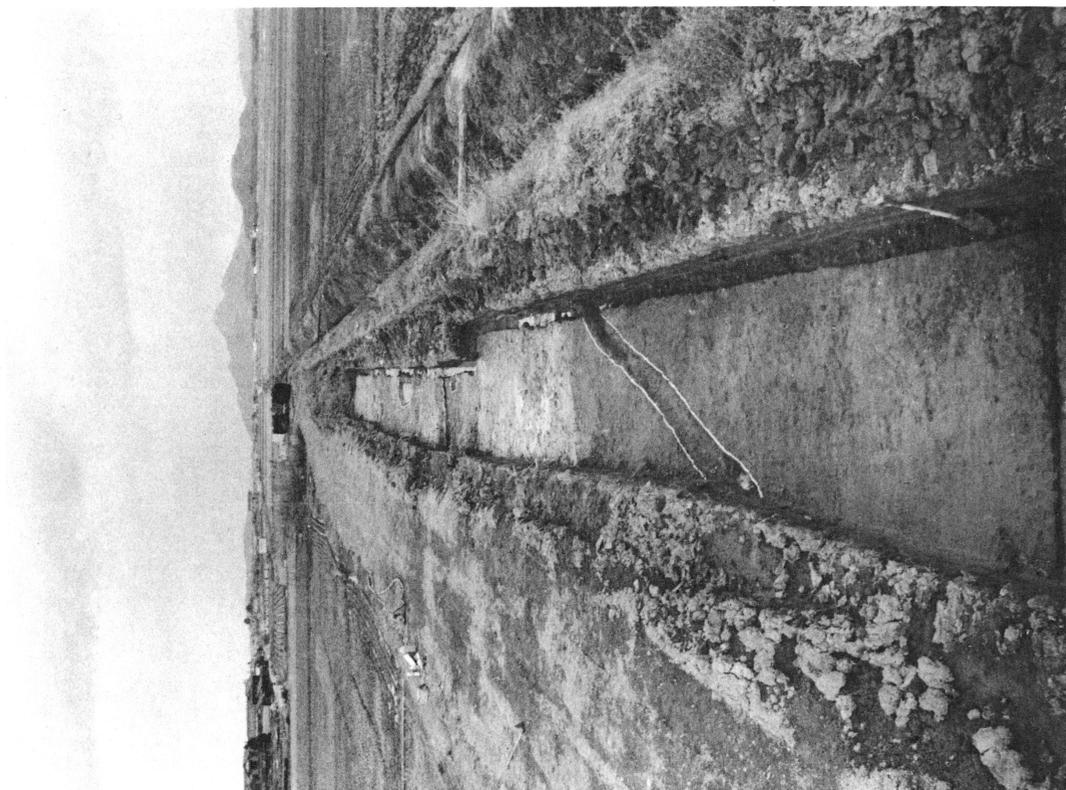
H13SD01・SD02近景 (南より)



H13土坑近景（西より）



H13SD03近景（西より）



H15全景（南より）



H15SB02近景（南より）



H17北半全景（南より）



H17SB02近景（南より）



H17北半全景（北より）



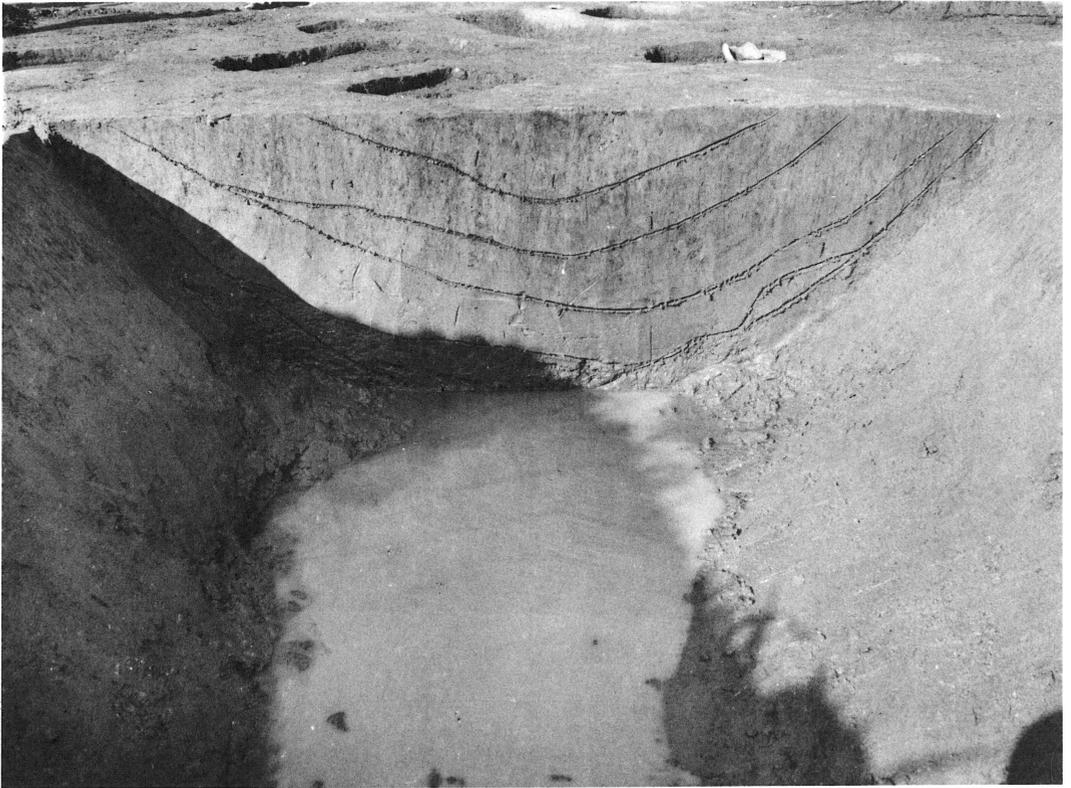
H17南半全景（南より）



H18SB03・SD05・SD06近景（東より）



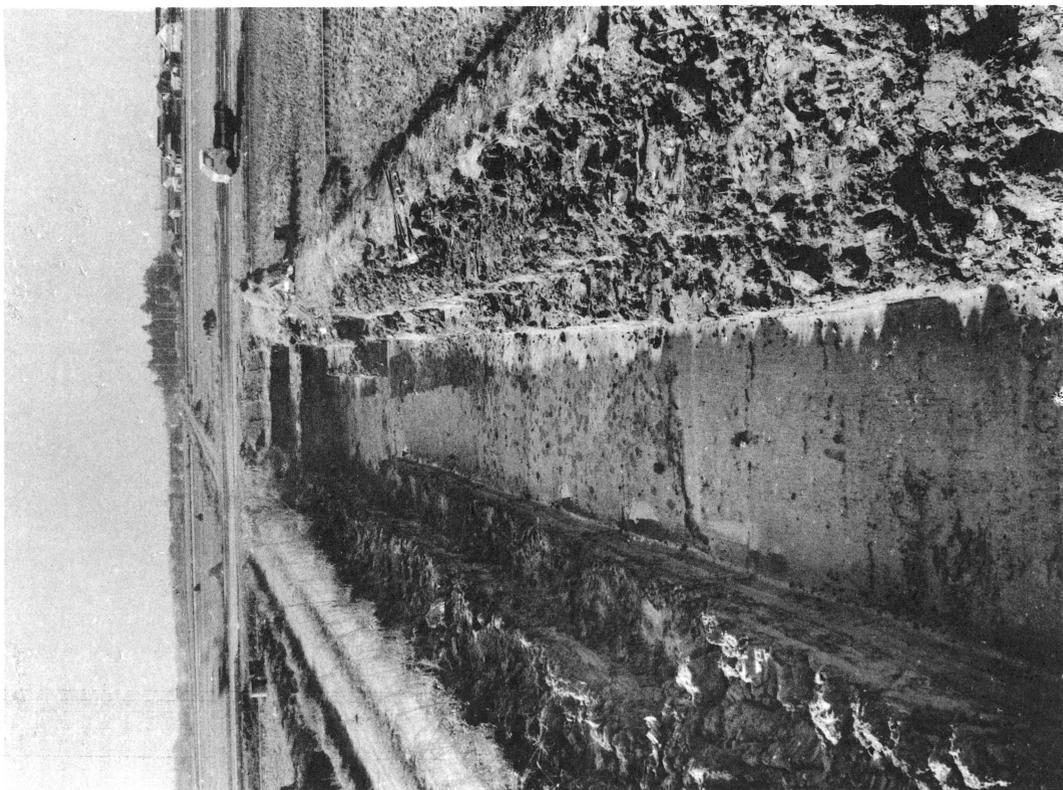
H18SB04・SD07近景（西より）



H18SD07西壁断面（東より）



H23近景（南より）



H31全景（北より）



H17ピット内土器出土状況（南より）



H20下層甕出土状況（南より）



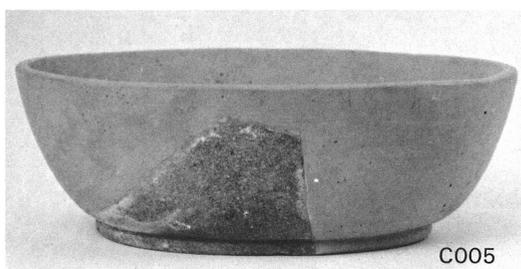
H11沼沢地下駄出土状況（北より）



H04・H05埋めもどし状況（南より）



H04埋めもどし状況（南より）



C005



C045



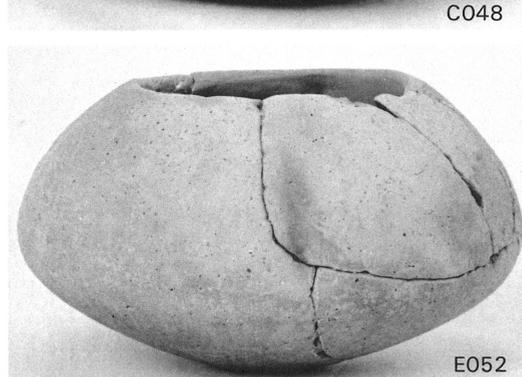
H011



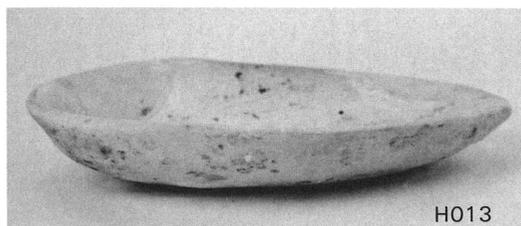
C048



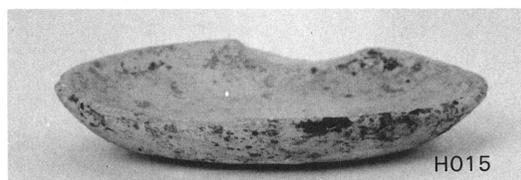
C006



E052



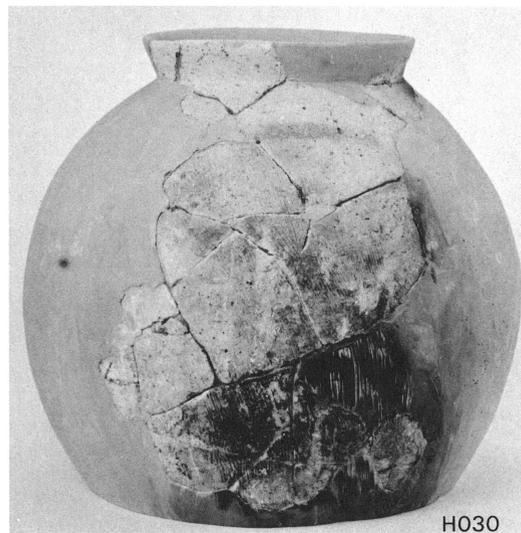
H013



H015



E060



H030



E063

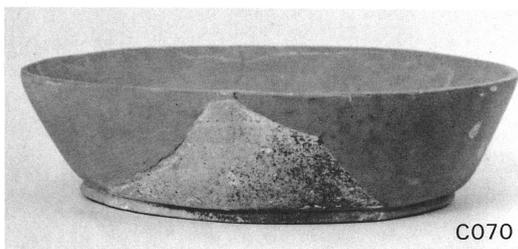
G10・11 (C005・C006・H011・H013・H015・H030)、G14 (C045)、G18 (C048)
G24 (E052・E060・E063)



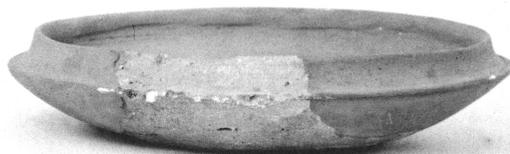
C067



C086



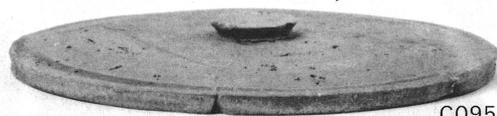
C070



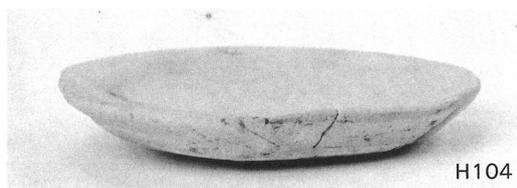
C091



C078



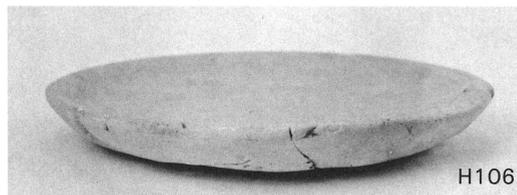
C095



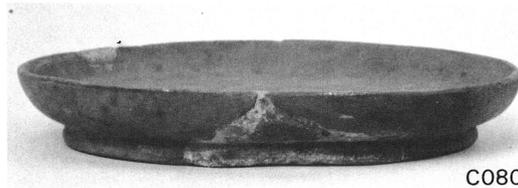
H104



C079



H106



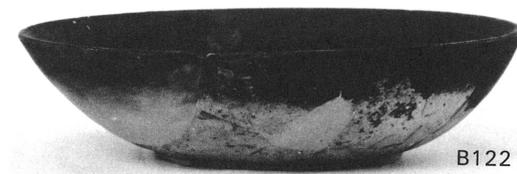
C080



H111

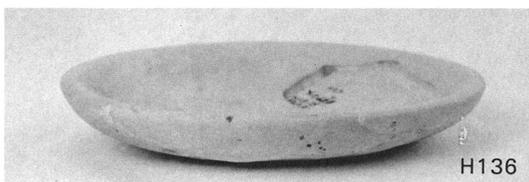


C083

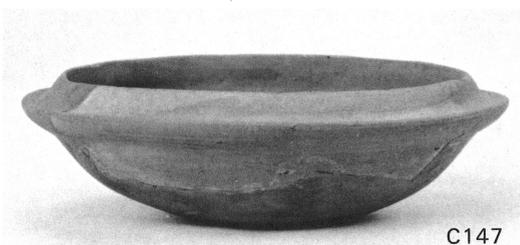


B122

H01 (C067・C070)、H02 (C078~C080・C083・C086)、H03 (C091)
H07 (C095・H104・H106・H111・B122)



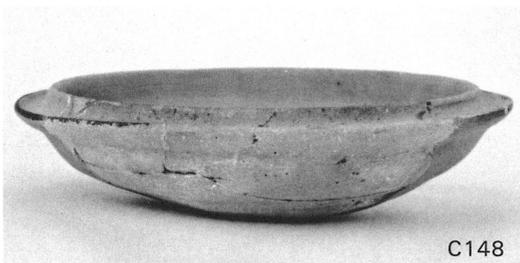
H136



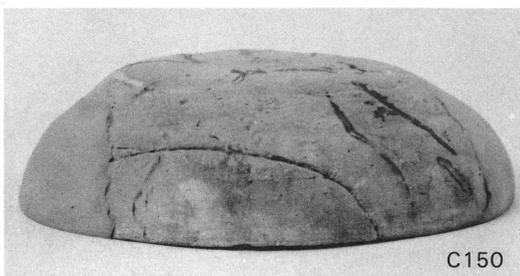
C147



C142



C148



C150



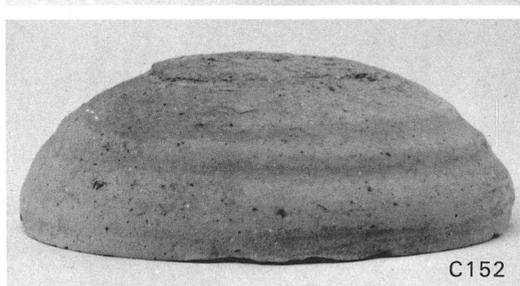
C144



C151



C145



C152

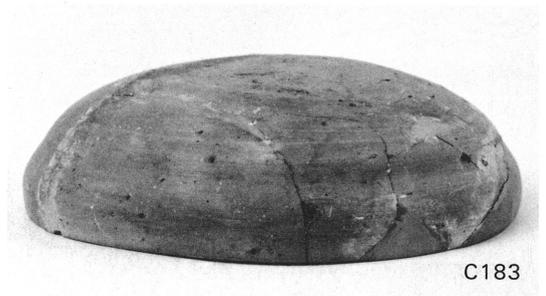
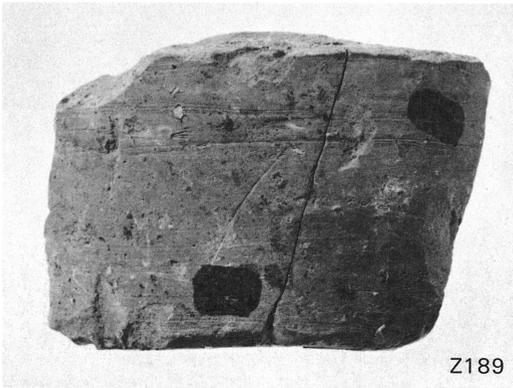


C146

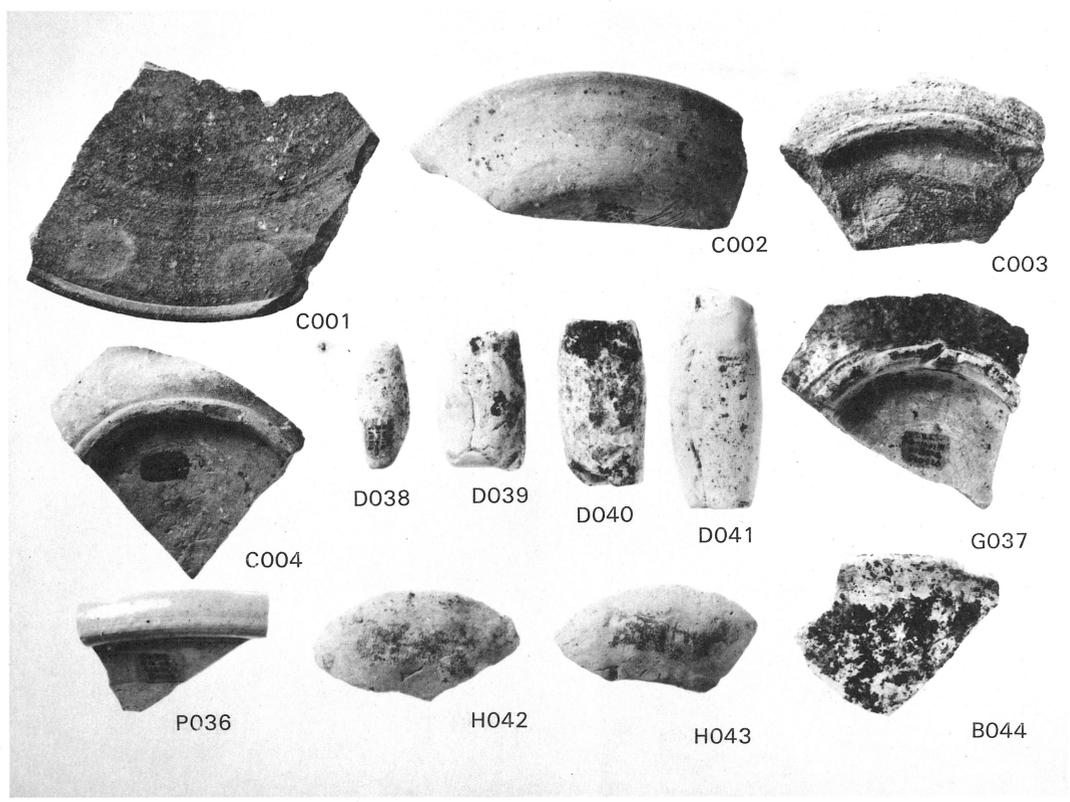


C155

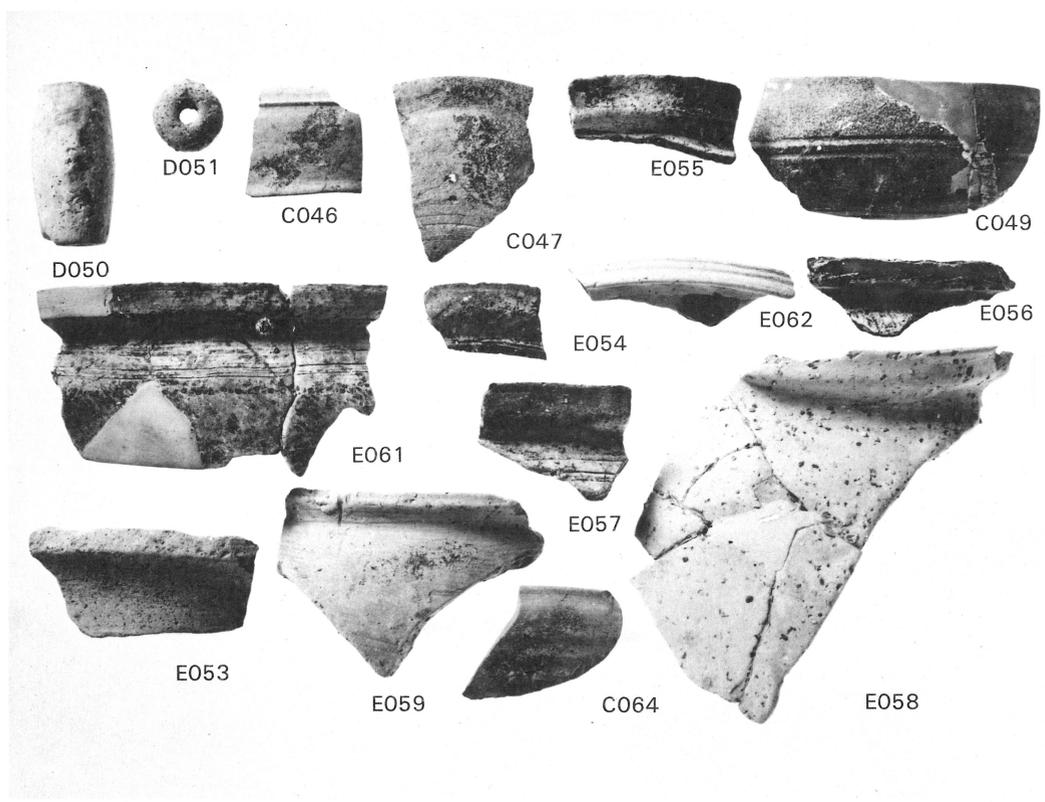
H07 (H136) 、 H12 (C142) 、 H17 (C144~C148・C150~C152・C155)



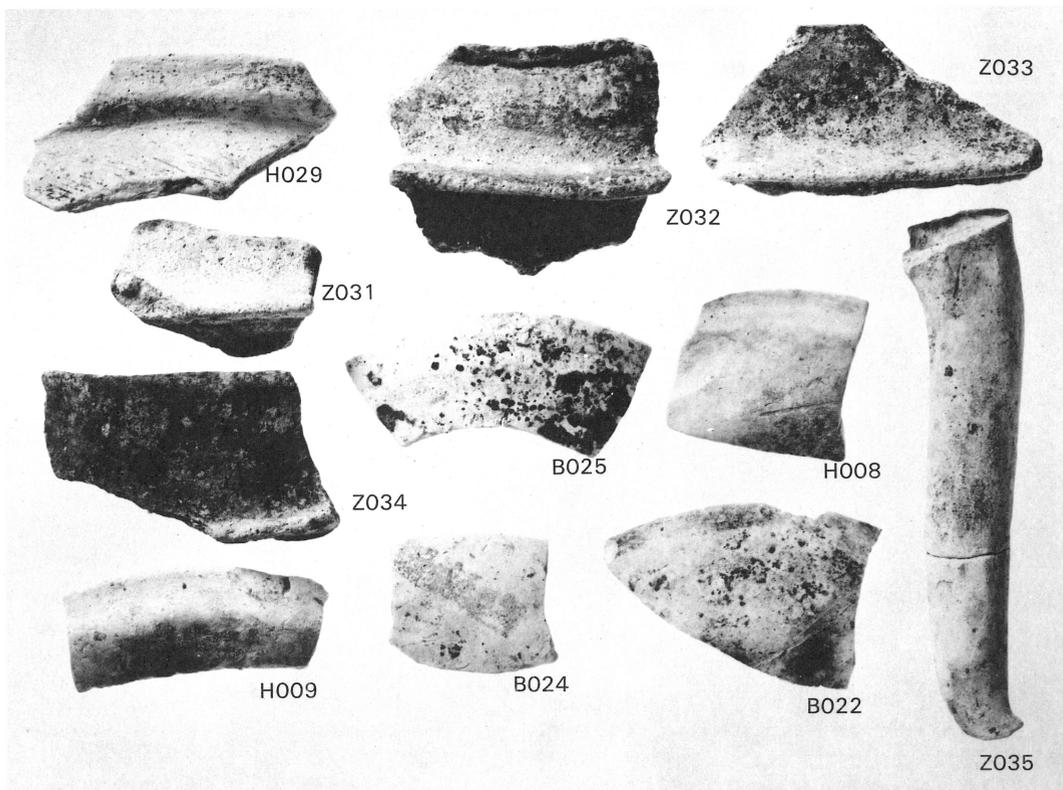
H17 (C156・C158・C165)、H22 (C183)



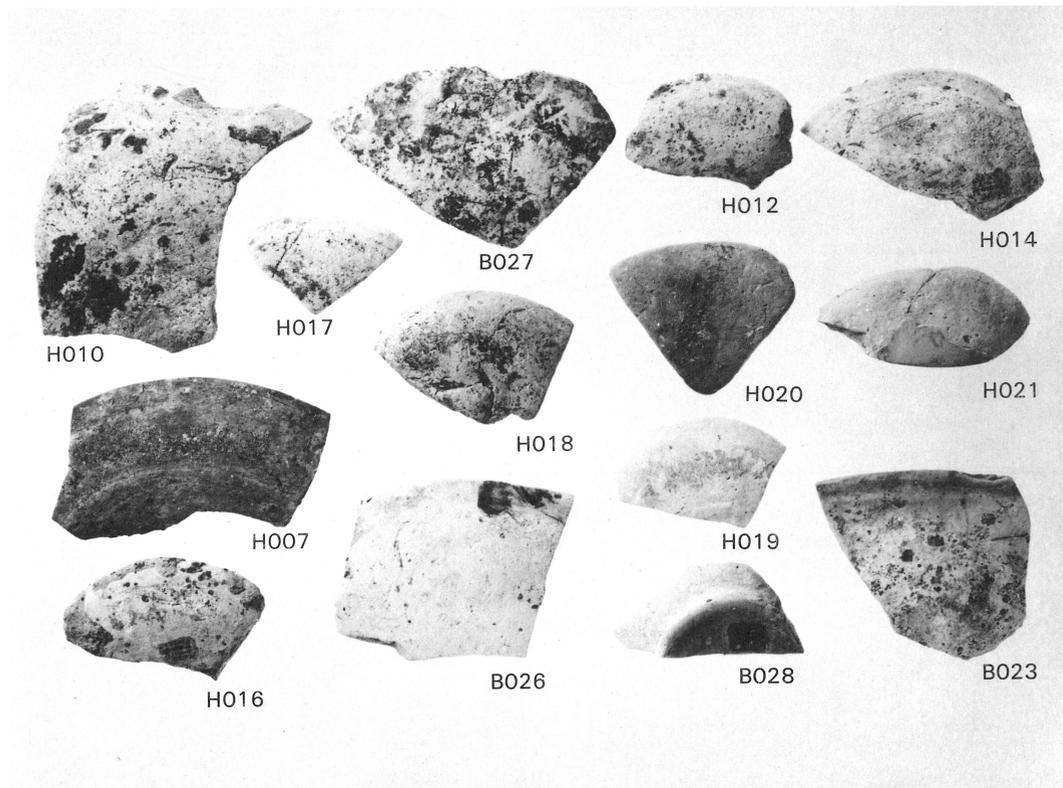
G10・11 (C001~C004・D038~D041・P036・G037)、G11 (H042・H043・B044)



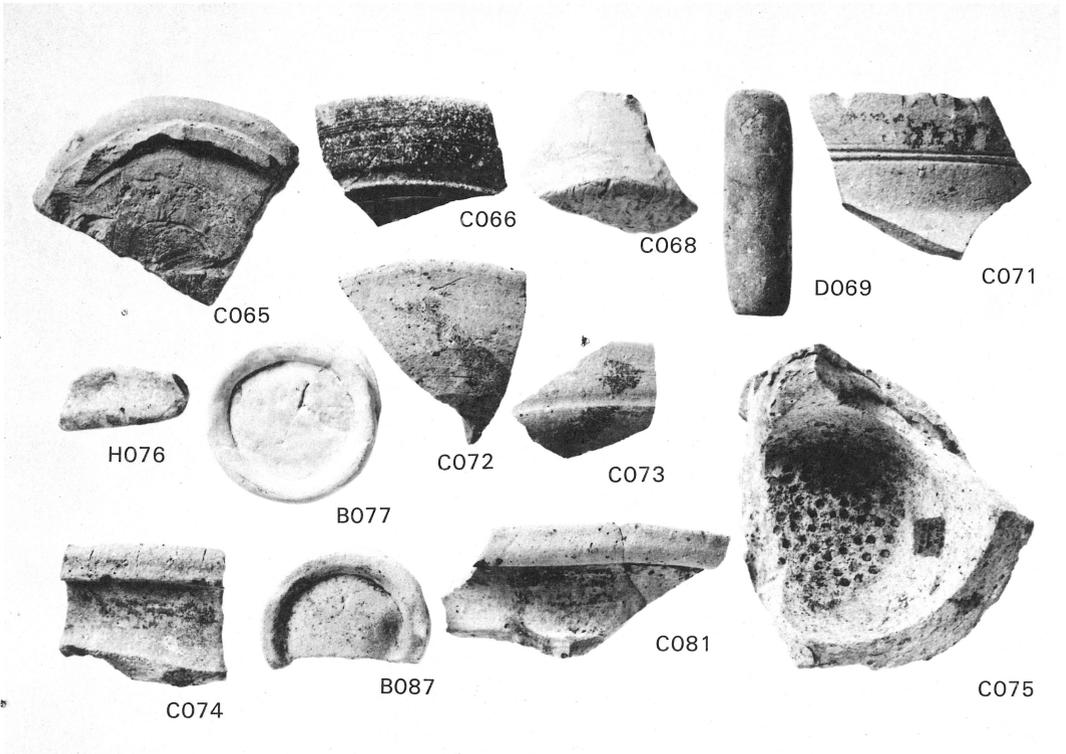
G18 (C046・C047・C049)、G21 (D050)、G23 (D051)、G24 (E053~E059
E061・E062・C064)



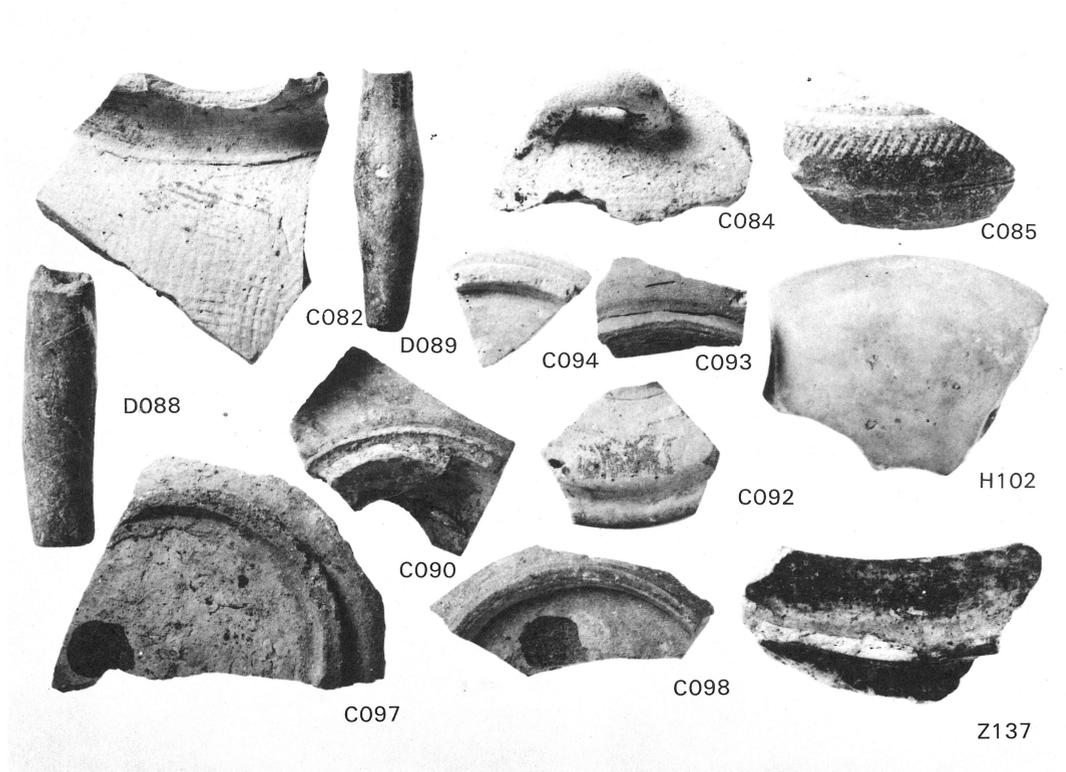
G10・11 (H008、H009、B022、B024、B025、H029、Z031~Z035)



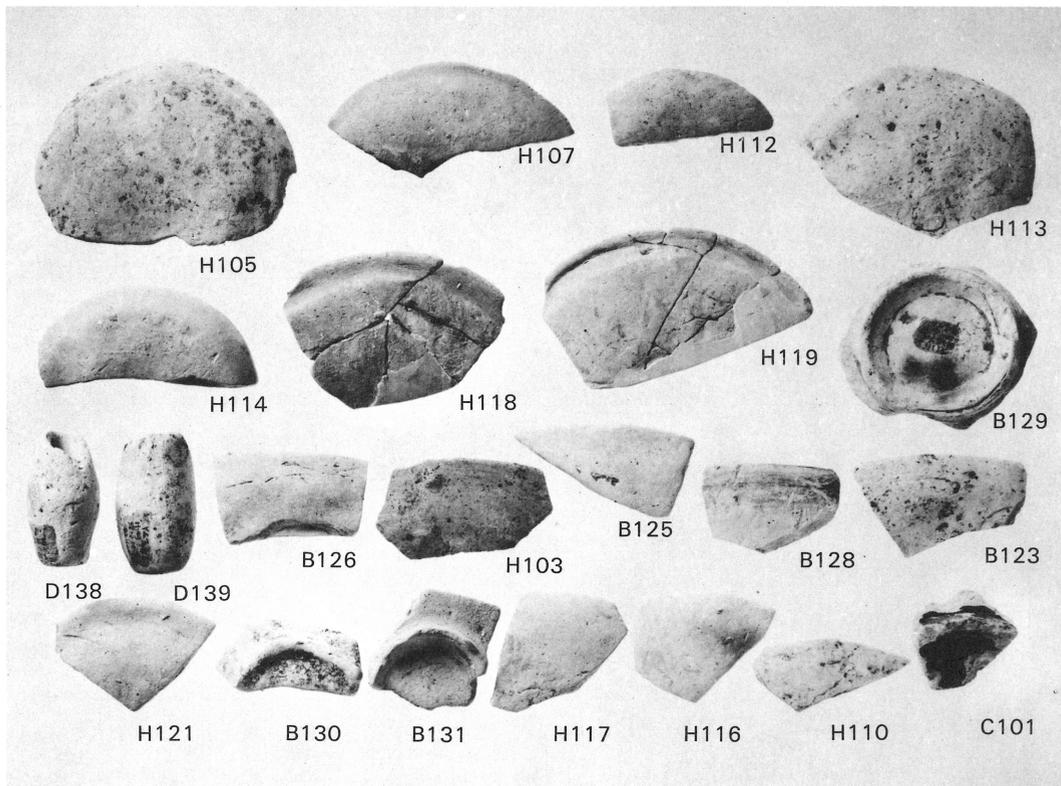
G10・11 (B007、H010、H012、H014、H016~H021、B023、B026~B028)



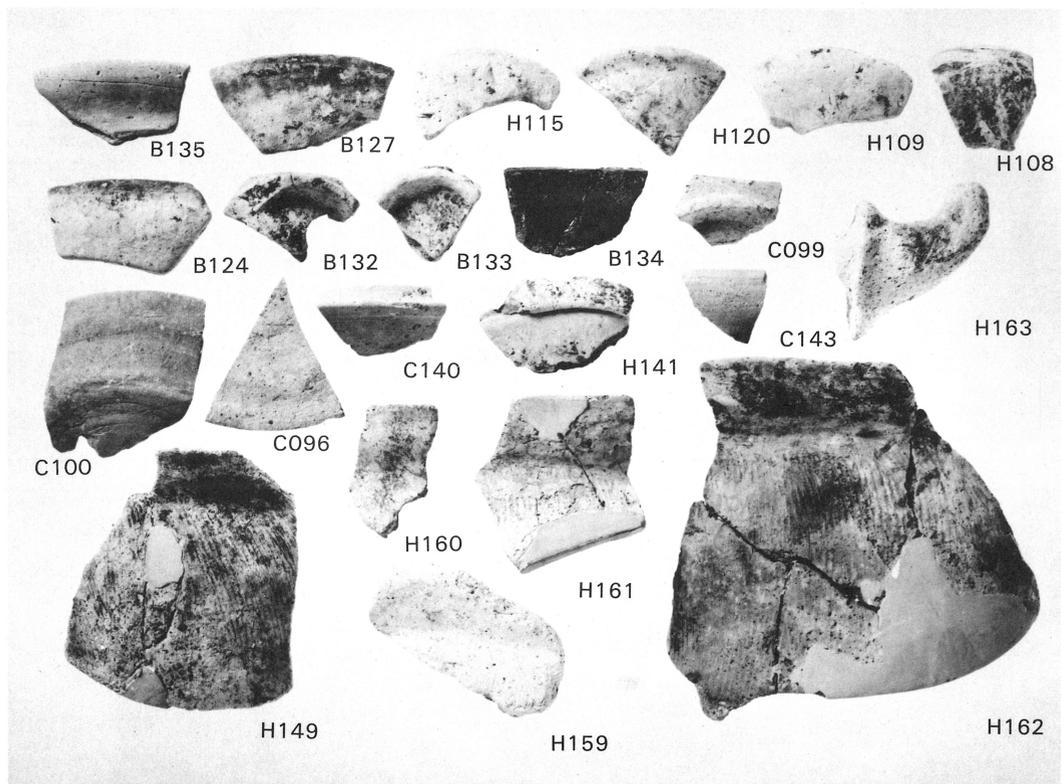
G26 (C065・C066)、H01 (C068・D069・C071~C075・H076・B077)
 H02 (B087、C081)



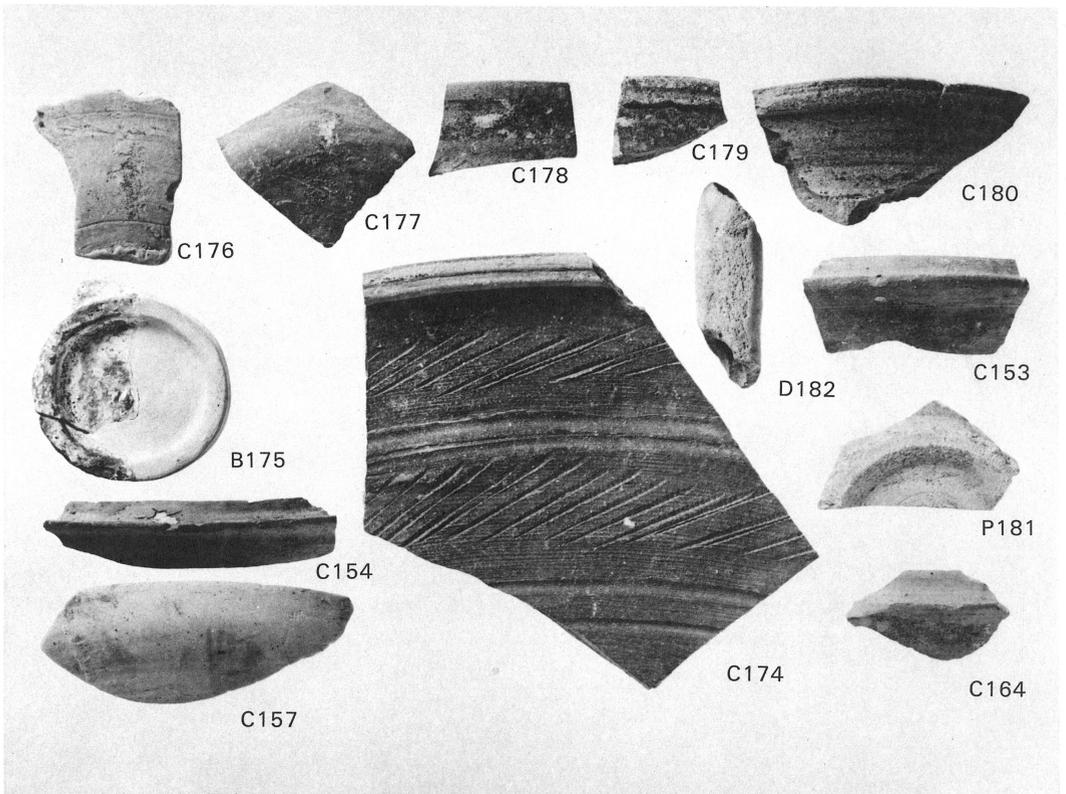
H02 (C082・C084・C085・D088・D089)、H03 (C090・C092)
 H05 (C093・C094)、H07 (C097・C098・H102・Z137)



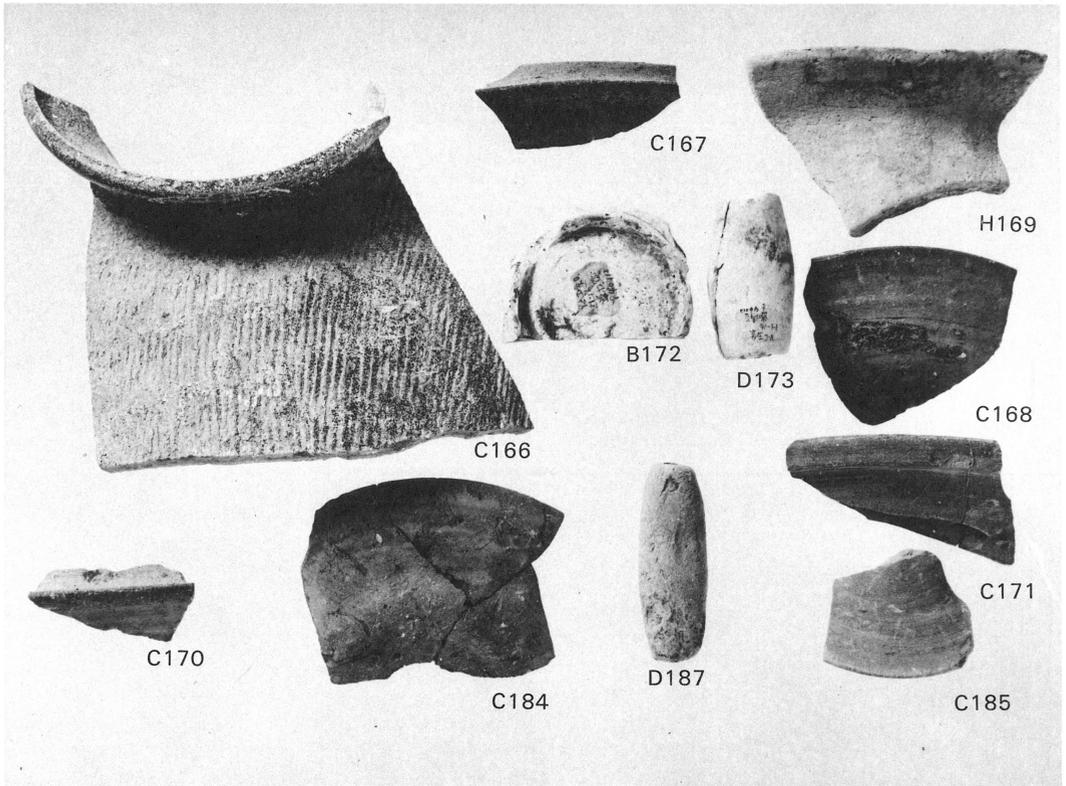
H07 (C101 · H103 · H105 · H107 · H110 · H112~H114 · H116~H119、H121、B123、B125、B126、B128~B131 · D138 · D139)



H07 (H108 · H109 · H115 · H120 · B124 · B127 · B132~B135 · C096 · C099 · C100)
H11 (C140 · H141)、H13 (C143)、H17 (H149 · 159~H163)



H04 (D182) 、H17 (C153・C154・C157・C164) 、H20 (C174・B175・C176~C180・P181)

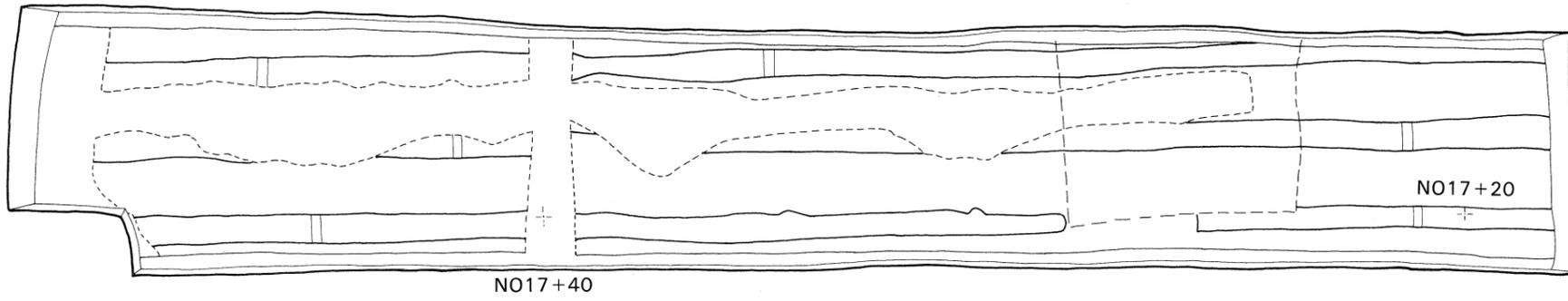


H17 (C166~C168・H169) 、H18 (C170・C171・B172・D173) 、H22 (C184・C185・D187)

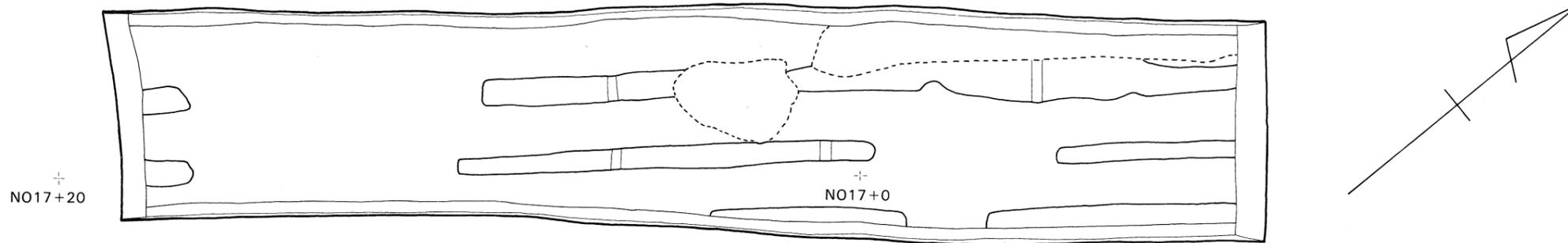


遺跡周辺旧地形図（2万分の1） 明治28年

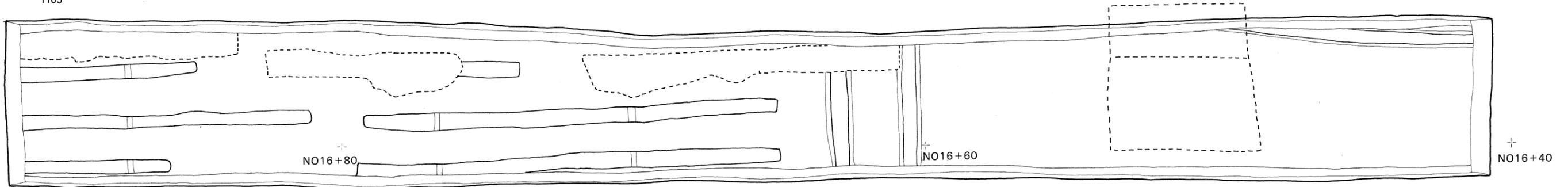
H01



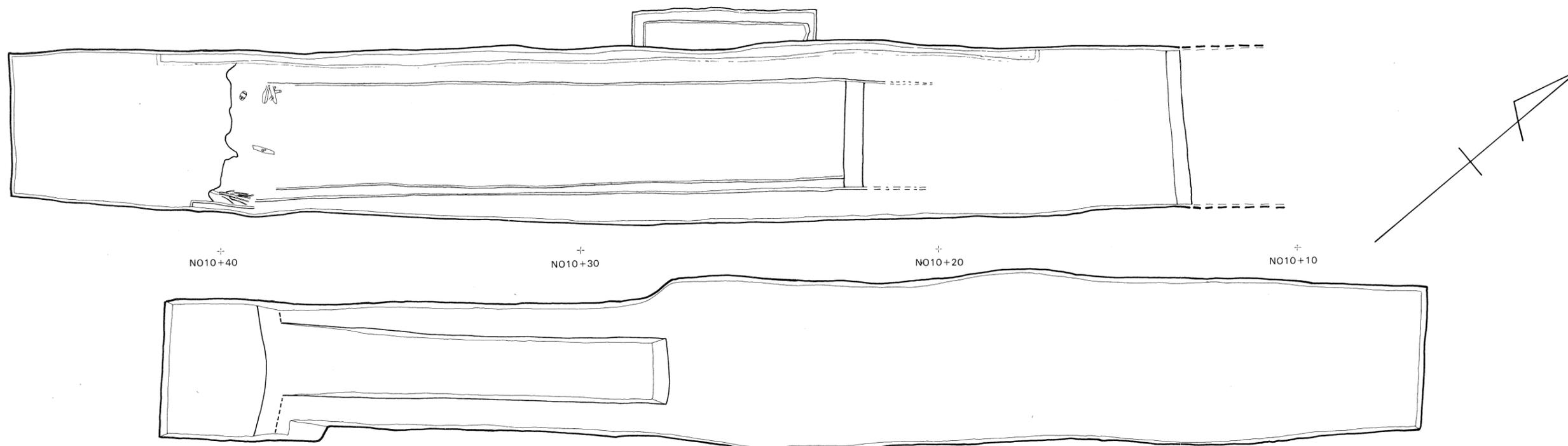
H02



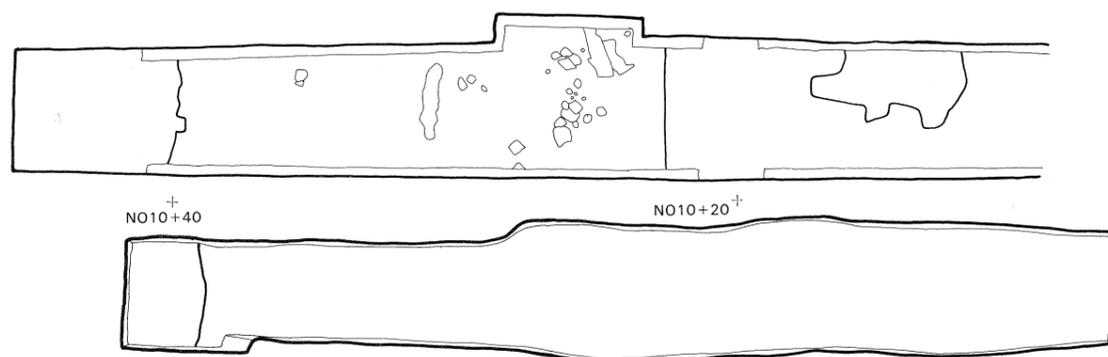
H03



H01、H02、H03トレンチ平面実測図

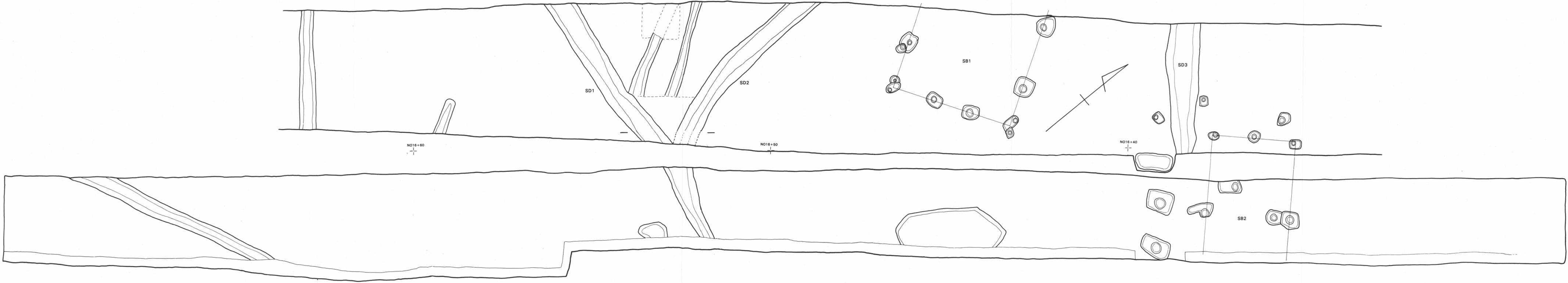


H06、H07トレンチ第2遺構面平面実測図

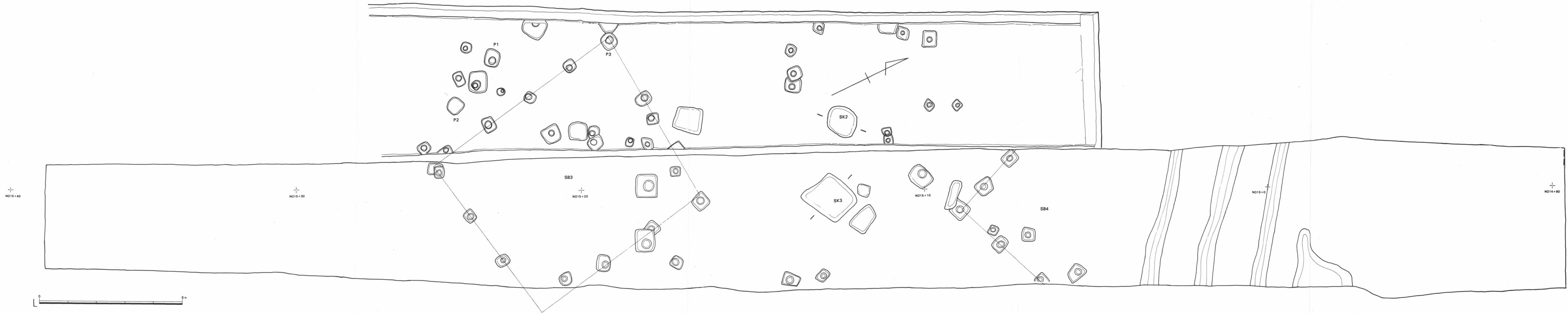


H06、H07トレンチ第1遺構面平面実測図

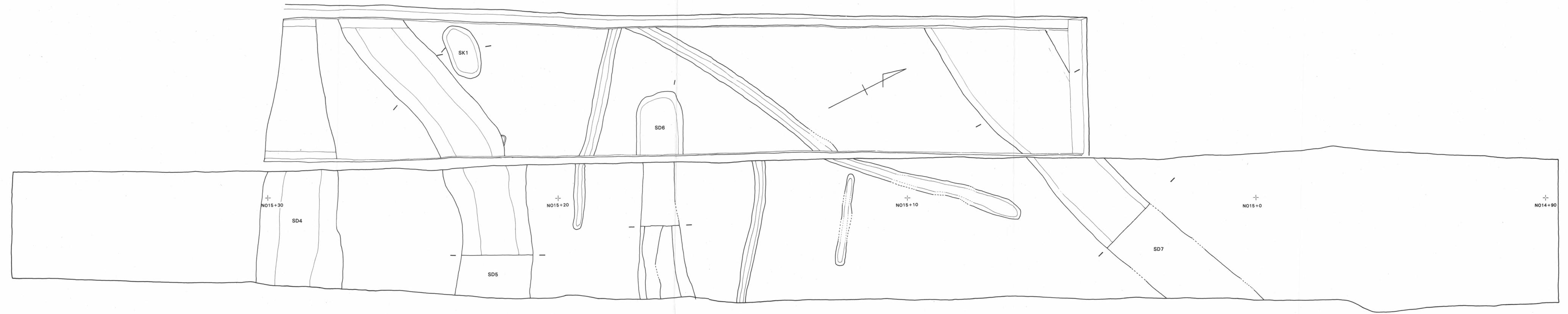




H13、H15トレンチ第2遺構面平面実測図

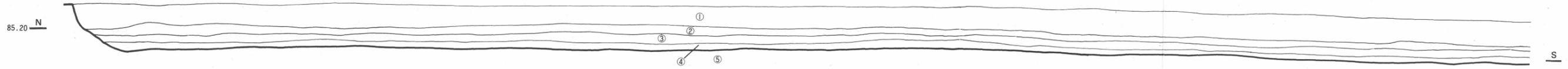


H17、H18トレンチ第2遺構面(A)平面実測図



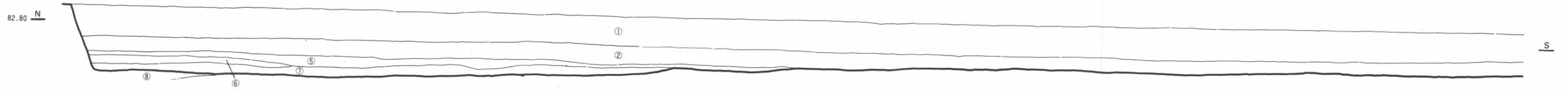
H17、H18トレンチ第2遺構面(B)平面実測図

H01東壁断面

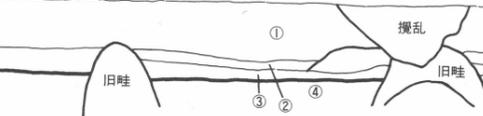


- ① 客土
- ② 攪乱
- ③ 青褐色粘土
- ④ 黄灰褐色粘土
- ⑤ 灰黑色粘土

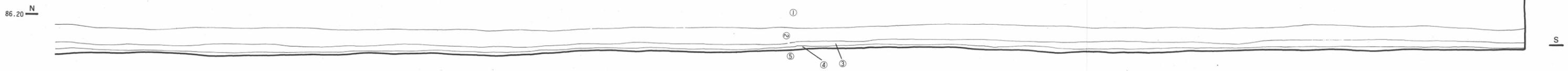
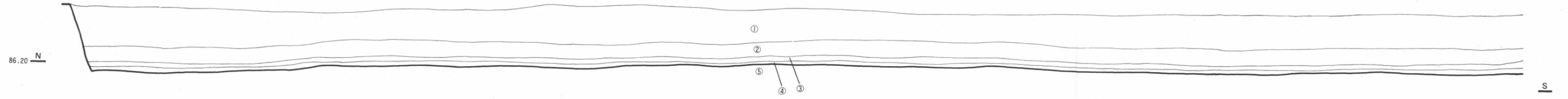
H03東壁断面



- ① 客土
- ② 攪乱
- ③ 青褐色粘土
- ④ 黄灰褐色粘土
- ⑤ 灰黑色粘土
- ⑥ 灰褐色粘土
- ⑦ 暗灰褐色粘土
- ⑧ 灰白色砂土



H04東壁断面

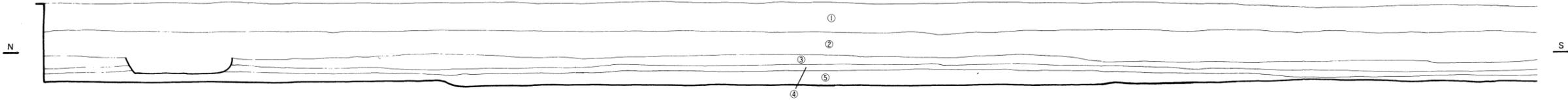


- ① 客土
- ② 攪乱
- ③ 青褐色粘土
- ④ 黄灰褐色粘土(床土)
- ⑤ 青灰褐色粘土



H01、H03、H04トレンチ断面実測図

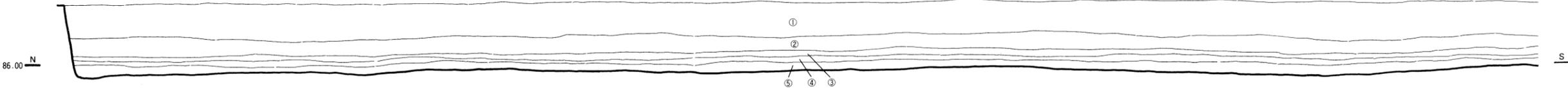
H05トレンチ東壁断面



- ① 客土
- ② 攪乱
- ③ 青褐色粘土
- ④ 青灰褐色粘土
- ⑤ 青灰褐色粘土

86.20

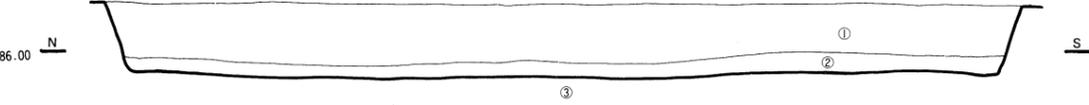
H06トレンチ東壁断面



- ① 客土
- ② 攪乱
- ③ 青褐色粘土
- ④ 黄灰褐色粘土
- ⑤ 青灰褐色粘土

86.00

H11トレンチ東壁断面



- ① 客土
- ② 青褐色粘土
- ③ 青褐色砂土

85.50

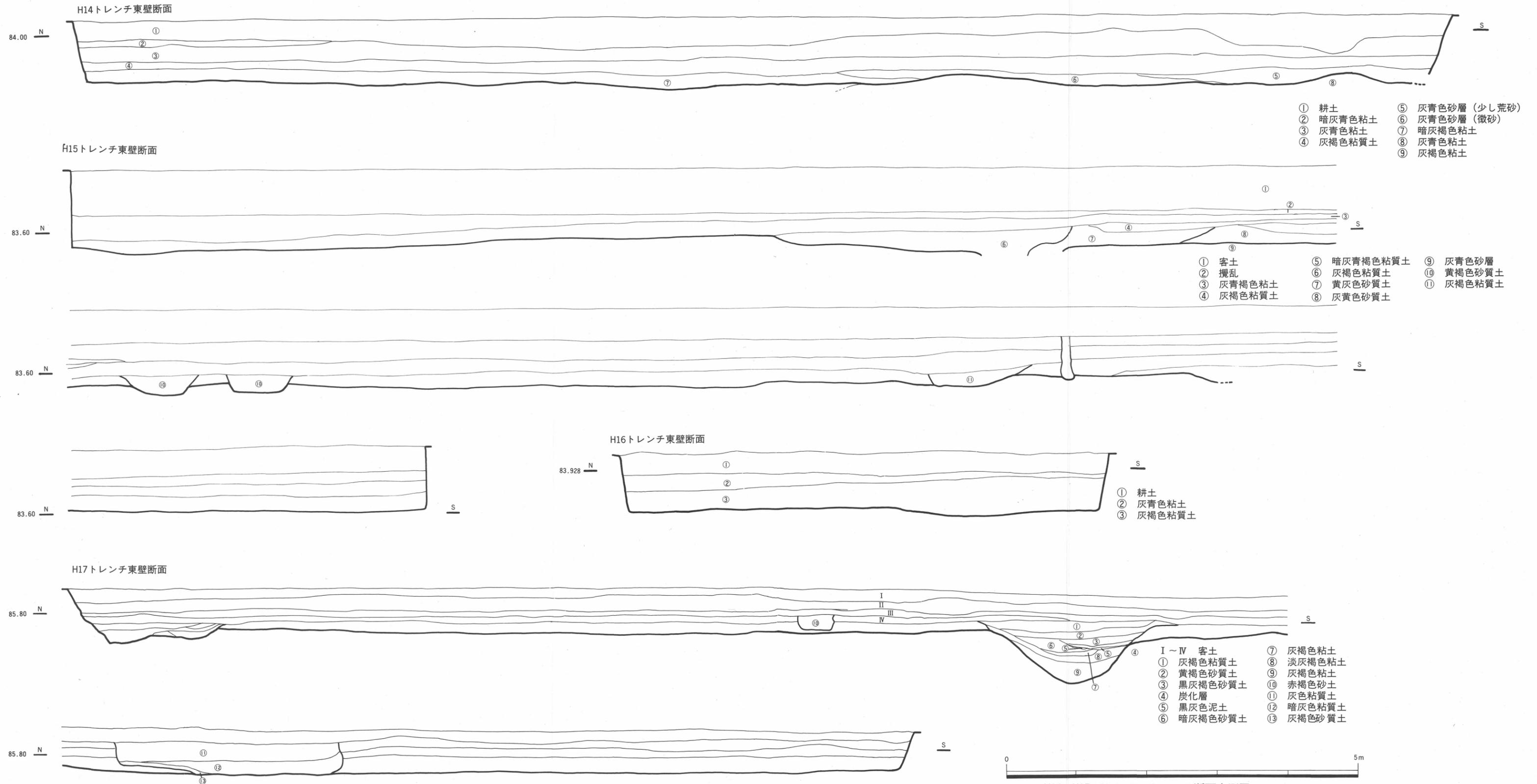
H12トレンチ東壁断面



- ① 客土
- ② 攪乱
- ③ 暗灰青褐色粘土
- ④ 灰黄色砂層

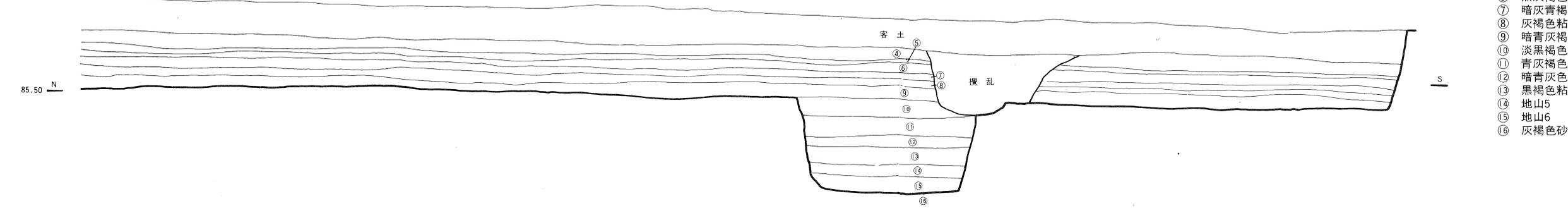
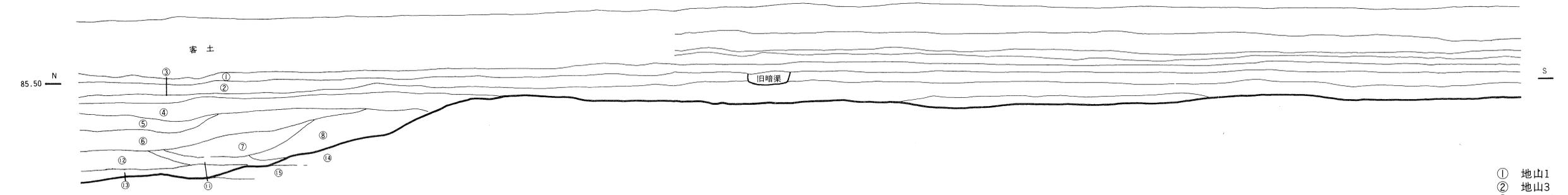
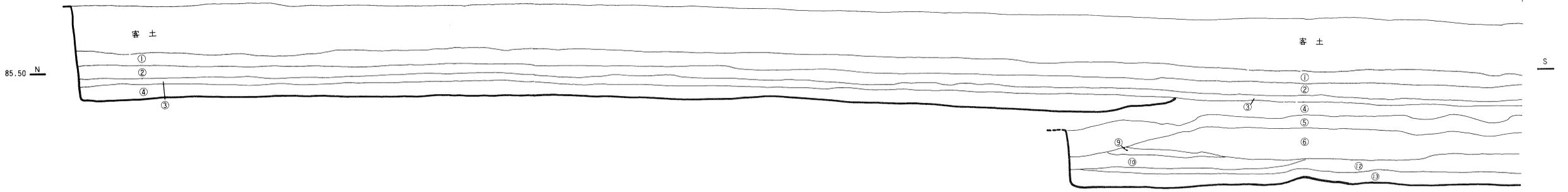


H05、H06、H11、H12トレンチ断面実測図



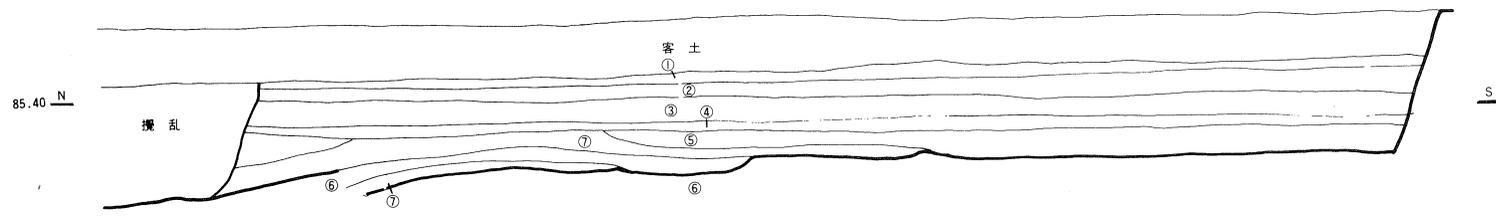
H14、H15、H16、H17トレンチ断面実測図

H18トレンチ東壁断面



- ① 地山1
- ② 地山3
- ③ 地山3'
- ④ 暗灰褐色粘質土層
- ⑤ 暗黒灰褐色粘土層
- ⑥ 黒灰褐色粘土層
- ⑦ 暗灰青褐色粘土層
- ⑧ 灰褐色粘土層
- ⑨ 暗青灰褐色粘土層
- ⑩ 淡黒褐色粘土層
- ⑪ 青灰褐色粘土層
- ⑫ 暗青灰色粘土層
- ⑬ 黒褐色粘土層
- ⑭ 地山5
- ⑮ 地山6
- ⑯ 灰褐色砂礫層

H23トレンチ東壁断面

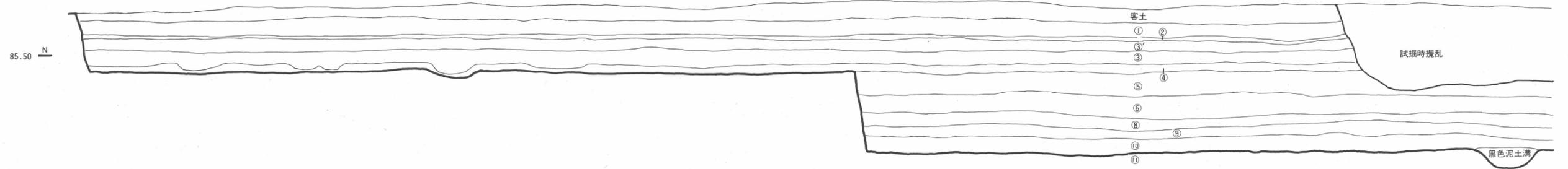


- ① 暗灰褐色粘質土層
- ② 暗黒灰褐色粘質土層
- ③ 黒灰褐色粘土層
- ④ 暗灰青褐色粘土層
- ⑤ 灰褐色粘土層
- ⑥ 暗青灰褐色粘土層
- ⑦ 淡黒褐色粘土層
- ⑧ 黒褐色粘質土層
- ⑨ 黒灰褐色粘土層



H18・H23トレンチ断面実測図

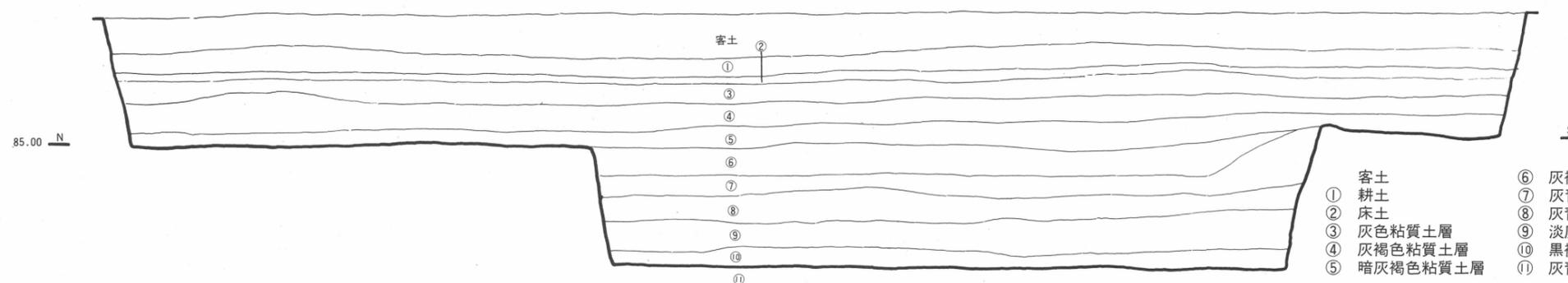
H33トレンチ東壁断面



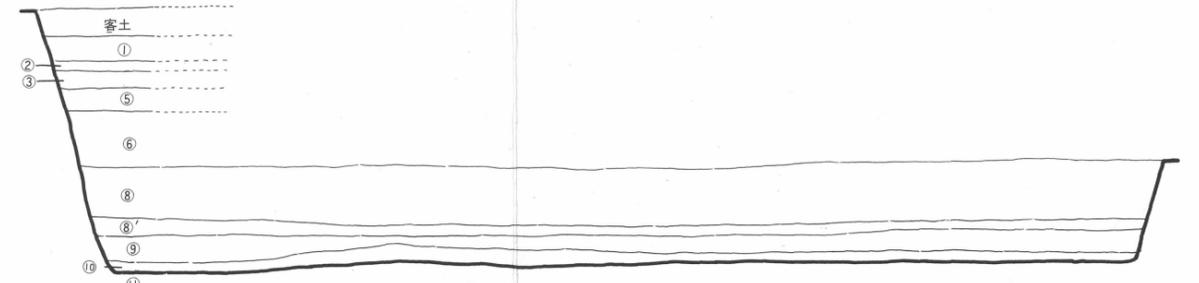
- 客土
- ① 耕土
- ② 床土
- ③ 灰色粘質土層
- ④ 灰褐色粘質土層
- ⑤ 暗灰褐色粘質土層
- ⑥ 灰褐色砂質土層
- ⑦ 灰青色砂質土層
- ⑧ 灰青褐色粘質土層
- ⑨ 淡灰青褐色粘質土層
- ⑩ 黒褐色泥土層
- ⑪ 青灰色グライ粘土層



H34トレンチ東壁断面

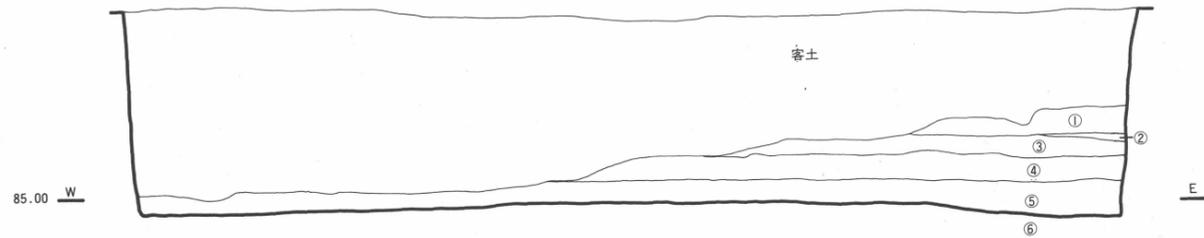


- 客土
- ① 耕土
- ② 床土
- ③ 灰色粘質土層
- ④ 灰褐色粘質土層
- ⑤ 暗灰褐色粘質土層
- ⑥ 灰褐色砂質土層
- ⑦ 灰青色砂質土層
- ⑧ 灰青褐色粘質土層
- ⑨ 淡灰青褐色粘質土層
- ⑩ 黒褐色泥土層
- ⑪ 灰青色グライ粘土層



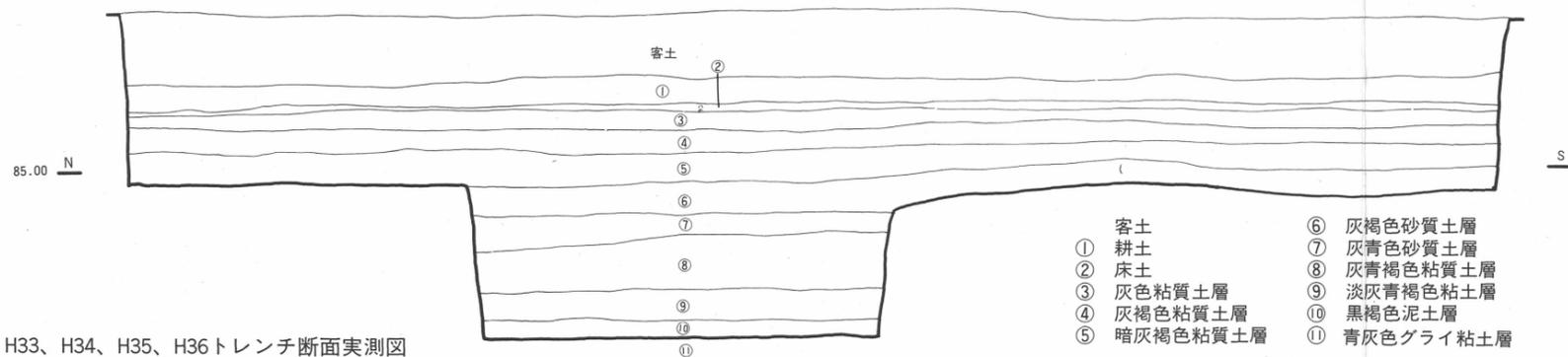
- 客土
- ① 耕土
- ② 床土
- ③ 灰色粘質土層
- ④ 灰褐色粘質土層
- ⑤ 暗灰褐色粘質土層
- ⑥ 灰褐色砂質土層
- ⑦ 灰青色砂質土層
- ⑧ 灰青褐色粘質土層
- ⑨ 淡灰青褐色粘質土層
- ⑩ 黒褐色泥土層(西側の遺物包含層であろう)
- ⑪ 青灰色グライ粘土層

H35トレンチ北壁断面



- 客土
- ① 耕土
- ② 床土
- ③ 灰色粘質土層
- ④ 灰褐色粘質土層
- ⑤ 暗灰褐色粘質土層
- ⑥ 灰褐色砂質土層

H35トレンチ東壁断面



- 客土
- ① 耕土
- ② 床土
- ③ 灰色粘質土層
- ④ 灰褐色粘質土層
- ⑤ 暗灰褐色粘質土層
- ⑥ 灰褐色砂質土層
- ⑦ 灰青色砂質土層
- ⑧ 灰青褐色粘質土層
- ⑨ 淡灰青褐色粘質土層
- ⑩ 黒褐色泥土層
- ⑪ 青灰色グライ粘土層

H33、H34、H35、H36トレンチ断面実測図



昭和63年3月

県道大津守山近江八幡線単独道路改良工事に伴う

五条遺跡発掘調査報告書

—中主町五条所在—

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財
保護課

大津市京町四丁目1番1号

Tel(0775)24-1121(内線2536)

財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel(0775)48-9780・48-9781

印刷・製本 明文舎印刷商事株式会社

長浜市朝日町22-16

Tel(0749)63-1441(代)